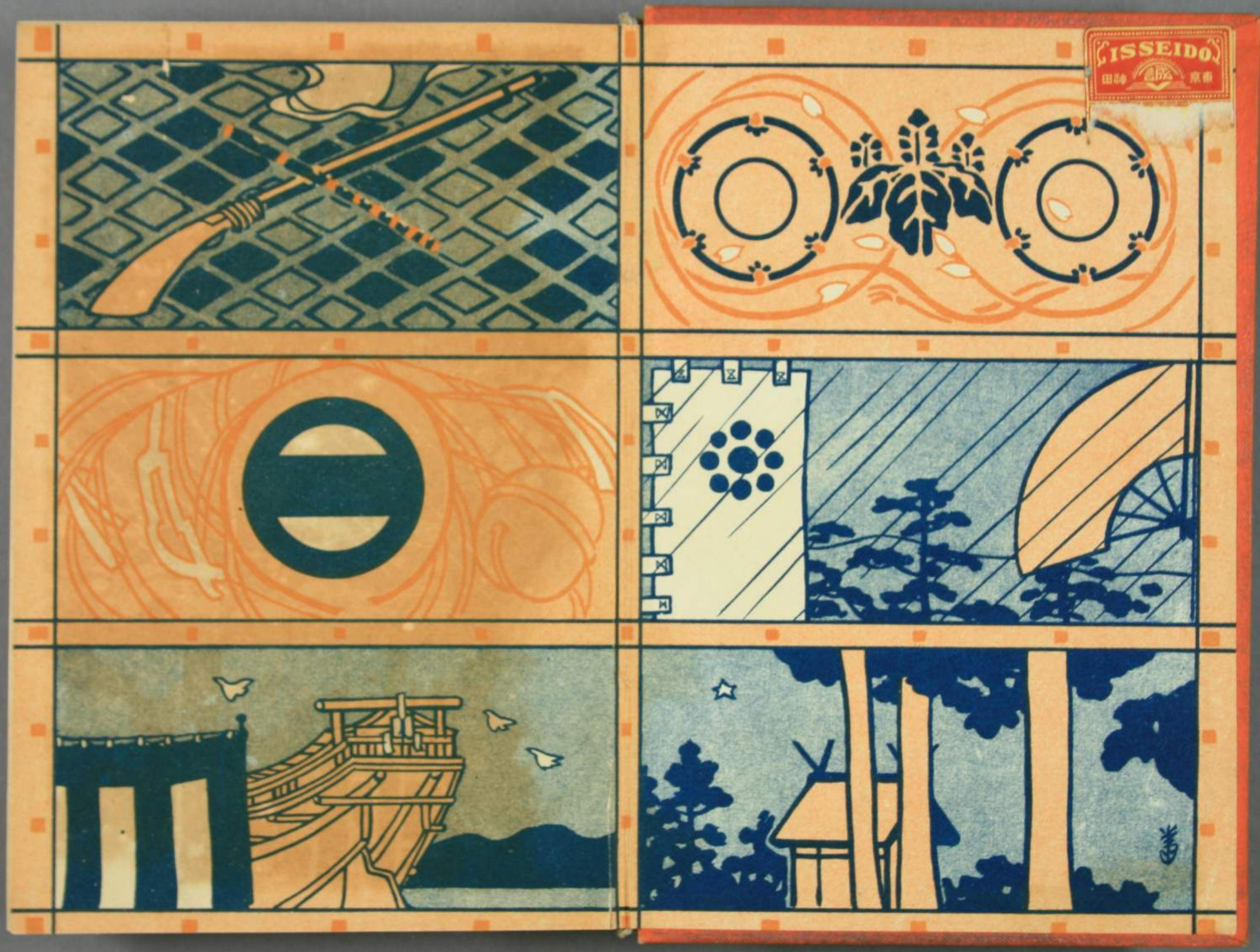
史劇十二曲

史劇十二曲

山寄

本間文庫
文庫 14
D 280

博文館所


ISSEIDO
東京 神田

史劇十二曲

山崎紫紅著

文庫14
D280

作者の承諾なくして上塲することを禁ず

この書を坪内雄藏先生に献ぐ。

庫14
280

『七つ桔梗』の出板以後、明治四拾年から同四拾一年の末までに作つた脚本を纒めて書物にした、こんなものでも、作者は、二年間の尊き汗と血との紀念だと思つて居る。『前途』の一篇は史劇ではないが、都合でここに收めた。

作者は漸進主義だ、階段主義だ、飽くまでも實行主義だ、弱く見えるのは反りて內心が強いつもりだ、世と離れずに、而して世を進めて行きたい、華嚴を說かず、阿含方等を說かうと思ふ、作者には法華の大乘義を說く力は無いかも知れぬ、しかし作者は精進勇猛、自己により

庫14
280

てその機を現はさんことを期するものである。

作者はいま子供の讀む書物を習つて居る、その中に

こんなことが書いてあつた。

La vraie gloire et la vraie noblesse, c'est celle qu'on acquiert soi-même par son travail et son mérite.

作者には、こんな普通のことも、今更のやうに感心せらるるのである。

明治四十二年四月

紫紅識

目次

歌舞伎物語……一
その夜の石田……八五
前途？……一〇七
信玄最期……一三一
亂れ笹……一七一
艤……二〇七
明智光秀……二四九
松一木……二九七
戀の洞……三二五
三七信孝……三七五
當流鉢木……四七一
破戒會我……五〇三

みかへし……久保田米齋
寫眞板……五葉

左團次　時藏　女寅　紫扇　小團次

小團次　紫扇

吉團　　次團左　　寅女　　升左

明治四十一年三月……明　治　座

重14
80

花も散るわ、人間の命も散らう。

手と手の觸れて花となり、目と目の合ひて火と燃ゆる。

上　　同

E14
80

史劇十二曲

歌舞伎物語

山崎紫紅著

（場）

序幕　伏見城中庭内

返し　男山八幡社頭

二幕目　土屋左馬助の役宅

四條河原阿國の住居

三幕目　京都清水寺舞臺

大詰　伏見城中能舞臺
同　見所
元の舞臺

（時）
慶長十二年二月より三月。

（人）
越前中納言秀康
土屋左馬助昌雄（秀康の老臣）
昌雄の子右京昌吉
小姓足羽安居丸
小姓宮井久市
本多伊豆守富正（秀康の老臣）
速水甲斐守守久
代官大岡十太夫
實は本多佐渡守正信
醫師今大路道三
歌舞伎役者出雲お國
同　瓶江
同　名古屋山三郎
同　奴　傳介
芝居の座元
土屋の室峰尾
外

序幕　伏見城中庭内

桃の花盛り所所に幕を引廻す。（慶長十二年二月八日のこと）庭石に腰を掛けなどしたる武士四人語り合ふ。奥にて囃子の音す。

武士の一　いや各、今日は殿御誕生の祝儀とあつて、我等までへ酒をたまはせられ、その上無禮講の仰せ出し、御兒衆を追驅けて桃の花をかつ散らいたわ。

武士の二　右大臣家から送り越された伊丹の銘酒、飲うで飲うで飲續け、一睡を催して、この敷石に寢まり申したら、誰れやらむ戯謔を致し居つたよ。

武士の三　ははは、あつたら武士の八幡座へ、紙切を結付けられた辨疏か、我等は生得の下戸なれば、一二杯を下されたら、くるくると眩が致いて、侍女衆に水を所望致いたら、戯らせられて、また冷こいのを飲まされてぢや。

武士の四　我等酒も參る、武邊も仕る、御主には惚切つたが、ただ氣に入らぬは歌舞伎好き、あの囃子の掛聲は、生溫こうて腹が苛られる、なでうに歌舞伎を好かせらるるぞ。

武士の一　今に始めぬ偏屈いふぞ、お身染染と見物の致さぬ程に、左樣づれの事を仰有るぢや。

武士の二　舞人は聞ゆる出雲の阿國、いかさま天人の影向か、いや天人にあの笑顔はおざらぬ、鶯の聲を出して、山雀に舞ふさまを、好かぬ男は掠烏ぢや。

武士の三　四條の河原に小屋を建て、芝居とやらの噂は聞いたが、見るは今日が初めて、いかにも顔も美しく、舞の手も一段と見事な者ぢや。

武士の四　各はきつい執心ぢやの、我等女はいかい嫌ぢや、まいてその女づれのびらしやらと舞ひひろぐのは疎ましいわい。

大岡十太夫旅裝にて出づ、

十太夫　左馬殿は何れに在すぞ。

武士の一　さいふ御身は何者ぢや。

十太夫　是は是は某は上りの者、苗字は大岡十太夫、江戸にては輕き役を勤め居れど、もと左馬殿とは竹馬の友、久久にて對面なしたく、邸へ尋ね參りし所御城内に出仕と聞き、猶豫のならぬ火急の旅、對面せぬも殘念なれば推して是れへは參つてござる。

武士の一　なに土屋殿に逢ひたいとや。

武士の二　御家老はあれにござる。

十太夫　いかにも左馬殿が居らるゝわ。

十太夫行かむとす。

武士の三　待たれい、庭先なりとて要害の繩張、

武士の四　是までの推參さへ無遠慮千萬、

武士の一　たとへ土屋殿の知邊なりとも、

武士の二　一寸たりとも御身の土足を、

武士の一　奥の方へ入れさせうか。

十太夫　むむ、いかにも我等が無禮であつた、さらば何卒左馬殿を是れへ御呼寄せ下されたし。

武士の一　左樣に仰せあるからは、いかにも土屋殿へ取次致さう。

武士の二　さらば我等が參らう。

十太夫　なにとぞ御申次下されい。

武士の二下場。直に土屋左馬助を伴ひ來る。左馬助は十太夫の顔を見て驚倒す。

十太夫　左馬殿御健勝にて珍重に存ずる。

左馬　貴殿も御無事て祝着に存ずる。

十太夫　さて今回火急の用事出來、泉州まで罷り越す、久しく御意得申さぬ

からに、旅掛のまま立寄申した。

武士の一　さては此人は御近付にござりまするか。

左馬　いかにも我等が竹馬の友ぢや。

武士の一　さりとは存ぜず無禮の段、ひとへに御詫つかまつる。

十太夫　我等も無禮を仕つた、御介意下されまいぞ。

武士等は匆匆に四散す。左馬助は四方を見遣り。

左馬　思ひがけぬ本多殿御先觸もなく、かつは怪しき姿にて、御發向は心得ぬ、先づ御奥へ御通り下さるべし。

十太夫　左馬にも似合はぬこと、人目を忍び某が輕輩の名を假りて、都へ登り參りしは、外ならぬ天下の爲、恐れ多くも大御所より、御身への密使に擇ばれた。

左馬　詮意とあらば猶のこと、せめて是れへ。

石上へと招く。十太夫は依然として、

十太夫　いやいや何處までも人目は代官の十太夫。

左馬　いかさま怪しめられては詮なきこと、さらば其儘にて、

十太夫　いかにも詮意を聞かせ申さう。

左馬　はあ。

十太夫　先づ第一に問ひたきは、大御所の仰せとあらば、如何なる難事も勤めやうかの。

左馬　事新しき仰せかな、もと某は甲州生れ、大御所の御引立にて、斯樣の身には罷りなる、今更の御問は、恐れながら御恨みに存じ奉る。

十太夫　むむ、然らば御邊、秀康公へ附家老とならるるとき、大御所より仰せありたる一一は、定めて存じ居るであらうな。

左馬　骨に刻みし御戒め、いかで忘却致すべき。

十太夫　天下の爲とあるからは、主の頭も取るべきぢやとありし仰せを何と聞きつる。

左馬　なんと。

十太夫　いま大阪には右府秀頼、父太閤の跡を守り、生年の後には天下の心あり、豐臣恩顧の大小名たち、大御所御存命のうちこそ、表に歸服の樣をも見すれ、御他界あらば天下の大變、根差を固めぬそのうちに、惡木は切つて退くべし、さるに秀康公、一旦太閤の猶子とならせられたる義を思ひ、兎角に豐臣を贔負せられ、大事あらば秀頼公と一つになり、采取らむなぞと口遊まる、この君世にあらむ程は、天下の事成り難し、小を捨て大を取るが世の順義、汝に逆事をすすめ申すぢや。

左馬　驚き入たる御仰せ、いかにも殿が口ずさみには、秀頼公とは兄弟なり御力にならむなぞとは承はれど、大御所と大阪方と、干戈を交ふるその中に、いかでか御父君に背かせ給ふべき、その御掛念は御無用なるべし。

十太夫　我等もさありて欲しいと念じ居るぢや、さるにの、越前殿の御心には、德川の天下を望みたまはぬのぢや。

左馬　とはまた如何なる證あつて。

十太夫　知らるる通り若御所は、越前殿には弟ぢや、兄としてその采を受くること、心外なりとは思召すらめ、既に大御所と御對顔の節にも、大阪に大事あれば、餘人は知らず、我一人は味方ぞと、廣言ありしと承はる、斯の如くば德川の、天下に仇は越前殿、兼ての仰は今この時ぞ。

懷中より藥包を取出し、

十太夫　これを參らせられい。

在馬　容易ならざる一大事、御仰せとはいひながら、御連枝の命を縮むる大逆、

十太夫　涙を呑んで御使に立つた佐渡が心中、

左馬　御藥を預かる土屋が心根、

十太夫　昌雄、

左馬　佐渡殿。

佐渡、左馬助と共に嘆息す。折から囃子はキリに近づき、やんやんや」と口口の賞め詞聞ゆ。

左馬　人の來らば大事となるべし、見知の者も候ふべきに、あの植込の後方にあたり、いぶせき小屋の候へば、暮るを待ちて立たせたまへ。

十太夫　我は是れより大阪へ立越え、伊賀を過ぎりて歸るべし、ゆめ大御所の仰せばし、背かせたまふ事あらば我が面目も今日を限りぞ。

左馬　是非に及ばぬ、殿御落命の其夕死出の山路に待受けて、この御詫を申上げるわ。

十太夫　逆縁ながら弔ひは、拙者が營み申さうぞ。

左馬　いや弔ひより御公達を、確と御頼み申すぞや。

十太夫　念に及ばぬ、また御邊の後も、

左馬　なに某が名跡！　主を害ふ我等が行末、その御配慮は辭退申す。

十太夫　萬事は拙者が胸中。

十太夫下場。左馬續きて去らむとす。あなたより歌舞伎芝居のワキ役者名古屋山三郎、風流なる扮裝、十太夫と引違へて上場。

山三　御家老樣。

左馬　そちや役者の山三郎か。

山三　御召に依り參上の山三郎奴にござりまする。

左馬　けふは大儀であつた。

山三　はあ。

奥にて謠の聲聞ゆ。越前中納言秀康、土屋右京、足羽安居丸、宮井久市、太刀持の小姓、外に近侍を從へて上場。

秀康　謠「遙かに、人家を見て、花あれば、即ち、入る」ははは、左馬これにお居やつたか。

左馬　今日の御催し、天氣もまことに美はしく、是れしかしながら我君の、御武運長久の感應、左馬恐悦に存じ奉る。

秀康　いかな英雄豪傑とて、儘にならぬは天氣と戀の道ぢやてな、麗かの天氣、身に取つては大滿足ぢやわい。

山三　御殿樣、御機嫌宜しうござりまするな。

秀康　山三、けふは一段と面白かつた、常の猿樂と事かはり、差手引手も鮮かに、近頃渡來の三味線の色音、いや腸をかきむしるわい。

山三　殿樣ひかせられまするで、歌舞伎の役者一同に、肩の身幅が廣うおじやりまする。

秀康　我等が見物するが嬉しいとか。

山三　御意ござりまする。

秀康　國呼べ。

山三　はつ。

山三下場。

秀康　牀几持て。

小姓牀几を持參し「御牀几」と呼ぶ。秀康これに倚る。向ふより侍一人登場。

侍　左馬殿まで申上ます大阪の御使者速水甲斐殿、お暇に出でられました。

左馬　なに甲斐殿が暇乞とか、さらば廣間にて御對面申さう。

秀康　甲斐が戻るとか、外ならぬ一家の使者苦しうない、是へ呼べ。

左馬　はあ。

左馬頭にて差圖を爲す。侍は承はりて退出。間も無く速水甲斐守守久登場。

甲斐　中納言家には是れに御入候ひしか。

康　甲斐、遠方太儀であつたな。

甲斐　御手厚き御待遇に預り忝けなう存じ奉る。日も西山に傾けば、最早御暇仕りまする。

秀康　右府へ宜しう傳へくれい、右京船場まで見送致せ。

右京　はあ。

右京立つて甲斐の傍に來て目禮し、甲斐を導き去る。

左馬　我君右大臣家へ御會釋はさることながら、當時大御所の御代官として當城を預り居らるるからは、あまり御近しきは如何な者と存じ候。

秀康　其方は時折異な事を申すの、我かつて太閤の養子となり、その一字をとりて秀康と名のる、大阪城の主は我が爲には弟ぢや。

左馬　仰はさることに候へども、江戸表なる將軍家も、また御弟におはします、表は和平を裝へど心の刃に砥を合はす、怪しき沙汰の取取なるに御謹なき時は、不測の禍生ずべきか。

秀康　天道は正しきを助く、秀忠も秀頼も、兩人ながら弟なれば、何れを何れと隔てを付けう。

左馬　とはいへ肉親の御父兄弟。

秀康　諄く申すな、兄を、差置き弟を、大將軍に立てたまひし父上へは、親に別れし孱弱い秀頼、大事のあらばこの秀康は、轡を並べ死生を共に爲すべしと、豫め申置いたわ。

左馬　それまでに御意あるか、

秀康　秀康は義を忘れ得ぬ。また肉親の親兄にも、左樣の譏りを受けさせ得ぬわい。

左馬　有難き御意、畏りたてまつる。

秀康　左馬、落涙致したな。

左馬　はあ。

向ふより名古屋を先きに、出雲阿國、同舞子瓶江登場。こなたよりは近侍服紗にて掩ひたる臺盤を持ちて目立たぬ樣に秀康の後方に扣へ居る。

山三　御殿樣はあれにおはします。

お國　お召とは何の御用であらう。

山三　まづまづ御座れい。

三人遙か下りて平伏す。

秀康　おう、國か、けふは一段と見事であつたぞ。

お國　有難い御言葉、國身にとりまして冥加に餘りまする。

秀康　とりわけて西王母は面白う見た。

お國　そのお言葉に付きまして、異な事を伺ひまする樣ながら拙き舞の中央にて涙を浮めさせたまひしは、如何なる御心にては候ひしぞ、西王母の一曲は度度奏で候へども、涙を見たるは始めの終り、あはれ障げも在しまさずは、其道の心得草にもなり候はむ、御物語を願ひ奉り

ます。

秀康　こは思も掛けぬ事が目に入つたな、恐らく近待も知らざる涙を、謠ひつ舞ひつの其中に見留めえたる賢さは、誠に人の褒美もうべ、希代の名譽かな幼きより秀康は、二人の父が弓矢を習ひ、少しは人に知られたれども、未だ天下の一人たらざるに、國こそ果報のもの、舞の手業は日本一人女だてらに天下一の譽を雲の上までも、輝かしたる羨ましさ、我身に較べて身は泣いたぢや。

お國　有難や有難や、その御詞は三千歳に、花咲き實りし桃實より、國の爲には嬉しき賜物。

秀康　言葉のみには止めまじ、其方が掛けたる水晶の數珠、ありや裝束と映りが惡い、粗末ながらこの品は、晴れの軍に某が、襟にかけたる紀念のものゝけふの當座にこれを取らさう。

お國　有難う存じまする。

秀康　國、其方は何歳になる。

お國　いつつ程にござりまする。

秀康　二十五歳か、よき婿人を吹擧しやうか。

お國　國は生涯不犯に暮らしまする。

秀康　きつい事ぢやの。

お國　出雲の神に祈誓をかけ、歌舞伎を良人と定めました。

秀康掌を打ち、

秀康　ゆゆしし、ゆゆしし、さる心組が誰にも欲しい、瓶江そちもさうか。

瓶江　恥かしさうに差俯く。

お國　これなる山三が定まる夫にござりまする。

秀康　逸早い事をしたな、瓶江美男を持つと、心掛りな者ぢやぞ。

右京登場。

右京　御使者は今の程お立にござりまする。

折から風激しく吹き來る。秀康空を案じ、

秀康　暮合近く吹く風に、大阪さして行く舟の、いづこに宿を定むらむ。

右京　仰せの通り速水殿は、今宵は船中にて明かさせらるる事なるべし。

山三　なに舟がかりを爲されまするか。

秀康　甲斐に用でもあるか。

山三　え、何しに私ごときが。

山三平伏す。秀康は山三を見て少し考へる氣味合。

秀康　誠や天は僞りなし、春來つては桃山の、花は變らぬ昔にはある。

お國　人の巧は、人を限る、一期を舞に明暮らすも、花の臺の一片にあらむ。

左馬　その花片は美はしき、しるしを年に殘すべし、心無げなる庭造の、枝を撓めて仇花を、散らすを何と御覽ずる。

山三　花の鬘を翳すべく、また桃實をみのらすべく、二道かけて迷ふこそ、心落居ぬ姿なり。

瓶江　闇なき戀路を渡り行けば、光明天の音樂の、遠に響くを聞きたまはでや。

右京　君の情の厚ければ花に不斷の香ありと、醉ひ心地の致し候。

秀康　境界は人にあり、汝の幸は人の禍、わが望は人によからじ、行先は暗に似たり、唯唯日の出づるを待たむ。

風また過ぐ、張り渡したる幕を吹き捲く。

（幕）

返し　男山八幡社頭

風激し（その夜）。正面なる石段を下り來れる名古屋山三は、中段に止りて四邊の樣を伺ふ。此方よりは歌舞伎の一座奴傳介、速見甲斐を導きて登場。傳介口笛を吹く。山三膝拍子を打ちつつ段を下る。

傳介　山三樣、

山三　かの手紙は、

傳介　お届け申した所、速水樣御入來にごわりまする。

山三　なに速水樣の御出とか、

甲斐　名古屋、甲斐でおりやる。

山三　誠に甲斐殿、何から申上げやうやら。（傳介に向ひ其方は社前へ參り、太夫と瓶江とがこれへ來らぬ樣に引留めてくれよ。

傳介　畏つた。

傳介は石段を登りて去る。

山三　さて甲斐殿、以前は以前、今は歌舞伎ものと成下りたる山三郎、畫の御見を幸に、申上げたき一部始終御聞下されたし。

甲斐　珍らしき對顏、あたら武士を捨てたる上、面を河原に暴す山三が、速水への用事とは何。

山三　はは、ふと世相を觀じ、狂言綺語に身を任せし名古屋の心中は、ただ名古屋が知るばかり。それはさて、以前は豐臣が祿を食みたる山三郎、けふ此頃の大阪城の御有樣、何ぞお爲めの事あらば、御耳に入れむと

思ふ矢先、けふ伏見の城内にて、徳川家の軍師と聞えし本多佐渡殿、家老の左馬助と密談の果、薬包みと覺しき物を、手渡なして小蔭に忍ぶ。ちらと見たるは某一人、にはかの風に舟繋りと、聞いて即座にお知らせ申す。

甲　斐　異なる話かな、かの佐渡守は大御所の懐刀と名代の大臣、只一人にて庭蔭へ、忍び入りしなんぞとは、誠しからぬ珍説なり。

山　三　珍説故にお知らせ申す。主も祿も無い名古屋なれども、越鳥は南枝に巣をくふ、豊臣家の爲には、尤も頼みに思し召さるる越前家、その御身には心掛りの薬包御油斷のなさらぬ様、御身様より消息なりと、御遣しは下さるまいか。

甲　斐　御身が見たると云ふばかりにて、正しき證も無き事を、他家の我等が何として、申入れがならうぞ。

山　三　さ、それ故にこそ御頼み申す、外に證のある事ならば、山三が直に申上げる。

甲　斐　いかさま。

甲斐一考す。

山　三　ただ何となう、左馬助に御油斷なされなとだけにても。

甲　斐　さりとて家老の左馬助殿に、怪しき沙汰りあなんどとも憚りあり て申されまい、歸阪の上にて片桐殿へ、此分の耳打だけを致し申さう。

山　三　すりや御消息は、

甲　斐　得書き申さぬ。

山　三　さて是非もない。

兩人わかれる。速水は歸らむとし、山三は元の段を上らむとす。十太夫の佐渡守上場、速水と摺違ふ。速水刀の鐺を執る。十

太夫振りほどきて行かむとす。阿國瓶江段を下り來るを、傳介追ひ來り、瓶江の袖を引く。阿國急ぎて段を下り山三に突當る。山三段を飛下りて甲斐と十太夫の間に捌む。十太夫は元來し道に歸らむとす。折から甲斐の下人提灯を持つて登場、十太夫を甲斐と誤認し、「お迎ひ」と叫んで鼻先へ火を出す。十太夫提灯を拂ひ落して逃れ行く。甲斐は「正しく」と氣込む。

（幕）

二幕目　城内土屋左馬助役宅

左馬助住居の裏座敷、本家へ續きたる壁に窓あり、下手には枝折戸立つ。下部藤内庭に水を打つ。腰元の小染は縁の上に佇む。（同じ年三月の初）

藤内　此頃はいつにない御不機嫌ぢやの。

小染　清水御參詣の御供もなく、朝から澁面つくつて在しやりますわ。

藤内　奴も御出仕のお供が出來ぬで、肩身がちくとばかり狹まり申すぢや。

小染　奥樣がお可哀相ぢや毎日毎日お叱りばかりで、傍の者もはらはらものぢやの。

藤内　何んでも御心配事があるのぢやろ。

小染　お上の機嫌が惡いのは、御奉公の者には心掛りでおざるのう。

土屋右京昌吉、枝折戸を開きて入り來る。

右京　藤内か、

藤内　和子様、いつにない早い御歸りにごわりまするな。

右京　父上は何れに在すぞ、

小染　頼うだ方は御奥に居られまする。

右京　左様か。

奥の方にて

左馬　右京の聲が致す。

上手の小窓を開きて、左馬助は庭先を見やり、

左馬　悴、いかが致した。

右京　はつ、兼て仰出されましたる清水御參詣の門出ながら、御病氣と承はり、馳脱けて御見舞に參りました。

左馬　心弱い奴、君前へ出仕なしては、親ありと思ふなと、兼ての言葉を何と聞く。

右京　は仰に候へども、御所の都合にて昨日も歸宅致しませねば、御用の間を缺かざる様、朋輩衆に頼み合せて……

左馬　その小才覺措け、武士は唯直ぐにあれ、はや戻れ。

右京　はあ。

右京立つて行かむとす、左馬助屈托の顔なりしが、膝を打ち、

左馬　やれ待て悴、座敷に直れ我等もそれへ參らうぞ。

右京座敷へ上る。左馬助も出て來り、

左馬　腰元は奥へ行け、藤内は庭外へ出でい。

兩人下場、左馬助座に着く。

右京　父上、何御用におざりまするな。

左馬助は物をも云はず。

右京　父上、父上。

左馬　右京前以て問ふ事あり、主君と親とは何れが重いな。

右京　若年者の拙者、忠孝の道は心得ませねど、兼兼の御教訓とて、憚りながら御主君を一際深く存じ居まする。

左馬　よし、よし、さて御主君と申すは誰ぢやの。

右京　御戯れも事によれ、中納言様の外に御主君がござりませうや。

左馬　駿府に在する大御所様は、何に當るの。

右京　中納言様の御爺様ぢやろ。

左馬　大御所様と中納言様とは何れが重かろぞ。

右京　御親子の御中、中納言様への忠義は、即ち大御所様への忠義、隔てあるべき筈はありませぬ、父上の御言葉は、何とも合點が參りませぬ。

左馬　物をも云はず右京に切掛る。右京は切付くる父の肘を抑へしが手を引きてまたも切込む太刀風に、縁より下に飛び下りたり。

右京　こは何となされまする。

左馬　見い親子とてもこの通りぢや。（小聲になり）彼方と此方が斯の樣なりや何とするぞ。

右京　思ひ掛なき事共ばかり、

左馬　その仔細語らう程にこれへ參れ。

左馬助刀を收む。右京元の座へ直る。

左馬　若年者の其方とて、少しは天下の樣は知るらむ、關が原の合戰以後、次第にひろがる德川の、流れの末は太かれども、その源の大御所樣は、寄る年波に爭はれぬ、頽の刻みの深き御身、萬一の事もあらば、天下の動亂ばかりがたし。かかる折には第一番に企を爲さむもの、豐臣家の

外になし、故太閤殿下の恩顧を蒙りし大小名達、大御所に恐れをなし、表は當家に歸服なせども、御他界あらばいかがなるべき。これ大亂の基なるに、淺ましや御主君には、御舍弟たる江戸殿に、御家を嗣がれし御腹立、または太閤殿下が一端の恩義を忘れたまはず、常常の御言葉にも、大阪に珍事あらば、秀頼と共に采取るべしと申させたまふされば德川の天下に禍をなしたまはむは當殿にこそましますべけれ。

右　こは仰せにて候へども、天下はもと豐臣家のもの、暫くは當家にて、御後見を申せども、やがて秀頼公御成人の其後は、返させらるる筈なりと、假初の御口ずさみにも、我等まで申聞けさせたまひ候。

左　馬　その御言葉を何と思ふぞ。肉親の御子さへ、かかる思を懷かせらるるに、ましてや外樣の大名達、時來らばと思ふもありなむ。近頃大阪にては、諸國の名ある浪人を、召抱ふる事の頻りなるに、所存の程は知られたり、天下を爭ふ大軍に、女儀を大將の大阪方、憂ふべきにもあらざれど、御主君まことに豐臣の采とりなば、日本一のゆゆしき御敵。

右　京　兼て大御所樣の御仰せにも、我子ながら秀康は剛の者にてありけり、故太閤と我等とが、名乘の文字を合せたれば、武勇も二人を受けつぎたりと、賞美ありしと承はる。

左　馬　されば、こそ我等の苦衷、勿體なの事ながら、天下の爲めに御主君の、御命を縮めうと企てたわ。

右　京　え。

左　馬　怪、そちの一命を天下の爲めに贄に捧げい。

右　京　すりや現在の御主君を、

左　馬　忠義を敎へし親の口から。大逆罪を勸めるわいやい。

右　京　されば、とて、御情厚い御主君樣。

左馬　天下の爲めぢや、たつて勤めい、我も思ひは變はらうか、忍び難きを敢てなすも偏に天下の爲にして、私にあらざる證は、土屋の家もこれを限り、この企の成就の日は、汝も死ね、我等も共に三途の河邊で、存分お詫を申上げる。

右京　事を分けたる御仰せ、この天罰にて八大地獄の、責苦を永永受けやうとて、

左馬　役目をさつと勤めうとか、

右京　はあ。

藤内　枝折戸の外より、若樣、殿樣御門を御出ましにごわりまする。

右京　心得た、直樣參ると申せ。

藤内　ねい。

藤内下場。

右京　さらば父上御暇申上まする。

左馬　待て怜、容易う請合ふた大事、何として仕終するぞ。

右京　恐れながら御寢首を。

左馬　いやいや、武勇絶倫の我君、そちの瘠腕にていかでいかで、かつうは他家への聞えもあり、幸なるかな今日の御參詣、御茶など參る際に、取混て差上げい。

左馬助懷中より包紙を出して右京に渡す。

右京　とはまた、あまりに急なること。

左馬　かかる大事を胸に抱けば、立居にそれと知られなむ、御目に留まらば天下の大變、佛の塲にて殺害の、罪過を犯すは恐れなれど、

右京　後世を捨てたる某には、恐ろしとも思ひ申さず。

左馬　犬畜生にも劣つたる、二人はこれが一世の名殘、來世は焦熱大焦熱の、火炎の中にて對面致さう。

右京　親子は一世と云ひながら、共に地獄に沈みたらば、煙の間より御顏を拜むがせめての頼みなるらむ。

左馬　人に謗られ、名を下し、最愛の子を捨て、家を斷ち、あらぬ事をば爲せうぢやまで。

右京　父上、

左馬　右京、

右京　淺ましい事ぢや。

右京父の手を取りて泣く。ややあつて左馬助手を叩く。小染出づ。

左馬　奥方へ是へと申せ。

小染下場。

右京　なに母上を、

左馬　今生の名殘ぢや氣取られぬやう、一目逢うて行け。

左馬助の室峯尾登場。

峯尾　なに右京が歸りやつたか。

清水參詣の御供先を驅拔けまして參りまいた。

峯尾　それは、ようぞ參られた。

右京　御用談に隙取ましたれば、御供に遲れやうも知れず、はや御暇を申しまする。

峯尾　御前を能う勤めや、朋輩衆と喧嘩なぞしやんなや。

右京　畏りました。

右京兩親に暇乞して下場。

峯尾　我子ながら利發のもの、今歳を過さば御前を下げ、可愛らしい嫁御寮を、迎へねばならぬわいの。

左馬　（沈みたる聲調にて）その嫁御寮には誰がなる。

峯尾　はてこちの右京が婿風なりや、天からも地からも、降つて湧く程あらうず。

左馬　天に飛ぶか、地に入るか。

峯尾　こりや何を仰せあるやら。

左馬　右京には妻の沙汰より、極樂世界に住居する、

峯尾　え。

左馬　いや天人よりも勝れたるを、嫁女に申受けうわい。

（舞臺廻る）

四條河原阿國住居

風流なる座敷、床に珊瑚の數珠を飾る。歌舞伎芝居の座元、奴傳介と物語る。

座元　傳介殿、太夫の機嫌はどうぢやの、

傳介　見た所は變りも無い樣子ぢやが、氣分が惡いとて寐たり起きたり、風吹き烏を正のものぢや。

座元　はて、それは困つたもの、芝居も當分休まずばなるまい。

傳介　今度出した「東下り」の噂は、清水の舞臺より高いに、見物は三十三間堂の佛樣より概分に來られるに、折惡るい太夫の不加減、えい事は二

つおりないわ。

座元　早う舞臺へ上れるやう介抱を頼むぞよ。

傳介　われらは一日小屋に出ぬと、身體が惡うなる程に、舞臺に精を出いても見物が好からぬぢやて。

座元　さらば御暇を申そ。

座元下場奥より瓶江登場。

瓶江　傳どの。

傳介　若太夫、

瓶江　座元は歸られたの、

傳介　山三はまだ來ぬかの、

瓶江　ええまた阿呆らしい、いつ山殿の事を尋ねました。

傳介　はて、つい今の先き、

瓶江　そりや誰れが。

傳介　はて、あなたが、

瓶江　あの何處で、

傳介　あのことで、

瓶江　措かしやりませ、いつもいつも、好う謔ける人ぢやの。

傳介　面妖な、お尋ねなされた返答が、御意に叶はぬとか、

瓶江　誰れも聞きはせぬと云ふに、

傳介　白癩！山三樣に頼まれたお言傳も聞かしやれぬとか、

瓶江　なに、御言傳、

傳介　いえ、なに物でごわるぢやて。

折から名古屋山三郎登場、戸外にありてその赴きを立聞きす。

瓶江　お言傳とは何用ぢや、

傳介　そのお言傳はな、太夫の病氣で芝居は休みなり、欝散晴しに花見は、いかが、さあれば御身とたつた二人、連理の木では動けぬが、比翼の鳥なら飛んで行かれう、と思ふがどうあろと仰有れたは。

瓶江　なに山三樣と二人で花見、

傳介　我等を差置き、あまりといへば酷いお賴み、ちくとばかり腹も立つたが、恪氣と痴氣は年寄の謹み處、ぐつと我慢しての言葉ぢや。

瓶江　何を措いても參りたうはおざれども、引籠り中の太夫の手前、まづ見合せにしませうわいの。

傳介　これはいかな事、若太夫には戀路の闇を、紙燭して歩まれると見えまするげな。

山三　後方より、

山三　僞りの影がさいたぞ。

傳介　や、

山三　花見にはいつ行くのぢや。

傳介　あの、それは明日、いや昨日。

山三　氣分の惡い太夫に隱れて、身共が花見に參るのぢやまで。

傳介　あの、それは物ぢや、

山三　ものとは。

傳介　はて怖ものぢや。

傳介下場。

瓶江　山三樣花見とは虛かいな、

山三　病みたる人を宿に殘し、何しに花見に參らうぞ、傳介が其方を擔いだのぢや。

瓶江　ええ憎らしや。

山三　は、は、は、は、は。

瓶江　ほ、ほ、ほ、ほ。

外より小鼓の音聞こゆ。

山三　太夫か、

瓶江　今がた庭におぢやつたが、

山三　河原を漫歩さでがなあらう。

瓶江　もうし山三様、河原へ出て見やうではありませぬか、

山三　せめては花を遠に見やうか。

瓶江、山三と共に下場、阿國小鼓を手にして登場、力無げに柱に凭り、皷をとりて調子を試む、意に滿たずして捨つ。

阿國　結ぼるる心の闇が戀ならば、わが思ひこそさにはありけれ、懷かしいは戀の下萠、頼もしいは戀慕の始煙絶えにし富士が根も、昔は燃えし山と聞け、奥また奥に潜みにし、戀の火焔が立のぼるか。

床の間にある珊瑚の數珠をとりて頰に摩りつけ、

阿國　はかなき生れを歌舞伎の神へ、捧げし誓は忘れねど、人戀しさも忘れ得ぬ、二十五年の生涯に、この賜物に觸るる時のみ、男の香色の身には染め、あらなつかしの面影。

數珠を恍惚としてながむ。傳介登場。

傳介　太夫様、

阿國　あい。

傳介　まだ氣分は愈らぬかいの、

阿國　こと云つて悪い所もおざりませぬが、まだ立つ氣にはなれませぬ。

傳介　いまも芝居の座元が來て、案じて居られたわい、

阿國　氣の毒でおりやるの。

傳介　何にせい、東下りが大評判ぢやに、シテの太夫が休まれたで、芝居も立たず、役者も立たず裝束の衣裳着けたまま舞臺で倒られた時には、傳介も肝を潰しましたぢや。

阿國　我身ながらも不思議のやうであつたわいの。

山三、瓶江と共に登場。

阿國　山三殿か、

傳介瓶江を見て、

傳介　や、これは、

瓶江　傳どの、此方は憎らしやの、

傳介　ひたに過り過り。

阿國　また瓶江を搆はれたのぢやな、謔けた人ではある。

傳介　首尾よう謀りまいたを、山三殿入來で、桶の箍が迸ね申したわい。

山三　時に太夫、氣分はまだ愈らぬかいの、

阿國　まだ何となく心が欝結れ、切りなく涙が零れてならぬぞや。

山三　さして身體に障りなく心が浮かず涙が乾かぬ、こりやてつきり戀の道ぢや。

阿國　え、

山三　瓶江殿、傳介と一緒に座を外して下され。

瓶江　あい。

瓶江、傳介と共に下場。

山三　何を御隱しなさるるぢや、醫師ならねど某は、病の因を能う知つてぢや。

阿國　病氣の因を知つたとは、

山、三　はて活達の氣にも似ぬ、病の圖星は越前樣ぢや。

阿國　や、

山三　戀は捨てたと名乘らるる誓文に臆されてか、片時も放さぬその數珠でも、大略は知れてある。

阿國　山三殿、今は隱さぬ隱されぬ色にぞ出づる亂れ戀、頼もしい、なつかしい、思を戀と名くるとは、今になつて身に知られた。

山三　さすがは太夫、よう隱さずおつしやつた。したが斯樣に舞臺を引き、引籠つては埒が明くまい、こりや日頃にも似合しからぬ。

阿國　さいふて、應ふ戀でなし。

山三　隔ての無いが戀のならひ、まいて太夫は天下一舞にかけたら古今の上手、勝らうとも劣りはない。

阿國　お身は左樣にお云ひあれど、そりや此方だけの口といふもの飛ぶ鳥落す殿樣と、河原で立舞ふ傀儡の太夫。

山三　云はれな太夫、我れと我身を卑下したとて、思か成らうものでなし、そのうち御召が度重なれば。

阿國　神の御前で乙女で暮らそと、誓つた言葉は反古にはならぬ。

山三　己れで立てた誓文なら、己れで破ろと支はあるまい。

阿國　阿國皷をとりて一つ二つ打ち、我身が打つた音ではあれど、もう鼓へは返らぬわいの。

傳介　阿國涙ぐむ。外にて傳介の聲、山三樣、入つてもようおぢやるか、

山三　こちへござれ。

傳介上場。

傳介　山三樣、武家の飛脚が見えられて是非是非逢ひたいと申されてぢや。

山三　なに某に逢ひたいと、

傳介　大阪からの使者ぢやと申す。

山三　何にもせよ、對面致さう。

傳介　さらばおざれ。

傳介山三と共に下場。阿國思ふとなしに四邊を見遣りつつあり。瓶江登場。

瓶江　阿國さま、阿國さま。

阿國　なんぢやのう。

瓶江　今がた表を越前樣がお通りぢや。

阿國　越前樣が、

瓶江　清水へ御花見に御出やるさうな。

阿國　そりや何時、

瓶江　つい今がた。

阿國　なぜに知らさぬ。

瓶江　太夫に別に知らせる事でも。

阿國　ほんにさうよの。

阿國萎れる。山三立出で、

山三　なに越前家が清水御參詣とか、

瓶江　あいのう。

山三　幸ひ。

山三手にせる書狀を懷中に收む。

（幕）

三幕目　京都清水寺舞臺

花に包まれたる清水寺の舞臺、老若の僧は掃除を終りたり。（前幕と同じ日のこと）

老僧　雲水よ、花が咲くと煩さいのう。

若僧　空煙老はまた愚痴を始めた。

老僧　いや、いや、然ておりない、朝は朝で、曉の花が好いとて夥しい人出がする、夕はまた、入相の鐘に散るさまの、こよなう美はしいとて、莫大もない群集ぢや、その上日中は花見衣、貴賤混雜の忙しなさは、別物ぢや。

若僧　はて、それが何のうるさい、日日の佛弄り、線香には燻される、抹香には染みはてる、ぼんに坊主が嫌やの嫌やの。

老僧　花が咲いたとて何面白かろ、散る花を清めるので箒持つ手がいとど辛度ぢや。

若僧　花が散るので戀が削れる、青葉になつては禮盤と、また首引で暮らすのだがな。

老僧　うつらうつらと寢たら格別、春と申すは騷騷しいだけの者ぢや。

若僧　けふは越前樣の御花見とて、暫が間は誰人なりとも、參詣を止めた故、いつにない靜な事ぢや。

老僧　毎日毎夜この通りぢやと、樂寢が出來て嬉しいの。

若僧　また骨惜みが始まつたな、もう一息ぢや、早う掃除を致さうぞ。

二人奥の方へ入る。名古屋山三登場。

山三　大坂からの御書狀を、お預りは致したが、人傳にはならぬ文、折から

當寺へ御參詣とは天の與へ何とかして御手渡を致さうぞ。

以前の僧出で來り、山三を見て、

老僧　こりやそこの方暫時の間御參詣は叶ひませぬぞ、さあさあ御堂の外へ出られませ。

山三　大慈大悲の觀世音菩薩誓にしばし拜ませられい。

若僧　いやならぬわ、菩薩よりなほ御威光強い、伏見の越前樣の御參詣で、舞臺中は御花見の座敷ぢやてや。

山三　さう聞けば猶の事ぢや、貴賤を擇まぬは花の習伏見の殿とて御叱りはおざるまいて、ははははは。

老僧　笑ひ居るわ、越前樣はどうあらうと、

若僧　師匠の坊に叱らるる、

老僧　とつとと出やしやれ。

若僧　さあさあお出やれ。

山三　すりや是程に申しても。

警蹕の聲遠くより聞ゆ。僧は之を聞きてなほ慌て、

老僧　早う出やれ。

兩人にて山三を拉して推し出す。山三爭はむとせしが、思返して僧と共に下場。越前中納言秀康、足羽安居丸、宮井久市外近侍數名登場。

秀康　げにや梢も埋もるる、花の榮華は今を極み、天地も人も醉ひ心地、まことや自然は律義なるかな、人待たねども花は、笑めり、正直は勇の本體、あら勇ましの花の姿や。

安居丸　幸ひけふは長閑にて、天も守るか花の道行、

久市　霞の幕は空にかかり、盛りを散す風を厭ひ、

近侍の一　春の盛をここに集めて、
同の二　殿の御成を待顔なる、
同の三　清水寺の花の塲。
一同着座。

秀康　誰そ茶を持て。

安居丸　はあ。

安居丸奥の方へ入る。土屋右京登塲秀康の前に跪き、

右京　御供揃の其間と、暫時の御暇たまはりて、私宅へ罷り歸りし處、思の外に手間取り、延引致しましたる段、眞平御許容下されたし。

秀康　して左馬の病氣は、

右京　次第に快氣仕り、兩三日の中には、御機嫌を伺ふやうに申居りました。

秀康　それは頂上ぢや。

安居丸茶を捧ぐ、秀康取つて茶碗の熱さを覺え、物をも云はず突返す。安居丸その意を料りかねて迷倒す。右京機到れりと思ひ立たむとせしが、忍びず。安居丸の袖を引き、溫湯と代へむことを呼きて敎ふ。安居丸急ぎて下塲。秀康はそ知らぬ面地にて花を眺めつつあり。安居丸恭しく茶碗を捧げて秀康に薦む秀康取つて一息に飲み終る。

秀康　能い加減ぢや、右京其方の手で一服立てい。

右京　はつ。

右京仰を受くるに忍びずして躊躇ふ

秀康　早うせい。

右京　はあ。

右京是非無く茶碗を受けて奥へ入る。微風吹く。落花翻翻。やがて右京顔色蒼ざめ茶碗を持ち來る。秀康訝かりて、

秀　康　右京腹痛でも致すか。

右　京　いえ。

秀　康　額の色がようないぞ。

右　京　はあ。

と茶碗を差出す。秀康取つて服加減を試み、會心の思入にて飲み終り、右京を浸浸と見て、

秀　康　右京今の茶は、

右　京　えつ。

秀　康　湯加減は如何致した。

右　京　お熱いのを差上ました。

秀　康　小姓共、皆も能う聞け、參りたての一服は、加減の熱いに得飲まざりしを、右京が心付に温めておます。續いて所望致したれば、沸ぎる樣なのを立て居つた心を得たる右京かな、皆も彼の樣に心がけい。

右京は慙愧の念に堪へざるさま。

安居丸　そのままに御返しなされましたで、如何はせむと煩ひしを、右京の早速にて御機嫌に應ひました。

久市　私共も只今の御教訓は忘れませぬやう、確と心掛けまする。

秀　康　睦まじい其方達心は何處までも美しく持て、僞り飾らぬを武士とはいふぞ、正直は武士の甲冑、義と申すが心の大將面と腹と變はれる奴は、人非人と云ふぞよ。

彼方にて「なーらぬぞ、ならぬぞ」と詈る聲す。

秀　康　何事ぢや、久市見て參れ。

久市はい。

久市下場。彼方には「おのれらが」「役者づれが」など以前より聲高に聞ゆ。久市引返して登場。

久市　殿様申上げます、役者の山三が爭ふてぢや。

秀康　なに山三が爭ふ、何と申して爭ふ。

久市　殿様に御目通したいといふ、ならぬと云ふ、それで爭ふてござりまする。

秀康　予に逢ひたい、苦しうない花見の塲、彼等なんぞを呼うでこそ興も多い、此方よりと思ふ程ぢや、是れへ呼べ。

久市　はあ。

久市下塲。爭ふ聲止む。久市名古屋山三を伴ひて上塲。

秀康　山三予に逢ひたいとは何ぢや。新作の歌舞伎でも出來たかの。

山三　御花見と承り、御目通を願ひましたに、狂言氣のない坊様たち、口を酸くして頼うでも、ならぬとのみで押返され聲高になりましたが、御耳に觸れました。

秀康　其方に似合しからぬ事ぞ。

山三　恐れ入りました。さて罷出ましたるは、一大事の儀にござりますれば、御人拂を願ひたう存じまする。

秀康　左様か、小姓共幸ひぢや、面面勝手に花を見い。

二人の外一同下塲。

山三　一大事と申しまするは、この御文にござりまする。

秀康山三より消息を受取りて披閲す。

秀康　是れぞ速水甲斐より予に宛てたる消息、その使に山三とは、

山三　その文使ひになりましたは、先達て御誕生の御祝とて、御城内に召

出されし刻怪しい御人に出逢ひました話の綾は定かならねど藥包を手渡しなしたる、相手は家老の土屋様、江戸方の大軍師が姿を變へて庭内の密密咄の的といつぱ、恐れながら殿様御上と、思ふにつけて早速の計ひ、他家と云ひ條、豐臣家にては、頼りに思す越前様、折から歸る大阪の、御使者は元は知人なり、下り船に追付きて、事の仔細を打明けても、早速には御承引なく、漸う只今この消息を頂きました幸先へ、御參詣とは御武運の、長久なるべき御仕合せ。

秀康　汝の言葉に相違はあるまひ、さりながら、何故ありてさまでに、この秀康を心に掛くるぞ。

山三　それには二つの因由の候ふ、一つには此山三、幼きときは豐臣家の祿米をもて生ひ立ち候ふ、また二つには藝道の、歌舞伎の爲めに殿様の、御無事を望み居りまする。

秀康　予を藝道の爲めとや。

山三　されば太夫が申しまするは、越前の殿様こそ藝道の守護神、厚うひかせられまする故、歌舞伎も追追取立てられます、拙き手節も心を入れさせ、御覽下さる御殿様國の爲めには大檀那と、喜ぶシテに連なる私、一座の者も一同に、殿様御繁昌を祈り居る次第にござりまする。

秀康　ははは、それだけの事で守護神か、弟の下知を受くる秀康賞むるは歌舞伎の者どもばかりぢや。

山三　かくまで思ふ私達、何卒御身御大切に。

秀康　おう、おう、湯茶飲酒に心を付けいと申すよの。

山三　別けて彼人の由縁の御方には。

秀康　由縁……心得たぞ。

秀康考ふるうち、胸痛の心地、寂しく笑ひに混らす。

秀康　われも四邊を逍遙せむ、山三供せい。

秀康山三と共に下場。奥の方より右京出でて主君の方を見送り。

右京　世にあり難き御慈み、深き情を逆事に、主の齡を縮めし某昔を今に例なき、鬼畜に劣りしうき身の果、御辨疏も得爲ずして、この儘終る命の瀬戸際、武士らしき最期をと、思へど是も名に立つ業、犬の樣に死ぬることと、なかなか今の運命なるべし、南無や御佛極樂世界は覺束なし、永く冥路にさまよふとも、御主に御詫を云ひ得るやう、守らせたまへ御佛。

右京舌を嚙み切り舞臺より飛降る。鳩舞ひ立つ。花激しく散る。「落ちた」「落ちた」とわめく聲聞ゆ。驅上り來れる安居丸。

安居丸　殿樣、殿樣。

奥の方にて、

秀康　安居、何事ぢや。

秀康山三を從へて出で來る。

安居丸　右京が舞臺から落ちさせられた。

秀康　なに右京が落ちた早う呼び活けえ。

安居丸下場秀康續くを、

山三　御殿樣、こりや御茶を參らせられたな。

山三袖を扣へる。

秀康　むむ。

山三　落ちられたのでおざらうか。

安居丸慌だしく上り來り、

安居丸　殿、右京は夥しう血を吐いてぢや。

秀康　舌を嚙んだか。

花少しく散る。鳩啼く。

秀康　花も散るわ、人間の命も散らう、一期の榮も今の嵐に、あたら櫻はあとも殘さで、元の土へは歸り行くぞ、山三今より伏見へ歌舞伎を仕立てい。

山三　なに歌舞伎を御覽とや。

秀康　思ひ出に國が舞を見やうぞ。

山三　はつ、折角ながら國は戀病み、

秀康　なに、

山三　いや殿樣の御召なら、死なうと太夫は參りませう。

（幕）

大詰　伏見城中能舞臺

普通の能舞臺、前幕と同じ日。

唄

三河の國に差しかかる
ここも鄙路のおとろへや
夢の戀路とむすぼるる
渡せる橋は五つ六つ
七つにあまる八つ橋や

唄の半ばに、業平に扮せる山三郎、童に扮せる瓶江、使丁に扮せる傳介、登場す。業平床几に腰うちかけて、憩ふ童振り。

童　いかに我が君

唄　みそなはせ
あの澤間より生ひ出でて
今を盛りの時もよし
眉目よし、香好し、娘どき
童納まる。仕丁振り。

使丁　がいに咲いたは

唄　開いたは
はれやれ咲いた杜若
風が吹いてもつんとして
雨が降つてもしやんとして
色が深かう、おはすよの

仕丁納まる。中將振り。
そやし立つれば中將も
花に見入らせたまひつつ
げにや月行き星行きて
夏來にけらし八つ橋の
あらなつかしのかほよばな
阿國の杜若の精登場。

女　ならなう
唄　しばし旅人よ
咲きたる花になどかさは
涙をそそぎたまふぞや
業平振り。

人の心はよつの緒の
喜怒哀樂のさまざまに
かはれるまでと知りたまへ

杜若の精振り。

否とよ我れは天さがる
鄙人なれど、うつし世の
調べは秘めて胸にあり
玉の小琴は草笛に
秋風樂は、松が枝の
たよりにつたふ、天の曲

業平振り。

さかしき賤の女よと

見遣り見かはす花あやめ
見れば見るほど似たけはひ

兩人納まる。童續きて仕丁振り。

あの聲音から眉目からが
よう人に似てさむらふぞ
さつても貴方に生き寫し
瓜をちぎつて並べても
これ程似たがあるべいか

女振り。

見しは夢かや忘られぬ
その面影はおうそれよ
微されて登る雲のうへ

袖をつらぬる卿相の
中より立ちし夢の人
樂の拍子に打ちつれて
差手のしげき双の舞
手と手の觸れて花となり
目と目の合ひて火と燃ゆる
簪の花の搖らぎては
情の息をむねに聞く
雲のびんづら亂れては
思ひの色をあらはせり
知らせなしに道具廻る。

同　見所

能舞臺と對したる見所、金屏風にて圍ひたる中に、秀康は蓆上に、左右に侍、小姓、侍女數人、此方には醫師今大路道三、藥箱を傍らに扣へたり。始終囃子の音。道三は藥湯を調劑して、小姓を招きて薦めしむ。秀康取つて飲まんとして、痙攣起り茶椀を取落とす。道三これを見て立上り、手を取りて脈を試む。下手の襖を開きて、國家老本多伊豆守富正登場。この體を見て無言にて平伏す。

秀康　伊豆か、

伊豆　はつ。

秀康　別れになつたぞ。

伊豆　御心弱き仰せかな、いかでさることの、

秀康　いやいや、我が心より得たる病骨の髓まで侵み透つた。

伊豆　御國表より只今上洛の某御病氣と聞いて直ぐに參上。

此時近侍の一人慌ただし氣に入り來りしが、秀康と伊豆との對話を見て差扣へたり。

秀康　なんぢや。

近侍　はつ、左馬助唯今死去仕りました。

秀康　また親も失せたとな。

伊豆守は近侍に、

伊豆　さまでの病氣とも承はらぬに、して如何樣の最期を遂げたぞ。

近侍　吐血致して相果てたと申しまする。

秀康（半ば獨語のやうに）世渡りは旅路のさまざま、東南西北志すに任かせたり、我れは此方と思へども、人は彼方へ足を向けたり、走りし後は草の蔭野、冥途の道は賑ふのう。

伊豆　何とてかやうに心細き事のみ仰せあるやらむ、是れもおん病のなす所か御心確かに持たせたまへ。

秀康　伊豆、あれ見い彼方は舞の囃子、人の世に咲く物云ふ花を、現に見ては此世を去る、さりとは人の榮華の極みぢや、さりながら、難波に生ふる蘆の若葉、あな心なの海士人は、月諸共に刈り取るならめ、秀康一日世にあれば、世は一日の義を繫ぐ、われ失するとき義は滅せむ。無道の譏りは不義の富貴と、共に東に流れ行かう、ただそれ故に命が惜いぞ。

病苦益す重る。

秀康　伊豆、無い命か惜しいわ。

伊豆　はあ、天運、天命、人の力は是れに盡きませう。

秀康　天ぢや、運命ぢや、自然に開らく花を見て、天の威光に跪くより、技巧に生ひし人間の誇を天に引き較べうぞ、

　　益す苦痛の氣味知らせなしに道具廻る。

同　元の舞臺

業平と女と振り。

今は昔と繰りかへす
かへす返らぬ池浪に
似たりや似たり花菖蒲

業平納めて、あとは女のみ振り。

身は南海のつばくらめ
春を慕へる少女子ぞ
捨てよ、捨ててよ、後朝の
はやうつり香はさめたらむ
ええ惡性の戀知らず
眉目も姿も同じとは
やはり元木が戀しかろ
新らしいとや、古いとや
戀慕の花の狂ひ咲き
執心ここに愛着の
古へ人の乘りうつる

なうなつかしや我れはこれ
あかぬ別れを春日野に
浮名を留めし自らぞ
野草の花に精魂を
よせてここまで見えたり

近侍　舞臺の下を驅け來る近侍、
舞もそれまで、殿樣御臨終ぢや。

山三　や。

舞臺の役者一同に驚く。近侍去る。阿國も取り亂さんとしたるを堪へて舞ひ續ける。地の謠も拍子も切れたるに、阿國は柏子を蹈んで自ら謳ふ。

阿國　亂れ亂れよ、我が戀は

それよ咲きたる杜若

唄　此邊より、しどろもどろに謠ひ出すものあり。

ただ一生に一度咲く
人をおもひし一念が
輪廻の浪にただよひて
邪婬の罪を受けなば受けよ
花に刻めるこの戀は
君とふたりに消ゆるとて
此世の春にとどまらむ
思ひ出多き戀をして
御身と我れとは老いせじな
うせじや消えじ後の世の

なからむまでも、戀は失せじ

阿國舞ひ納め、拍子を踏むと倒るるに、舞臺の役者は驚きて介抱す。本多伊豆守は出で來り、この體を見る。

山　三　太夫、氣をしつかと持たれませ。

阿國氣の付きたる樣にて、

阿　國　ああ、ああ。

山　三　思ひがけなき御別れに、心を落とすも尤も千萬、さほどに氣分が惡しければ、御臨終と承はつたに、舞ひ續けては居られたぞ。

阿　國　舞臺へ上がれば神への贄、一段終らぬそのうちは、人の戀では留められぬ。

山三は伊豆守の立てるを見て、

山　三　はつ御臨終をも憚らず、舞ひ續けましたる段、御見逃がしを願ひまする。

伊　豆　職分ぢや、役者の藝は合戰の場、後へ引く方はない、歌舞伎なんぞと蔑みしが、武士も及ばぬ魂ひは、まことに主君の贔かせられたも道理かな、天下一人、我等も肖かりたいわい。

（幕）

その夜の石田

（場）

關が原假陣場

（時）

慶長五年九月十四日夜のこと

（人）

石田治部少輔三成
同家臣島左近勝猛
同　悴新吉郎
同家臣蒲生備中守郷舍
大谷刑部少輔吉繼
その夜の石田

眞田の使者穴山小助
武士、從者、厩の小者等
南宮山の巫女水篭

農家を假の陣場としたる樣、床板を取放ちて出入に便した
る箇處などあり。大雨のあとにて、まだ小雨寂し氣に降る、家
の外面にて武士四人蕭條に焚火を爲し居る。

武士の一　何とであらう明日の天氣は。

同の二　秋雨の定めはおざらぬ、小止みにはなつたれど、片時の先も占が置
けぬ、降らば降らして置くまでぢや。

同の三　さりとは明らめのよい事の、合戰の最中の大雨は武者にはいかい

禁物ぢやによ。

同の四　味方も困れば、敵方も苦むことぢや、代の草鞋に事を缺かねば、あに
が篠突くとて大事がる、結句面白い功名も出來やうぞ。

同の一　降らば降れ、長雨は恐れぬど、寒いには辟易よ。

同の二　火を焚いても煙は立てな、明しの見えぬ樣にとある、大將の首取る
よりも難かしい仰せな！

同の三　寒いには火が何より、何の是れしきの焚火、敵方に漏れやう譯おざ
んない。

同の四　よし敵方が掛りをつけたら、味方も打物取る分ぢや。

同の一　あつたら武者か顫へるのは、醜うも見苦しいわ。

向ふにて『すされ』『行け』『退け』など云ふ聲騷がし。武士等は何
故やらむと訝る所へ、南宮山の巫女みすず、髪を亂し、幣束を

持ちて登場あとより、士卒一人搦んで出づ。

士卒　物狂め、すされ、すされ。

と袖を取つて引く。

みすず　なに物狂にすされとか、すさるまじ、すさるまじとよ。

唄　月の夜も、降れば暗がり、くらまぎれ、目先も分かぬ暗まぎれ、はつちや恐もの、茄子に瓜をならせうとや、熟るかならぬか、畑を見さい、心の闇に目も曇る、迷ひ惑ふぞ悲しけれ、南無大日如來佛薩陀。

武士の一　この狂女は何處のものぞ。

みすず　自らは南宮山の巫女にて候。

武士同　巫女ならば神には使へで、陣中へは何しに來たぞ。

みすず　われも知らねど、

唄　うかれきて、あれあれ東が白むは日輪の升るなり、西の晦いは、いよさて山の端に月輪の沈むよの。

武士の二　唄ふ歌にも事を缺き、どうやら東を最負する狂女。

武士の一　追出せ、追出せ。

武士の三　すされ。

武士の四　どけ。

みすず　いいや退かじや。

唄　退くまじや、退けとは禁句はばかりの軍の場になどされば、おしやる、おしやる、などおしやるおしやる。

武士の一　ええ面倒な、括してしまへ、

武士等手取り、足取り、みすずを奥の方へ引立て行く。

島左近物蔭にて狂女の樣を垣間見たる心にて登場、焚火盛

んに燃上るを見て踏み消す。

左近　今まで數度の合戰に出遇ひ、生死の街に逍遙なしても、夢愕かぬ勝猛が、小耳に放れぬ狂女の戯歌、齡に連れて心まで、少しは年を取つたと見える。

士卒一人登場。

士卒　左近樣、信州より御使者ておざる。

左近　眞田殿よりの使者とや、御通し申せ。

士卒下場。眞田安房守の使者穴山小助登場。

小助　左近殿。

左近　珍らしや小助殿如何致して御發向ぢや。

小助　姿にそれと知ろし召れん、亂軍の中を使者に立つたわ。

左近　近頃稀有の御姿な！、いざ是れへ通られませい。

小助　さらば御免あれ。

左近小助能き所に着座す。

左近　先づ火急に伺ひたきは、房州御身の上、如何渡らせらるるぞ。

小助　無事でおざる。

左近　さらば明日の合戰に、仙道方は間に合ふまじ。

左近　如何にも江戸の加勢の人數は我等の手にて食留め申した、主人申すは、今度の一戰、既に兩三日の間ならむ、昌幸かくて在るからは、仙道よりの加勢は、一人たりとも通すまじ、これを土産に御見舞に罷り上つた。

左近　有難し、この由主君へ申上ら。

小助　御披露を賴み入る。

左近の忰新吉郎驅け來る。

左近　新吉、何事ぢや。

新吉　親人、島津殿には唯今御陣を据ゑられまいた。

左近　して宰相殿には。

新吉　未だ到着なりませぬ。

左近　掃部が居るに何たる事ぢや、なほ御着あらば聞かせくれい、また備中殿へも、此由を御知らせ申せ。

新吉　畏りました。

新吉郎下場。民家の奥より石田三成登場。

三成　左近、島津公には着せられたとか。

左近　唯今御陣を据ゑられたと申しまする。

三成　遁がは早雄の薩州、勇ましいのう。

左近　御意御座りまする。さて房州殿の御使、唯今着到されまいた。

三成　外ならぬ小助男、さては大事の便か。

小助　唯今となりては十日の菊、對陣あまりに長き時は、味方は云はば集り勢、變あらんも計り難し、一刻も早う御驅合を迫き立ての使者におざりまいた。

小助髻の中より、生絹の小切を出して左近に渡す、左近は三成に捧ぐ。

三成　過ぎる程の用心をせられたの、なになに委曲は使者に申含め候恐恐、昌幸判、宛名も書かぬ眞田の狡さよ。

小助　今の折から拙者が身體を、消息代りとおざりまする。

三成　明日は愈よ大合戰ぢや。

小助　御籠りありし大垣より、打出たまひし御所存は。

三成　されば よ、昨今到着の敵方は、皆一夜陣を張り申す、人質に眼くらみ、

大垣へ抑へを付けて、大阪乃至佐和山など、推掛うとの下墨と見た、さありては一大事、幸ひ、今日の小迫合に、思ふ儘の勝利を得たるは、味方の吉兆、此機を外さず總寄に、有無を一擧に付け申すぢやて。

小助　かの内府は、若年より、弓矢取つては海道一の名大將、味方今夜の動轉を、曉られなば如何あるべき。

左近　されば夜を籠め、當地には陣を移した、御聞きやる通り、まだ浮田小西などは、到着せぬほど、人馬には難義ながら、宵の口よりの大雨に、松明もなく、密密と關が原へは寄掛けたり。

小助　霧立つ山の木下闇、暗き森道に惑はざりしは、

左近　それぞ兼ての用意とて、長曾我部殿へ申談じ、大篝火を徹夜焚かせらるるを目處となし、牧田途へは進み申した。

小助　隙間なき御配慮かな、明けなば晴るる霧の間より、思も寄らぬ味方の勢、

左近　驚く敵へ一發の、烽火と共に切てかからば、

小助　叶はぬまでも鎬を削り、こゝを必死と切結ぶ。

三成　相圖を待ちつる南宮山の藝州の大勢、安國寺、長束なんどの手の者は、内府が旗元の直中へ、面を黑まし切て入らば、

小助　譜第の本多井伊なんどが、如何に急るもその詮なく、

左近　雪崩を打ちて白み渡り。

三成　やがて内府が皺首に、見參に入らうずるわ、

士卒登場。

士卒　申上まする。

三成　何事ぢや。

士卒　大谷刑部少輔樣、御越にござりまする。

三成　例の乗物ならん、其儘にて御通し申せ。

士卒　はあ。

士卒下場。

小助　合戰明日に極まる上は、我等とて長居は無益、急ぎ信州へ立歸り、此方よりの吉報を、受くると共に關東勢を、唯一拉ぎに仕らむ。

三成　素より隙間のあらぬ房州侘とてあるまじいが、なほ其上に心を付けられ、やがて愛たき對面の、話し草を造り申さう、陣中といひ夜分なれば、返しの消息は認め申さぬぞ。

小助　畏つて候、さあらば御免。

左近　何分共に御頼み申すぞ。

小助頷く、三成左近に送れと氣色す、左近立つて小助と共に下場。三成扇にて手を打ち人を喚ぶ、武士二名程登場して、主の氣色を伺ひ、床几を直すことなどあり、その間に輿に舁かれたる大谷刑部少輔登場惡疾のため眼癈たるうへ面相を損じたるより、覆面したる儘にて輿を出でて座を定む。

三成　病中も御厭ひなく、松尾山への御發向近頃での太儀、御芳志過分に存じ申す、して彼人の樣子はな。

吉繼　あたりを遠ざけられい。

三成　各には幕外へ出られて、四邊に心せられい。

一同　はあ。

一同退出す、雨また降り出だす。

吉繼　あたりは。

三成　某の外には影もない。

吉繼　さらば申そ、筑前の殿は夕顔と見たよ。

三成　夕顔とは。

吉繼　昨日は昨日、今日は今日、風に任せてふらついておざるわ。

三成　裏切りとまでも極まらいでな。

吉繼　我が黨に旗を立て、伏見を攻落したる小早川、それがあの爲體にては、十が九つまでは裏切りかな！

三成　當の大將秀秋は恐るる敵とも思はぬが、名だたる家老も多かるに、八千の人數あり、もし敵と見ば、如何なる備へを立つべきぞ。

吉繼　異心は無しと某に、言葉を番へはしつれども、見えぬ眼に讀みたる心中、なにへろへろの筑前勢、合戰の間の一日半日、拙者が手の者千二百にて、山の麓に陣を張り、身動かしをさせ申さぬわ。

三成　此上は何分共御身が働きを願ふばかり。

吉繼　事の始めに止めはしたが、聞入のない今度の企、元より命は友垣の、情に御身に參らせた、吉繼息のあるうちは、松尾山の旗色など、内府に弓引く大軍、大事の心に掛けさせられな。

三成　御身の請合心易し、此後は明日の運ぢや。

家の一隅に雨漏りて音激しく聞ゆ。

吉繼　水の音な。

三成　古びた家で雨漏が致す。

吉繼　雨が漏る！

三成　草も朽つれば雨も漏らうで。

吉繼　いかさまのう、雨漏には桶など受けに並べうまで。

三成　降り止むまでが大事ぢやわ。

吉繼　降り止むまでが命ぢやわ。

新吉郎驅け來る、家臣留む。

家臣　御奥にては密談とおぢやりまする、

新吉　さらば是れより御意得申さう、なうなう御主君、小西殿には今方御着陣にござる。

三成　うむ攝州がわたられたか。

吉繼　さらば我等も陣所へ歸らう。

吉繼立つ、三成は吉繼の手を取り。

三成　東白まば御邊も我も、生死の巷の關が原勝利を得なば此世の對面。

吉繼　俄か盲の刑部なれば、討死致さば三途の河原で、御身の顏を見るであらうよ。

三成　何れにしても逢ふぢやまで。

吉繼　何れにしても逢ふであらう。

二人　むははははは。

三成扇にて手を打つ、新吉郎及び家臣等幕外より入り來る、

吉繼は輿に乘る。

三成　御見送り申せ。

吉繼　是れは造作に預るよ。

三成の外、一同下塲、島左近蒲生備中と共に上手より登塲。

左近　是れにおわせられましたか、して粗增は如何でござりましたな。

三成　おう散散ぢや

備中　すりや裏切か。

三成　なに、大事の前の小事、大谷一手にて引受うと申したわ。

左近　目こそ晦けれ、彼殿が采取つて下知なさば、いかに多人數なりとても、小早川が勢どもを支へるには過ぎものなり。

備中　其間に當の敵を竭くさば、筑前勢は風前の燈と共に消え申さん。

新吉郎登場。

新吉　はつ浮田殿愈よ御着相成りまいた、先手は掃部殿にござりまする。

三成　宰相にも着かせられたか、某、島津、小西、浮田、よし小早川を敵と見ても、大谷、脇阪、戸田、木下、また南宮山のあなたには、毛利、吉川を始めとし、長束、安國寺、長曾我部、正奇の二道を一發の烽火と共に切入るべき、手段は既に定めたり。

左近　兼て直江城州と御申合せ圖に中り、愈よ明日は、天下を爭ふ大軍。

備中　味方の段數、敵の切れ數、合せて二十萬餘の大軍、恐らく日本始まつての勝負、心地よい事になりましたわ。

三成　太閤殿下の御跡を、手を濕らさずして握り込む、江戸の内府の腹黑さ、取つてよい天下なら、我等が取るも支はあるまい。

左近　所詮軍は雙六の丁と出るか、

備中　半と出るか、

三成　賽の目が業をするまで、左近、備中、大博奕のう、むははは。

この前より雨は降り止み空明るくなる。

新吉　親人、あれ御覽ぜよ雨は降り止み、雲の拗の合間より、薄るる光は、月輪の、現はれたまふと覺へたり。

左近　明日は天氣ぢや。

備中　戰ふにも榮があるわ。

左近　久振にて内府公が、押付を見るであろ。

備中　夜明けるにも時があるまい、御分も我等も陣所へ罷らう。

左近　さらば殿。

三、成　方方。

三人下場、蟲聲起り月出づ、向ふにて騷がしき音して、三成が

乘替の馬飛躍し來り、三成を見て立留る、三成は不審す、厩の小者後を追ひて來る。

三成　如何致いた。

小者　暗紛れの道中に、御乘換に付添ひましたる舍人、川の深みへ陷込んで、其儘に成りましたに、驚いたと見えまして、止むる鼻綱を引き切り、一散に飛び出しましたが、逸れずに陣所へ入りました。

三成　深みへ入つて命を捨てたと、

小者　左樣でおざりまする。

三成　厩小者の常ながら、足許を顧みぬ不覺、不便な最期を致し居つたな、馬は裏手へ繫ぎ置け。

小者　はあ。

小者馬を引きて下塲狂女の謠遠に聞ゆ。

唄　月は出でても心は曇る、闇に迷ふは誰そや、いぢらし、

三成　悉く手配は濟んだ、舍人は失せても馬は歸りぬ、筑前が心變りも、勝利の後の料理には、便りよき事もあり、天下は廻る水車、かの德川を迫くか迫かぬか、明日の合戰の待遠しさよ、唯十二時に日本は、我が腕にて美濃地のほとり、關が原へは縮め置く人の力は限りを極めぬ、唯この上は天道の、奇しき轍の痕を軋らむ。

（幕）

前途

（場）
村社の裏手

（時）
午後七時頃

（人）
男　一瀬實
女　たか子

男は出て來て、

男　もう來ざうなものだが。（マッチを燈つて時計を見る）

女　遲れて出て來る。

女　實さん御待遠さま。

男　おたかさん、隨分待たせましたね。

女　だつて、さう男の方見たいには、出られませんもの。

男　だから時計を合はして置いたではありませんか、此前の時のやうでは困ると思つて、昨夜わざわざ貴女の所へ行つて時計を合はして來たのです、貴女は人を待たせるのを何とも思つて居ない、もう三十分立ちますよ。

女　それは濟みませんこと、私だつてお待たせする積りはないのですが、お客樣があるのですもの。

男　お客つて誰れ？

女　なに、郡會の小河が來て居るのですよ、構やあしないの、私今夜はね、お松さんの所へ行くお約束があるつて家を出たのですわ。

男　もし家から迎ひでも行くといけないね。

女　大丈夫ですよ、お酒が出るのですから、またあの小河さんが、そりやあ長つ尻で、十時が十一時になつたつて歸りやあしませんよ。

男　さうかね、あとで叱られでもすると、大變だから。

女　おほほほほほほ、叱られたつて、こんなこと知つては居ませんものの。

男　それはさうだけれどもね、もし分つたときに惡いからさ。

女　惡いたつて、實さん今になつてそんな分つたら私……

男　分つたら？

女　貴方、人が惡いのね。

男　人が惡い、私が、なぜ、

女　だつて、

男　だつて？

女　厭だわ……

男　何が厭？

女　貴方そんなことを云つて、私を困らせるのだもの。

男　なんで困るのなにも困ることは無いではありませんか、知れたら惡いと云ふのだらう、秘密にして置かうと云ふのだらう。

女　實さん、秘密だなんて、今に屹度知れますわ、磯野さんだつて、太田さんだつて、知つてゝよ。

男　お石さんや、お鈴さんが知つてる！そんなことは無い筈だ、どうして知つて居るといふのです。

女　どうしてだか知りませんが、いやに貴方の事を聞くの、そりやあ煩さいの、

男　あはははは、そんな事だらうと思つた、昨日も僕はお石さんに逢つたがね、そんな風は無かつた、挿花の歸途だつてね、蝦夷菊を提げて居たつけ。

女　何かお話をなすつたの？

男　いや、話しやしない。

女　それで……このことを知らないつて、どうしてお分りになりましたの？

男　それは素振で分るさ、態度で分らあね。

女　素振で分りますつて、あら嫌な、貴方裁判官跳足ね。

男　おたかさん、貴女口が悪くなつたね。

女　ええ私どうせ口が悪いの、口も悪ければ器量も悪いの、

男　何も器量が悪いなんて、誰れも云やせんぢやないか。

女　いまさう仰有つたではありませんか。

男　口が悪いと云つただけぢやあないか。

女　それかお酷いわ、私貴方の前だから、何か遠慮しないで云ふのです、

男　それをそんな事云つてあんまりだわ。怒つたの怒つちやいけないよ。……立つて居ては話か出來やしない、この縁で休まう、此方へお出でな、ここにお掛け。

女　よござんすわ、貴方澤山人を馬鹿になさいまし。

男　何か馬鹿にしたの。

女　だつて人を上げたり、下げたりするのですもの、

男　上げたり、下げたりなんかしやしない。

女　だつて掛けろなんて、

男　縁へ腰を掛けるのが可笑いの、

女　話の中途でせう。話の途中に急に掛けろなんて可笑いわ。

男　話の途中に急に縁にかけるのが可笑い、何も可笑い事はありやしない、ああ、よしよし、可笑いなら可笑いでよい、貴女は立つて入らつしやるさ。

男縁に腰を掛ける

女　あら直ぐ怒るのね、怒つちやいけないわ、ねそこへ掛けたつてよいでしよ。

男　よいか悪いか、僕は知らん。

女　貴方邪見だね。

男　誰れが？

　そのうち女も縁に並ぶ。

女　貴方が、

男　僕が、

　手を取らんとするを女は振拂ふ。

女　ひどいわ、

男　何が酷いのさ。

女　だつて私は女ですわ、かうやつて出て來るには、どの位苦勞をしてだか分りはしません、それに貴方は些とも思ひ遣りが無いのですもの。

男　思ひ遣りが無い、さうかも知れないな思ひ遣りの無い人が早く來て、思ひ遣りのある方が遲く來る！

女　ようございますよ、どうせ私は思ひ遣りが無いのですよ。

男　今度は其方が無い方かね。

女　貴方そんなことばかり云つて居らつしやるの……、何んだか御相談があるといふお話ではありませんか？

男　たかさん、實はそれで來て頂いたのですよ、僕はね、今度大に決心したことがあるの。

女　決心つて、どうなさるの？

男　東京へ行かうと思ふのです。

女　東京へ入らつしやるの何んで入らつしやるの？

男　なぜだか實は僕自身にも分らない。

女　あら、また調弄ふの、

男　調弄ふのですつて、僕の云ふのが、さう聞える！

女　だつて何しに入らつしやるのだか、分らないなんて仰有るのですもの。

男　全く僕にも分らないのですよ。

女　御見物！

男　いいや、

女　御修業？

男　さあ、まあそんな事かと思ふのです。

女　そんな事かと思ふのですつて、そして何を御修業なさるの？

男　それが分らんのです。

女　それで東京へ入らつしやらうと仰有るの。

男　さうです。

女　そして御父様も、御母様も御承知なの。

男　まだ話さんのですが、多分不承知だらうと思ひます。

女　さうでせうとも何の御修業だか分らなくつて、だつた一人の貴方を東京へお出しにはなりますまい。

男　恐らく承知しないとは思ふのですが僕は押切つて行く積り、それで誰れよりも一番先きに、貴女にだけお話をするのですよ。

女　それは有難う、けれども實さん、お家で御承知が無かつたら困るではありませんか。

男　學資ですか？

女　さうでせう、それに一番先きに困りはしませんか。

男　そんなことはどうにかなるだらう

女　どうして？

男　苦學といふ様な方法もあるだらうし……

女　苦學ですつて、あの小説などにある、車を引いたり牛乳を配達したりして勉強すること……そんな事が貴方に出來るものですか。

男　僕に出來ん？　出來ん筈は無からうと思ふ。

女　いいえ出來ませんよ、そんな馬鹿げた……おほほほほほ、

男　たかさん、何を笑ふの、笑ひ事ではありませんよ。

女　だつて實さん、本當とは思へませんもの。

男　ああさうですか、それならそれにして置くさ。

女　あら貴方また怒るの、

男　怒りはせんです、怒りはせんですが、貴女は眞面目に相談に乗らないから、最う話はよさうと思ふのですよ。

女　そんなこと仰有らないで、詳しい事を聞かせて下さいましな。

男　だから、今云つた東京行きのことさ。

女　ああ東京行き？

男　その東京へね、僕が行かうと思ふには理由がある、その理由を話したら、外の人なら知らないこと、貴女だけは屹度分る筈なのだ。

女　私に分るのですつて、

男　さうさ二人の心は二人に知れる、僕の心は貴女には分るでせう。

女　ええ、さうです共、私の了簡だつて貴方は御承知の筈だわ。

男　だから話さないでも能い程の者だが、實はね、私は何となしに東京へ行きたくてならないのだよ、山へ行くと山の岩がものをいふ、「貴樣の天職は都にある、人の上に山を立てろ、」とそやし立てるのだ、堤を歩むと緩い水が低い調子で、耳許に呼くのだ、「流れについて都へ出ろ都は水の集る所だ、流れの上に塔をつくれ」と囃し立てる、たかさん貴女はかういふ聲は聞かないかね。

女　貴方の云ふ事は私には分らないわ。

男　分らん！　貴女に分らん！

女　でも岩が話すの、水が語るのと仰有るのですもの。

男　さうかね、岩の言葉や水の物語が――無心の聲は分らんかね、それでは有心の聲は分るだろ、それ狐の聲は分るだろ、「人間の愚かものよ、なぜに猪猿と共ぐつて野良には居るぞ」、これは分らう、梟鳥の聲は耳に付かう、「刻むぞ、刻むぞ、若い生命は菊の葉の邊と食ひ込むぞ」、

女　ね、これは分るだらう。

　貴方はどうかして居らつしやるわ、狐は凄さうにくわいくわいと鳴く、寂しさうに梟鳥はほうほうと聞えるばかりですわ。

男　僕には蟲の聲も聞える、「時が過ぎるぞ、なすべきことを怠るな急げ、急げ」と聞えるのだ。

女　露の間の命とも知らないで、一生を奏でて終る蟲の聲は、私には、「滿足」とよりしか聞こえませんわ短かい時に急がしく一生の樂を極めるとよりしか思はれませんわ。

男　その短かい命に、爲すべき事を仕遂げねばならないのだ、僕はただ最う時が惜く、惜くて惜くてならんのだ。

女　私だつて惜いわ、昔の春は恨めしいのね、さうだけれども私はね、いまが夏の盛りと思つて居るの。

男　さうかも知れない貴女には今が眞晝の盛りだらう。

女　實さん。直きに秋は來るの、秋が來たら實を結ぶものは結ばうし、枯れるものは梢頭から追追衰へましよ、私は衰へるのですよ、よござんすか、夏の盛りを少しの間に、咲き切つて終ふ八重咲の花と一緒に終るのよ。

男　貴女はそれで滿足するの。

女　今になつてそんなことをお聞きなさるの、月も日も時も私は覺えて居ます、蕨取りの歸りがけに、あの小松の綠の中で、貴女のお心を伺つたとき、もう私の命は短かくなつたのですわ、私には兄弟がありません、他家の名字を名ることは出來ますまい、貴方だつてさうでせう、やつぱり跡取りではありませんか、末はどうして一所になれます、え、どうして長く添ひ遂げられます、

男　たかさん、そんなことを云つて今になつてどうする氣なの？

女　私はただこの儘で居たいのだわ、雲のやうな戀をして、吹き拂ふ風の來るまでは唯ぢつとして居たいのですわ。

男　風が來たら二人の戀は露と消えよう、どうせ消えるのだ、要は時間の問題だけだ。

女　だから、その時間が惜いではありませんか、貴方にも私にも、どの位ある時間なのです露と消えるのですつて、露ですわ、露ですわ、露ですとも！　露の珠を貫ぬいて、幽かに咲いた苔の花、一生は日の中らない椎の蔭に送るのでしよ。

男　椎！

女　椎ですか、樫ですか、そんなことは何んでもよいのです、貴方といふ日の中らぬ蔭に、追付一生を埋めるのでせう。

男　行先は夫婦になることが出來ないと云ふのですか。

女　でせう、ね、それとも一緒になれますか？

男　家名といふ役にも立たない鐵の鎖が、二人の足に搦んで居るうちは、

女　いけないでせう實さん、どうしませう、私は一生の歡樂を、この半歲

か一年の間に縫ひ縮めて居るのですよ、大きな相を鏡に縮める、二人は戀の寫眞師なのね。

男　寫眞の技師か、それではいかん、天地の景にわけも無く服從する寫眞師では話にならない、畫でなくては冗だ、美術でなくては冗だ、人間は寫眞師では冗だ、美術家でなくてはならぬ、自然の命ずる戀をして、それに一生を葬られては、天の支配に壓されるのだ威力に屈服してしまふのだ、意氣地のない骨頂だ、どうしても私は東京へ出る、人の集まる都に出て拠くだけは拠いて見る。

女　都へ出るの、拠くのと、さうして貴方何になるの？

男　僕が何になる、僕の前には道がある、道があれば進んで行く、進んで行けば、いつか目的の所に出る。

女　その目的が分らないではありませんか。

男　分らない事は無い、戰ひに克てば領土が出來る、その領土の王になるのだ人の世に城を立てて、雪の白根に上るのだ、清い潮に浮かむのだ。

女　あても無い事に、そんなに興味を持つて居らつしやるの。

男　それが人生の約束だらうと考へる。自分の天分だと思つて居るのですよ。

女　それ程に東京へ行くことが！

男　隱されて居る天の謎は、僅かの身躰で解かねばならぬ。

女　私を捨てて入らつしやるの。

男　そんなことを云はずに居て下さい、その問題一つで、どの位頭腦を艱ましたか知れやせん、思ひ立つたのは古かつたが、實行するのが延びたのは（女の手を取り）、この手だ、この柔かい五つの指は、風なき林

女　の蜘蛛の巣だ、蝶の飛ぶのを遮ぎるのだ。
　　では風が來たのね、望といふ、功名といふ強い風に、私は吹き拂はれたのね。

男　拂へないのだ、拂へないから相談するのだ、燃ゑてる光に憧がれても、この境界から飛出せない戀の俘となつてる僕だ、放して下さい、東京へ遣つて下さい、貴方から勇ましく、「行け」と驚けして下さい。

女　いいえ出來ませんよ、それでは私はどうなるのです私に死ねと仰有るなら、飛込んでも見せませうが、別れようと云へとは無理ですわ、そんなことを私の口から出させようとは、人の心を知らな過ぎるにも程があります。

男　それを云つて下さいと頼むのだ。僕の幸先を祝して、勇ましく云つて下さい。

女　そんなことを……祝して勇ましく私に云へると思つて入らつしやるの。

男　云はれても、云はれなくても、私のためだから云つて下さい。

女　云へば貴方は立つのでせう、命も望も樂も、大地に埋める鍬の柄を、私に抓めと仰有るの。

男　埋まりません、亡びません、何があらうと失せないのは、二人の若い血の流れだ。

女　でも貴方が東京に入らつしやれば、戀のをはりはその時限り。

男　そんな事は無い命の續く間は繰返すのだ、眞實さへ失せないうちは、いつもその香は新らしいのだ、花は時を經て乾枯びても、過ぎ去つた春の面影は、世の有る限りは胸に殘る。

女　明らめのよい！　男はやつぱり薄情だ。

男　薄情！

女　だつて貴方は平氣ですもの。

男　男の心は女には分らないのか、腹で零してる涙は、……やはり貴女にも見えないのか、……辛しの利いた涙の方を、やつぱり貴女は歡迎するのか。

女　……

男　（立つて）たかさん、何にも云ふまい、さ、解れよう。

（男に縋つて）實さん、怒つたの強情張つて惡うございました、堪忍して下さい、そう貴方が決心しては、とても思ひ返して下さいますまい、暫時のうちは分れませう。

男　暫時！　暫時ではない、永久の別れですよ。

女　永久！　ああ貴方がお歸りのときには私はもう……これを限りになるのでせう。

男　そんな心細い事を仰有らないで、そのうちには何ういふ姿に變るのやら、私達の行先は、どんなよい事がないとも云へませんよ。

女　頼みにならぬ望を懷くと、反つて失望が大きくなります。

男　男の方は思ひ切りがよい、どうせ一度は分れる筈の、はかない戀の追分け道、知るべの石が、今夜立つとは思はなかつた。

女　親の名譽とか家の名とかを思はなかつたら、たかさんと二人で危ない道を歩むのだが……、人知れぬ戀のはじめは、人知れぬ終りを結んだ。（女の手を取りて引寄せ）、たかさん。

男　實さん。（顔を見合せる）。

（幕）

信玄最期

（場）三州野田城郭内
同城外星隠れの丘

（時）天正元年四月十二日のこと

（人）野田城主菅沼新八郎定盈
徳川の臣設樂甚三郎貞通
同　松平與一郎忠正
同　島井三郎左衛門
同　村松芳休

同　足輕　太郎衛
同　士卒　一人

武田晴信入道信玄
同　四郎勝頼
馬場美濃守信春
内藤修理亮昌豐
山縣三郎兵衛尉昌景
小山田兵衛尉信茂
内藤の手の武士二人
小山田の手の士卒二人
武田方の士卒大勢

第一場　三州野田城郭内

郭内の一隅、杉の稚木などに幕掛け廻したる中に、卯の花匂ふ野田城主菅沼新八郎定盈、左右には設樂甚三郎貞通、松平與一郎忠正、團坐して評議の躰。ややあつて新八郎は口を開き、

新八　さるにても近頃の働き、祝着に存じ申すぢや、當時天下に並ぶものなき、武田方も攻め飽ぐみ、遮二無二の無理軍、多くの人馬を損じても、厭はぬといふ氣勢が見える。

甚三　かの信玄は掛引きに古今の妙を得たる強者、一兵を損ぜずして一城を屠ると申すが日頃の自慢と聞き及ぶに、競ひ掛つて責めつくるは、はや分別も盡きたさうな。

與一　勝つも負くるも時の運、高が命は五十年、名大將の聞え高き、信玄公を敵となし、屍を城に曝さんこと、中中武士の本意たるべし。

信八　ただ憂ふべきは夜來より、井の水遽かに嵩減りしは、心得ずと思ひ

しが、狹間の隙より伺ひ見れば多くの金鑿を入れ、無殘と水口を留めし樣子。

甚三　斯くあらんと存ぜしより、米麥は存分に貯へ、籠城年を踰ゆるとも、支へなき心構へも、水道を立切られては如何せん氣力も無し。

與一　かくなる上は詮方無し、涸きに疲れぬ前方に、甲州勢に切り込んで、思ふ樣に働きなし、さてその後は野ともなれ、土ともなれと思ふは如何に。

信　八　その思案面白からず、それぞ即ちかの古武者の陷穽に飛び入るもの。

與一　さりとて御名代に、よき分別のおはすと仰有るか。

甚三　待たれい與一、迫くばかりが勇者で無い、なう御名代。

新八　されば、先づ御待やれ。

士卒　殿樣、西方の井戸も減りましてござる。

新八　ほう、汲む世話が無うてよいわ、行け行け。

士卒一人出で來り、新八郎の前に跪づきて、

士卒一禮して去る。

甚三　東の方は疾くに切れたが、さては西まで減じて參つたか。

與一　卑怯未練の甲州勢、軍は腕でするものぢやに。

鳥井三郎左衛門登場、幕の外にて小腰を屈め、

三郎　御名代。

新八　鳥井、此方へおざれ。

三郎　はあ。

三郎左衛門幕中に入りて蹲る。

新八　どうぢや、何ぞ新らしい手口でも致し居るか。

三郎　何共分り申さぬが、一つ不思議の事がおりやる。

甚三　不思議とは、何故の事をするぞ。

與一　即時にても攻掛けるか。

新八　はあれ静まりめされい。さて三郎、變はつた事があるとか、

三郎　されば、でおざる、今方城外の丘の上に、小さい旗が立ちました。

新八　なに、旗！

三郎　と申すより、目標を立てまいた、竹竿へ紙切れを挾んだのぢやが、何共不思議に見受けましたて。

新八　それで知らせたか、

三郎　御注進に參りまいた。

新八　よう氣が付いたぞ。さて各、是は何であらうな。

甚三　何樣攻めかかる合圖とも思はれず。

與一　紙切れ一つが何おざらう、それしきに驚いては、鳩が飛うでも怖けやうぞ。

新八　いやいや油斷のならぬ敵方、はての、

甚三　それにつき思ひ合はする事がある。

新八　何事かの。

甚三　我等愚意には、こりや芳休の笛聽きの爲てはあるまいか。

與一　何ぢや、笛聽き、城攻の最中に笛聽きでもおりやるまい。

甚三　云はれな與一、吹く者もあれば、聞くものもあらうず。

新八　いかにも彼が笛は名譽無骨の我等さへ時折は腸を搔き拐る心地がする、夜夜毎に吹き遊む、かの笛の音を聞かんとて、畫の中より標を立てさせ、座敷を定むる所を見れば寄手の中にも名ある勇士か？心憎い事であるわい。

輿一　何とであらう、今夜其奴の來る所を、待受けて首にしやう。

新八　又しても早まる、味方は小勢の山城にて、ここを先途と立籠る、信玄程の英雄が、力攻めに落しては、弓矢の名折れと心長く、我等を取卷く甲州勢、打て出でなば一端は、勝利を得ると申せども、敵は大軍盛りかへし、一つ殘りの郭内へ、附入にせられなば、落城は瞬く中。

甚三　ただ此儘に必死を極め、手堅く防戰致し申さう。

三郎　各々樣の御前をも憚らず、失禮ながら、私が存じまするは、一層のこと鐵砲にて、狙ひ撃を致しましたら、如何なものでおざりませう。

新八　むむ、鐵砲もて打たうといふか。

三郎　はい。

輿一　それ好かろ、今のうちから的を附け、彼者來ると見えたらば、唯一發、にて爲留られい。

甚三　城内にて手足は誰れであらうな

三郎　足輕の太郎衛が一の上手にござります。

甚三　さらばその太郎衛に申付けられい。

三郎　畏りまいた。

鳥井三郎左衛門立たんとす、新八郎は呼留め、

新八　先づ御待やれ、足輕よりは芳休を先に呼ばれい、この詮議の方が先ぢや。

三郎　はあ。

新八　芳休にの、新八郎御頼み申したいことがあるで、急ぎ是れまで參る。やうに、申聞け下されい。

三郎　承はつてござる。

三郎左衛門は走り入る。以前の士卒また出で來り、

士卒　殿様、また北口の井戸も、水が減りまいた。

新八　おう、北口の井まで水が引いたか、よし、行け。

士卒　はあ。

士卒走り去る。

甚三　およそ何如なる旱魃にも、絶えしことなき名水と、承はつたる北の井が、

輿一　水嵩が低うなりしとは、容易ならざる一大事。

新八　はて忙しなや御雨所、金鑿共が穴を掘り、水道を迫くとあるからは、水嵩の減るは愚、まだしも盡きぬが不思議でおりやるて。

甚三　御身は左様に落附きたまへど、飲水に事を缺きては、籠城は叶ひ難し。

輿一　片時も早く切入つて、甲州方と一期の合戰、思ふ儘の働きなし、名を末代に輝かさむ。

村松芳休登場。新八郎を見るより末座に平伏なし、

芳休　御名代様御召によつて罷り出まいた。

新八　芳休、大儀であつた、先づ近うお來やれ。

芳休　畏りました。

芳休は座を進め、近くに至り、

芳休　さて御用とは何事におざりまする。

新八　おう、外でもないが、其方今宵は例の笛を、一入吹き遊うでくれ。

芳休　この籠城のその中で、人の憂ひも知らぬ氣に、奏づる笛を御叱りなく、

新八　終夜吹いておくりやれ。

芳休　是れはまた異な事を、仰付けにおざります。

新八　仔細を云はねば不審もげに、夜夜毎の汝が曲、われも優さしく聞きつる處へ、思ひは同じ寄手の何某、夜な夜な忍びて笛を聞く、既に今夜も郭外の、小高き處へ目標を、建て置きたるは御坐んなれ、聽入る所を狙ひすまし、甲州方の勢を殺がむ。

芳休　なに私が笛の音に、慕ひ寄りくる敵方の、勇士を狙ひ撃たれむとや。

甚三　御名代が頼ませらるるはこのこと、日頃よりも一入心を入れて吹いておくりやれ。

芳休　折角の仰せではござりまするが、此儀は御免を願ひたう存じまする。

與一　こりや芳休、笛吹く位が大儀なのか、

芳休　何の大儀にござりませう、好きで吹きます笛の曲、眠らず吹かうが苦しうはおざりませぬ。

芳休　はい、どうも心が忍びませぬ、調は元より天地の聲、無心に吹けば歌口より、人の情は七つの穴を、漏れて泉と流れまする、愚昧の我等に候へど、邪悪ごとを思はねば、少しは笛も吹きまする。

與一　笛の講釋聞きたうおざらぬ、汝はただ吹けばよいのぢや、敵陣に切入つて、拾ひ首でもせいとは云はぬ、高が矢倉で優長らしう、好きの笛を吹けと云ふのだ。

芳休　各各樣の御中にては、人の數には入りませぬが、芳休とて武家の祿を食みまする、すは合戰と相成らば素肌でなりとも飛び出しまする。

新八　さ、その飛び出した積りでの、笛を吹いては給もるまいか。

芳休　……

新八　其方とて承知であらう、金鑿共に水を切られ、いとど難儀を彌増し

たれば踏み堪ふるも兩三日か、我等の命は惜まねども、この城一つ陷たらば、潮の如く甲州勢は、三河の國に流れ入り、所領と共に德川の、弓矢は長く廢たりなむ、成るか成らぬか知らねども、笛の聽人は名ある武夫、もし一發に命を止めなば、思もつかぬ吉運の、來らぬとも計り難し。

芳休　とは云へ傳授を受けし時、師匠の書きたる誓文には、口傳を人に洩らさぬこと、分きてまた調伏なんどの、邪惡ごとに組みせじと、證を立てて書きましたるに……

甚三　なに、それが邪惡あらう、君への忠ぢや、城中一同への義ぢや。

芳休　……

新八　いや賴むまいぞ芳休、よいわ、下れ。

甚三　御名代良い分別がござりまするか。

新八　分別！　はて何の分別があらう城中悉く心を合はせ、何かなして敵勢を退けんと肺腑を碎けども、愚昧の我等の思ひも付かず、妻戀ふ鹿のそれならで、物の音に寄る敵人を、狙ひ擊たむなんどとは、こりや芳休の申す通り、邪惡ごとであつつらうよ。

甚三　とは云へ目前に迫る大事、たとへ如何なる事なりとも、及ぶだけを勸むるが、武士の本分には候はずや。

新八　おう、調伏の罰を恐れ、ひとり極樂を欲つする善人、後世も現世も安穩なるべし。

今まで頭を下げて聞き居たる芳休は、この時に面を上げ、

芳休　御名代樣、吹きませう、心を清まいて吹き遊みませう。

新八　なに吹くと申すか、

芳休　はあ、よし誓文の面に背き、來世は阿鼻の三惡道へ、陷ちなば落ちよ、

殿様御爲め、終夜奏でませう。

新八　頼み申すぞ。

芳休　最初の曲には後世を弔ひ、次の曲には亂調の、われ人騒がし申すべし。

芳休力無氣に會釋し去る。あなたより鳥井三郎左衛門、足輕太郎衛を連れて急急と來り、

三郎　御名代、仰せありし太郎衛を率て參りまいた。

新八　大儀であつた。さて太郎衛、

太郎　へい。

新八　鐵砲にかけては、其方は聞ゆる上手さうな。

太郎　上手と申す程ではござんねえが、猪猴を的に致し、朝から晩まで山の中で、遊び廻つた驗には、少しは中る樣でござります。

新八　左樣か、さらば其の腕をもつて、我君へ御奉公せい。

太郎　へい。

新八　廓外なる丘の上に、笛に連れ來る敵の勇士、今夜は忍ひて狙ひを附け、唯一發に打取るべし。

太郎　その武者は、獨りで參りまするか。

新八　人數の程は定かならねど、幸ひ今日は十二日、月の光を便りにて、大將分と覺しきを、

太郎　づどうと打て退けませう。

新八　萬が一爲終せしとて、軍上手の敵方なれば、決して首級に目な懸けそ。

太郎　首を取つては惡うございますか。

新八　無用におしやれ。

鯨波の聲聞こゆ。甚三郎、與一郎顔色變じて立上る、新八郎は動ぜず。

新八　また例の空鬨でがなあらう。

士卒　一人驅け來り、

士卒　殿樣、唯今のは、また空聲におざりまする。

新八　さうあらうて、むははははは。

第二場　野田城外星隱れの丘

一面の草山竹竿に紙片の附きたるものあり、その下には楯を敷き、上に敷皮を並べ終りたる士卒二人草の中に蹲まりて物語る。

卒甲　もう此城も落ちさうな物ぢやな。

卒乙　金鑿が水を切つたれば、二三日の中には落ちるさうな。

卒甲　定めて其時は、死物狂いに働くぢやろ。

卒乙　何程働かうとも、水の中へ土塊を投ぐるやうなものぢや。

卒甲　その土塊なと拾ひたうおりやるわ。

卒乙　なにとかして功名を心掛けやうぞ。

武田晴信入道信玄、小山田兵衞尉信茂に太刀を持たせて出て來る。信茂は一禮して、先づ士卒の居る處へ來る。士卒はそれと見るより、草の中より飛び出して慌だしく頭を下ぐ。

信茂　御座の用意は整ふたか。

卒甲　へい。

信茂は用意の樣を熟と見遣り信玄の傍らに至り、

信茂　御用意宜しうござりまする。

信玄　例の所か、

信茂　御場所は濕氣過ぎますれば、今宵は少し趣きを換へてござりまする。

信玄、信茂の案内にて丘上に登り、會心の樣にて坐し終る。月光は次第に冴えて、皎皎として氷の如し。士卒下場。

信玄　例の所と事かはり、寛濶な事ぢや。

信茂　御賞美忝けなう存じまする。

信玄　はや笛の音の致す時節な！

信茂　例ならば聞こえまする程にござりまする。

信玄　往昔源平須磨の合戰に、拔駈けなさんと熊谷は、城門の外まで寄せ來りしが、吹き合すめる管絃の音に、暫は駒を休めしこと、我身に思ひ知らるるぞや。

信茂　かの熊谷は荒夷、我等とあまり隔てぬ系圖、較べんは勿躰なし。恐れながら舘には、新羅公の嫡流にておはします、かの三郎義光公は足柄山の古關に流泉啄木の秘曲を御傳授ありし故事は、末世の我等も知る處。

信玄　その風雅には引きかへて、我は日夜に武邊を事とし、城の繩張、陣所の手配、肺腑を碎く軍の驅引敵の笛を聞かうなんどと、思ひもかけずありつるに、如何なる不思議かこの小城には、樂に聾ひたる我耳を、引き附けらるるは心得ぬ。

信茂　習はぬとても名將は、自ら四智に達す、樂に心を入れられたまひし、新羅公の血の流れ、時代を隔てて我君の、身内に燃ゆると見えまする。

主君の後を追ひたる馬場美濃守信春、月光に透かし見て、丘

へ上り、信玄の前に跪き、

信春　我君、是れに御座ありしか、

信玄　其方も笛を聞かうでか。

信春　信春はこの仰せを聞くより、憂れはしき面色にて、元より無骨の信春、聊か武略の道こそ學べ、歌舞音曲の術を知らねば、なにとて笛に聞入るべき。

信玄　優さしくも笛の聽者と思ひ居つたに。

信春　いや某は御迎へに、參上致いておざりまする。

信玄　予を迎へとや。

信春　左様にござりまする。

信玄　ほう、敵城近く笛を聽く、無用心と申すぢやの。

信春　その道理を御承知あつて近間に逍遙なしたまふは、

信玄　ただ笛聽かう爲めぢや。

信春　城主は管沼新八郎、小身ながら侮り難き相手なり、夜を續けし忍びの歩き、それと知つて待掛けなば、

信玄　古入道の我等ぢやぞよ兵衛それ、

信茂の方を顧みる、信茂は心得て突立ちあがり、軍扇を開き一と振り振れば、ここの草村、かしこの蔭より、強者大勢立ち上る。兵衛はまた扇を鎖して十字を切れば、強者は合圖の下に隠れ入りぬ。

信玄　夜討を掛けなば附入にして、直に埒を明けうと思ふ。

城中にて吹笛始まる。

信茂　舘笛が始まりまいた。

信玄　おう、今夜の曲は何あらうぞ。

信茂　何を吹きませうか、

信玄　敵方なれば、誂へることもならんてのう。

信茂　そこに一段と風流の候ふ。

信玄　いかさま、忍ぶ戀とでも申さうかの。

主從は睦じ氣に語らふを、信春は苦苦しく聞きつ。やがてかの竹竿を見附け、訝かしき樣にて打案じてありしが、思ひ返して信茂に向ひ、

信春　兵衛殿、その竹竿は何ぢやの、

信茂　笛聽くに便りよき、場所を知るべの目標ぢや。

信春　ふう、して何の程建てさせられた。

信茂　未刻頃に立てた。

信春　敵陣間近き丘の上に、白晝より標を立て……不慮の禍無きにもあらず。

信春　君！　舘！　いつもの御用心には似させたまはぬ、はや御歸陣然るべし。

急がはしく信玄に向ひ、

信玄　美濃がいつにも似ぬ忙しさ、あれ聞けよ笛の音の、呂律の調時に合ひ、壹越斷金の節細やかに、神仙上無の韻も冴え、妬婦も怒りを休むべく、嬰兒も泣きを止むべし、げに面白き月の下、あはれ秋にてもあれかし、蟲の音なども混ざりなば、また一入の興ならんに。

信茂　仰の如く月下の笛の音、勇士の心を慰めまする。

信春　信春は稍憤りを含みて、

措かれい兵衛。舘、左程までに彼笛に御執心とござりますれば、指折

る内に陷つる山城、かの笛吹きを生取つて何時までも御賞翫あれ。

信玄は微笑みつつ、

信玄　必死を極めて吹く音ぢやよ、諂ひもなく奏でつるぞ、手足の程を申すならば、恐らく彼れに勝らうずるもの、多かるべしとは存ずれども、最期を大事に勤め居る、僞りなき人の情は、世に美しい事であるわい。

笛の調子このあたりより變はりて聞こゆ。この時空に星飛ぶ、信茂見付けて、

信茂　や、星が飛うだ。

信春　あ、尾を引いて北へ落ちた。

信玄は獨り興に入り、膝上に扇を弄ぐりて、笛の調子に合はせてありしが、この時愕きたる樣にて、

信玄　心得ぬ物の音や、時は仲呂四月の節、天地の物に榮あれと、時の調子を吹くべきに、秋の期節の肅殺、と青きものは草も枯れよ、木葉も落とせと亂調に、變はりしは不審なり或は城兵一時に、必死の軍をなさんも知れず、今夜の笛も是れまでなり。

信玄つと立上る。馬場、小山田も續きて立たんとする處へ、一發の砲聲響き渡り、あと云ひて信玄は倒る。馬場、小山田は大地に身を俯し、またの砲を避けしが、頭を上げてこの態を見、急ぎて抱へ起す。丸は信玄の耳際に中りたると見えて、その邊りより出血す、木蔭に忍べる兵士立上るを見て、信春は鎖したる儘の扇子にて制す、兵士また前の如く肅肅として槍を伏す。

信春　御心地は、

問へども信玄は痛手に唸らせたまふのみ、馬場心得て、帶を

解き放して假の繃帶を爲す。

信茂　とにあれ、此儘にては、いで御陣所へ。

信玄　信茂立寄るを、信玄制して、待て、

といふ。信春信茂と共に楯を立てて、信玄を凭らしめたる所へ、小具足着たる山縣三郎兵衛尉昌景、息を切つて驅け來り、

昌景　鐵砲の音は確かに此邊、や、こは中らせたまふたかして急所には候ふか。

信春　(靜かに)急きやるな昌景、靜まられい三郎衛、計らず打ちし野鐵砲に、中らせたまへど、(やや大聲に)急所は外れた！

昌景　昌景は四邊を見廻し、兵衛、今夜の御座は、この所か、

信茂　左樣におりやる。

昌景　彈丸隱れも無き丘の上、ここにて笛を聞かせられしは無用心の骨張。美濃殿御供を致しながら、心得ぬ事の。

信茂　恨めし氣にいふ昌景を、信茂は傍らより、いやいや美濃殿は後より諫言にわせられた。

昌景　さては此御座は、信茂御身の結構な。

信茂　恥かしながら拙者が計ひ、かかる珍事に立ち至り……、言葉中端に昌景立つて、信茂の手を取り、丘の下へ引き下し、

昌景　云ふな、云ふな、口拙なき我等とて、風流廻しに云ひ廻され、さらば責めては用心の、御座所こそ然るべしと、山縣程の侍が狗兒の樣に草間を潛り弓鐵砲の及ば、ざる所を見定め申したるに、かく淺間なる丘の上に、御座を構へし不覺人、仔細を云へ、仔細を申せ。

信茂　ただ何處までも某が不覺。

昌景　不覺とのみにて、昔に歸るか。

と信茂を突放して、なほ無念に絶えず、どうと坐す。信茂の手の士卒、足輕太郎衞を縛めて出で來り、

卒甲　怪しい者を搦めました。

卒乙　鐵砲を持つて居りまする。

丘上にて聞き入る信春は、少しく思案の體なりしが、

信春　三郎衞殿、其奴の息の根を御止めなされい。

昌景　大事の囚人を、

信春　委細は美濃が心得申す。

昌景　むむ。

昌景太刀を拔く。

太郎　ああ、御名代の仰せの通り、首にさへ目を掛けなんだら、逃げんとするを昌景放し打ちに害し終る。信茂は士卒に向ひ、

信茂　汝等はこの死骸を取捨てい。

士卒死骸を草間に取捨てて下場。

信玄　美濃、

信春　はつ。

信玄　三郎衞、

昌景　はつ。

昌景は丘上に至りて蹲る。

信玄　予の不覺ぢや、兵衞を責めな。

昌景　はあ。

信玄　われ總角にして軍を事とし今に及べり、この小城に責め厭ぐみて、終に命を果すこと、是また因緣輪廻の然らしむる所、戰場に出でては生を期せず、小者が放ちし鐵砲に、信玄が死するもまた、風流の極みであらう。

昌景　風流！　その風流が御身の仇になつた。

信玄　恨むらくは信玄、上洛を得果さなんだ、見よ見よ、天下は被せ者の、信長めに取られなむ。

信春　御下墨もさることながら、越後には謙信在す。

信玄　かの人あまりに義理强し、天下を取るべき器にあらず。さりながら、弓矢取つては一人、我が亡き後は禮を厚うし、後見と賴まば、武田の家は泰かるべし。美濃、

信春　はつ。

信玄　兼て汝に預け置きし、予が判据ゐたる紙どもは、

信春　長櫃に入れ、陣中に所持し居りまする。

信玄　斯くと聞かば敵人達、亂入の虞れあり、逍遙軒を我れに仕立て、病氣と披露し閨みを解き、この儘直に歸國致せ。なほ國國への消息は、かの判紙にて事を足せ。

信茂　心細き仰せかな、御臨終なんどと、いかでさる事の候ふべき、御心確かに持たせたまへ。

信玄　いやいや。

と頭を振る、その爲めに疵所痛みて苦惱す。信春昌景傍らに寄りて介抱す。あなたより武田四郎勝賴、內藤修理亮昌豐を供にて、息急き驅け來り、丘上へ躍り上り言葉急はしく、

勝賴　父上！　父上！　御心地は何と、四郎に候ふ、勝賴候ふ。

信玄　四郎か、能き所へ參つたぞ、萬事は信春に申殘したぞ。

勝頼　是れ程の傷心弱き事を仰せあるな。

信玄　急所ぢや、能う聞け、物を云ふも死ぬまでぞ。兼て申含めの通り、遺跡は孫の太郎信勝、成人まで四郎は陣代、さるによりて其方は、武田の旗旗持出すことは無用なり、唯大文字の旗を立てよ。老臣共の評定を、身が處存と思へ。また三年のその間、仕掛くる軍は禁制なるぞよ。

勝頼　御教訓審に承はる、決して違背は仕るまじ、さりながら御歸陣の上御養生を、

信玄　諄いわ。

大喝すると等しく、疵口より鮮血迸しり出でて昏迷す。勝頼はこれを見て、

勝頼　父上、

と喚ぶ信春等は「殿」「舘」など口口に呼び生かす。信玄すつくと立ち、

信玄　無念の……上洛もせで……死にたらば甲冑着せて……守護神……

勝頼、信玄に縋り、

勝頼　父上、四郎ぞ。

信玄　四郎か、身を諏訪の海へ沈めい……熱つや……地獄の火が……、何の羅刹……甲冑着せいやい、……

云ひながら瞑目す。勝頼抱きつきて慟哭す。信春、昌豐、昌景、信茂の四人、一團となり、共に顔を見合せ、憮然として居たりしが、

信春　四大元に歸つた。

昌豐　あまりな事でおざるわ。

昌景　夢か、夢なら醒めもせいで。

信茂　情なうおざる。

四人は手を取合ひて嘆息す。ややありて、

昌豐　して御亡骸はいかにせう。

信春　御遺言の表もあり、此儘御供申されず、

昌豐　某が陣屋は逍遙軒殿と隣合せ、立越え是れへ伴なひ申し、また御亡骸は佳しなに沙汰し申さば如何に、

信春　げに。昌景殿御身が存じ寄りは、

昌景　昌豐殿の御計ひ、同心を致し申す。

信春　信茂殿御邊は、

信茂　唯今の御存じ付き、然るべう存じまする。

信春　御異存なくば申上げん。

信春は勝頼の前に至り、

信春　叔父御を館に似せて、この儘歸國と仰せありしが、御聞かせの通り、計ひたう存じまするが、

勝頼　佳からう、萬事は御身計らへ。

信春　御芳志恭けなう存じまする。さらば修理殿、

昌豐　心得申した。

昌豐急ぎ去る。

勝頼　この儘との御意は此城を落としての上ぢやらうの、

信春　いや此儘直ちにとの、御遺言にござりまする。

勝頼　かく迄に責付けたる城を。

信春　恐れながら御遺言なれば。

勝　頼　卑怯ぞよ信春、父を討ちたる敵を見捨てて、阿容阿容と歸國は出來ぬぞ。

信　春　いやいや其處が館の深き御所存。

勝　頼　御所存は深くとも、要害淺き此小城、父君への追善に、今夜のうちに攻落さう。

昌　景　早まりたまふな若殿、力責めに落とさうなら、大殿の御軍配にて、何とて今日まで差置かるべき。

信　茂　御孝心はさることながら、唯何事も御遺言なれば。

勝　頼　城攻めはならぬと申すか、

信　春　恐れながら、力攻めに致すときは。

信春は立つて勝頼に呼く。勝頼は澁澁と頷き、

勝　頼　父君が失せさせられたと思はするとか、

信　春　あつ、

と叫ぶ。

勝　頼　ここは内曲ぢや、さまでは包むな。

信　春　(苦苦し氣に)はあ。

折から内藤修理亮は、配下の武士二人に輿を舁かせて來りたるを、信春は早くも見て、

信　春　昌豐殿、輿の者は、

昌　豐　拙者が腹心、介意なき者共にござりまする。

信　春　さらば。

輿を死骸の傍らに持ち來る。勝頼は己れの直垂の袖を解き、

勝　頼　是れを御面に被けてたもれ。

信　春　はあ。

信春受けんとて扇子を開く、合圖と思ひ違へたる伏勢一度に立つ。勝頼訝りたる樣にて信春を見る、信春袖を受取りて信玄の面を覆ふ。

（幕）

亂れ笹

（場）

（一）秩父里の詫住居

（二）東興寺の假籠

（時）

正平の頃

（人）

新田の息女梅代姫
小笹
小笹の一子竹童
猫實八郎
捕手四人

村長　庄次
百姓　藤作
同　女房おひえ

（一）　秩父里の詫住居

農家。前には五六枚の莚を並べて籾を乾したり。餘り太からぬ榛の樹の並木のやうに並んだる間に、横樣に竹を結び付けて、藁を積掛けたるものあり。榛樹の蔭より負木に稲を付けたる百姓藤作、女房おひえと共に出て來て、門口から

藤作　おかさま、今戻りましたぞ。

と聲を掛けると、家の中から、女主人の小笹が出て、

小笹　藤作さま、いかい太儀であつたの、まこりやおひえさんも負ふて來て下されたのかいな。

ひえ　少し計りで、片が付くと思ふてな、妾も一と背負擔げて來ました。

小笹　それはまあ氣の毒な、さぞ重かつたであろ。

ひえ　なんの此方のがたんと負ふて呉れたによつて、重い事も無かつたぞいの。

藤作　なう、おかさま、いつも云ふ事ぢやが、なんと後添を入れたら何うぢやぞい、此方ほどの器量で獨寐はあつたらもんぢや。

ひえ　お連合の死なしやれたのも、やんがて二年になるであろ。

小笹　さればいの、過ぐれば早いは年月なう、昨日か今日かと思ふうち、來月は早や三回忌になりまするわ。

藤作　小供といふたら竹童ひとり、成人には程があるだ、百姓業の骨折仕

事、山稼ぎの荒氣なさを、おかさまにさせるのは、おら如何にも可愛さうぢや。

ひえ　あんでも荒い仕事は、私等が受取つてすべいから、遠慮せずにおしやるが好いだよ。

小笹　有難うござりまする。

ここへ村長庄次出で

庄次　やれ、ここにか、おう藤作も居たか、今方御地頭樣からお觸れが出たぞや。

藤作　なんぢや、お觸れぢや、年貢を早く納めろかいの。

庄次　いやいやそんな事ぢや無いぞや、何でも昨日軍があつたが、新田方は大敗軍、されば、いつ何時、此村へも、落武者が來ようも知れず、分けて何とやらいふ若い女の大將があるげな、そんなのを見付けたら、早う代官所まで知らせよとのおん事ぢや、よう心得て下されや。

小笹　畏りました、すりやまた新田方が負けましたかいの。

庄次　おうおう何時に變はらぬ大敗亡とよ、さうさう、失くなつた和主の夫は、無二の鎌倉方軍の怪我で足腰が不自由になつたとやらで、此村で果てられたが、この咄を聞いたら、嘸喜ぶ事であろ。

小笹　夫が聞いたら喜びませうが、なに妾などに取りましては、たとへ何方が勝たうとも、心掛りはありませぬ。

庄次　これこれ浮かと口を利かぬもの、そんな蔭口を、代官所へ出入るものが聞かれたら、爲よくはあろまいぞ。

藤作　なんでもおいら達は、野良へ出て、鍬と鋤とで畑で軍ぢや、働きや屹度勝軍ぢや。

ひえ　二人揃つて暮らして居れば、なにも外に欲しいものはない。

庄　次いかさま藤作は、夫婦揃つて居るから好いが、小笹なんどは二年越、後家暮らしで淋しかろ。

小笹　いえ、馴れますれば石の床、なあに竹童と共寐の夢、寂しい事はございませぬ。

藤作　竹童といへば何うしたらう。

ひえ　後から來ると云ふてであつたが。

庄　次まだまだ觸れる家があつた。どれ急いで行かうかいの、藤作よ、屹度今のことを心得ろよ。

庄屋は歸り行く、

藤作　さあさあ嬶よ、もう一と稼ぎぢや。

ひえ　今度はおらの田の番ぢや。

小笹　それならば妾も後から參りませう。

藤作　あに、うらが田はちくとばかりぢや、二人で苅つたら一息ぢや。

小笹　天氣も少し催した樣子、取入れぬうち雨に逢はせたら、濕めつてならぬであス。

藤作　そうぢやとも、さらば急いで苅込まう、なう嬶。

ひえ　早う田面へ參りませう。

二人は立上がる。

藤作　さらば、おかさま。

小笹　干物を取片付けたら、妾も後から參りまする。

藤作　なに、それには及ばぬぞいの。

後に小笹はなほも空を案じ、

小笹　惡い雲が出て來た、秩父颪の冷風に、こりや今夜は降るであらう。

莚を取片付けて居る處へ、小笹の子竹童は、藁繩を輪にした

るを持つて歸り來りぬ。

竹　童　母樣、いま戻りました。

小　笹　竹童、いま戻つたか、何をして遊んで居たかいの。

竹　童　繩飛びをして遊んで居た。

小　笹　おうさうかいの、してその繩は誰が綯ふたぞいの。

竹　童　私が綯ひました。

小　笹　なんぢや、我御料が綯ふた、それはよく綯へたぞ、どれどれ見せやいの。

繩を見て、

小　笹　おうおう大人にも增した器用な事ぢや。

と褒めたが、繩の間に殘れる紙切を見て、

小　笹　こりや何んぢや、この紙は

と心付きて

小　笹　これ竹童、なぜにそなたは嘘をは付くぞ。

竹　童　いえ、嘘は付きませぬ。

小　笹　これ嘘付かぬといひながら、この紙切れは何うしたのぢや、これこの繩は神樣の、御前に張つた新稻の、神繩を外したものではないか、我御料はどうしてそれを持つてる。

子供の逃げようとするのを捕へ、

小　笹　こりや竹童、なんで此方はかやうな惡さをするぞ、女親と侮どつてか、だとへ一筋の繩ではあれども、神樣への捧げものを、奪取るとは淺間しい。なぜに我御料はこのやうな、情ない根性になつたぞいの、なう欲しければ妾に云や、應ふものは何んでも取らさう、此後決して人の物を、只欲しいとは思ふなよ。

竹童は涙を飜して意見を聞いて居る。

小笹　さあさあ分つたら其れで好い、泣きやんな泣きやんな、向後さへ謹しめば、もう妾は叱らぬわいの、さうさう能い子ぢや手傳ふてくりや。

手傳はせて莚のものを家内へ運び入れ、

小笹　こりや竹童よ、今にも降りさうな空合なれば、さぞ藤作殿も迫いてであろ、いつもお世話になる百分一、妾も苅入に行くほどに、大人しう留守をしませうぞ、それそれ籾が飜れてぢや、よう掃き寄せて置くが好いぞや。

竹童　籾を掃くのかや。

小笹　よう掃いて置きや。

小笹は鎌を持つて畑へ行く。あとに竹童は覺束なき手付にて箒を持つて庭を掃く處へ、新田の姫君梅世は、鎧下直垂を着て、小刀を帶びて馳け來り、竹童の方へは見向きもせず

梅世　もの申そ、もの申そ。

竹童　家には誰れも居らぬのぢや。

梅世　そうかや、してお身は此家の子供かの。

竹童　おう母様は田へ行つてぢや。

梅世　お身の外には誰れも居らぬかいの。

竹童は頷く。

梅世　幸ひ！　おうそこな子、暫し妾を休ましてたもるまいか。

竹童　いやいや、母様が留守故に、知らぬ人を入れると叱られる。

梅世　これこれ後から追ふて來るものがある故、日の暮れるまで隱してたもれ、なう是れこれ、この刀をおますぞ、さ、これを取らす程に、なう。

竹童　この刀を下さるのか。

梅世　それを上げう程にな、日の暮れるまで隠して下され。

竹童　ほんとうに下さるか。

梅世　それ。

と小刀を與ふ。竹童喜んで刀を弄ぶ。

梅世　それでは一間を借りるぞや。

と家の中へ入らんとすると、

竹童　姉さま、家の中へ隠れては、母様が來つて來ると叱られる。それより

かここへ隠れた方が好い。

と稲村を指す。姫は不審の氣色なるを、竹童はなほも稲を持

ちて、

竹童　此中に入つて寐て居れば、目付かりはせまい。

梅世　負ふた子に敎へられるとはこの事か、さらばここへ隠れませう、な

う誰が來ても、なんにも知らぬと答へてたも、よいか、よいか。

竹童は切りに頷く。梅世姫は稲村へ入ると、竹童は上から稲

を掛け終る。稲村の中にて、

梅世　そこな子。

と呼ぶ。竹童傍へ立寄り、姫の語を聞き取り、

竹童　では見えぬ處へ納つて置かう。

と小刀を持ちて家の中へ入る。足利方の捕手の頭人、猫實八

郎は太刀を提げて、捕手四人を連れて出で來り、

八郎　こりや者共、承はつた樣子では、どうあつても此村へ、忍び込んだに

相違無ささうぢや、この家で尋ねて見よ。

手はあ。

と二人ばかりは家へ飛込んで、竹童を連れて出る。

八郎　こりや子供よ。この邊を若い見馴れぬ女が通りはせなんだかの。

竹童　なんにも知らぬ。

八郎　知らぬことはあるまい若い美しい女が參つたらう。

竹童　なんにも知らぬ。

八郎　知らぬとさへ申せば、好いと思ふて居ると見えるわ。

竹童　おりや、なんにも知らぬ。

八郎　はて困つた奴の、ええ關はぬは、家探しせい。

捕手　はあ。

と皆皆家の中へ亂れ入る。

八郎　外には杣の通ひ路も、絶えてあらざる一筋道、あたりに隱せしこの太刀を、拾ひ申せし上からは、この家の前を過ぎりし筈ぢやが。

と考へつつありしが、竹童の太刀に目が暮れたる樣を、八郎は見て取り、

八郎　こりや子供、そちやこの太刀が欲しいかの。

竹童　頷く。

八郎　どうぢや、欲しければ隨分取らさうが、いま云ふた、それその女が何處に居るか、つい我等に敎へたら、此太刀を取らせるがな。

竹童　その太刀を下さるか。

八郎　おう敎へたら、我御料におますぢや、それ見い。

と太刀をするりと拔き、

八郎　これこの通り、よう光つてぢや、なんと美しいものであらうぞ。

とまた鞘に收める。

竹童　本當に下さるか。

八郎　敎へさへすりや、弓矢八幡、眞實そちへ遣はすわい。

竹童　その姉さまは、

八郎　その姉様は、

竹童　おりや何んにも知らない。

八郎　こりやこりや、知らぬことは有るまい。

捕手ども出で來りて、

捕手　諸所を尋ねましたれども、一向様子が、

大勢分りませぬ。

八郎　よし、よし。

とまた竹童に向ひ、

八郎　おう、これ好い子ぢや、ほんにこの太刀を遺るからの。

捕手　お頭、その太刀を、

八郎　よいと申すに、な、今のそれ姉様が、何んにも知らぬと云へと申した

かの。

竹童　おう。

八郎　さうか、さうか、この太刀をそれ長いわ、長いわ、やがて其方の身丈ほどあるの。

と竹童に挿させ、

八郎　そして、何う致した。隱して呉れと申したらう。

竹童　叔父さま、能う知つてぢや。

八郎　おうおう、叔父も隱れて聞いて居つたわ、ははははどれその姉様の隱れて居る處を中てて見せうかの、

竹童は頷く。八郎は上手へ指さして、

八郎　どうぢや、此方であらう。

竹童首を振る。一陣の風吹き來り、榛樹の枝葉、掛け藁など鳴

る。

八郎　違ふたか、では此方か。

竹童　おりや、なんにも知らぬ。

八郎は竹童の素振にて、此方とは悟れども、他に隠れ處もなき故に訝しく思ひしが、

八郎　こちらか、こちらか。

と向ふ。竹童は下を向いてあるに、

八郎　こりや子供、敎へぬとその太刀は取らさぬぞ。

と太刀に手を掛ける。

竹童　叔父様、あそこぢや。

と稲村を指す。またも狂風吹きて、掛け藁ばらばらと落ちた

る間より、衣の端顯はれたり。

八郎　それ。

と聲を掛けるにぞ、捕手の者は藁を捲りて姫を引出だす。竹童は家内へ逃げ込む。姫は手を盡して働きたまへども、獲物もなき上に、衆寡敵せず、追追と靜まる風と共に遂に捕はれたまふ。

八郎　大儀大儀、さ、歩ませたまへ。

梅世　いづくへ。

八郎　はて鎌倉へ引いて行くのぢや。

梅世　假初にも新田の流れぢや、下人と共には歩まれまい。

八郎　いかさま、いかさま、板輿の用意もないが、それそれその戸を外せ。

戸を外させ、

八郎　夜を籠めて道中もなるまじ、隣村の東興寺まで伴ひ申す、さらば繩

共を集めて、輿がはりを調らへい。
稲かけの竹を取り外し、繩を集めさすると、竹童出て、

竹童　その繩は私のぢや。

捕手　ええ小童め。

と云ふうち、八郎心付き、

八郎　おう最前の太刀をおこせ。

竹童　あれは貰ふたのぢや。

と逃げにかかるを、八郎押さへて太刀を奪返し、竹童を突遣り、姫に向ひて、

八郎　いざ召しませ。

梅世　新田の運もこれまでぢや。

と戸板の上に乗り、捕手に舁かれて伴はれ行く。あとに竹童は、

竹童　太刀をかやせ、太刀をかやせ。

と喚く處へ、小笹は束ねたる楮に鎌を挿したるを肩にして歸り來る。

竹童　母様、太刀を取返して下され。

小笹　なにを云やる。

竹童　よその叔父様が嘘を付いて、私の太刀を持つていた。

小笹　なに我御料の太刀を持つて行つた。

竹童　おう、まだ貰ふたのがある。

と走り入つて、姫から貰ひし小刀を示す。小笹は一目見るよりはつと愕き、

小笹　こりや竹童よ、この守り刀はどうして持つておじやるのぢや。

竹童　姉様から貰ふたのだ。

小笹　して、その姉様は何うしてぢやぞ。

竹童　今縛られて行つたのぢや。

小笹　なに縛られて……はての、見覺えのある守り刀、こりや梅世姫様御誕生の折からに、殿様よりの遺はしもの、その御使はこの小笹、それがどうして此兒の手に、

といふ處へ、村長は馳せ來る。小笹は刀を隱す。

庄次　なうなう小笹よ、歸つてであつたか、今がたこては甚い騷ぎよ、何かさて新田の姫君、梅世姫といふ方がの、落ちて來たのを捕へたのぢや。いや女でも腕利きて、捕手の衆も大難儀であつたが、多勢に無勢、男に女ぢや、とうとう縛られて、今夜は東興寺へ假の宿所でこちの竹童だが、一端は隱まつたれど、在處を明かして捕はれになつたは却つて手柄、子供の事とて、お搆ひないとの事ぢや。

小笹　もし庄屋さま、そしてその姫君とやらは、どうして我家へはござつたのぢやろ。

庄次　されば、の、絲を付けて引いたのではなし、大方道に迷うて來たのであろ。

小笹　こちの竹童が匿まつた上に、また在處を明かしたとは、どういふ譯でおざるかなう。

庄次　いや其處ぢやて、その女武者に頼まれて、掛藁の中へ匿したげな、さうあらう、さうかさうふ、後から追手が來て、なんでもその姫君が持つて居たとかいふ、銀作りの立派な太刀ぢや、これを遣るから教へいと詐かされて遁が小供ぢや、つひ教へたと見えるわい。いやはや罪の無いものぢやて。

小笹　さては一端かくまつて、また教へたのでおざるかいの。

庄次　それ故にお構ひないぢや、おうおう追て褒美を取らせると仰有つたわい何しろ騒動ものが捕はれたで安心しました。風が凪いだら雨になりさうだ、おお寒む！　さらば氣を付けて休まつしやれ。

と村長は我家へと歸り行く。あとに小笹は差俯向きて暫くは物を案じつつありぬ。

竹童　母様よ。太刀を取返して下され、あの叔父様は嘘付きぢや。

小笹　なに嘘付きぢや、遣るというた太刀をおこさぬて、嘘付きぢやと云やるのか。

竹童　おう。

小笹　我御料、その小い刀を貰うた時に、その姉様は何と云た、隠れた……所を……誰れにも……云うな……と申されたてあらうなう。

竹童頷く。

小笹　それを此方はなぜに教へた。母の爲には故主の姫君、夫の爲には敵の片割れ、因果同志が夫婦となり御家の紋の丸二つ引、丸三つ引の筋違ひ、軍で受けた手傷を云ひ立て、秩父の奥の山の峽、浮世を避けた賤の伏屋も、音づる風に亂れ小笹、十には足らぬいたいけの小供に嘘を教へたぞ、人に云はじと頼まれながら、物に心を奪はれて、など一端の義理を破つた、其方の爲に新田の御家は、今日を限りの破滅となつた、父にも背き母にも違ひ、この一大事を引起したのは、みんな我御料の淺ましい根性から起つたこと、さあなぜ嘘を付きました、なぜ偽りを云ひました。

竹童　母様許して下され、勘忍して下されい。

小笹　いいや許されぬ、勘忍しませぬ。そなたの父様と契を込め、共に忠義

は捨てたがの、一生に嘘とて付かぬ夫婦、それにどうして我御料のやうな偽りものが子に出來た。父の心か母の血か、そも誰れが魂の、我御料の胸には宿つたぞ。ええ男の子は男の魂、嘘ついてまで足利方の、味方をするからは眞を立てるこの母も、昔にかへる新田方、御主の仇め覺悟しや。

と鎌を振上げて殺さんとせしが、

とは云へ、二人の仲の一人子、この子の命を斷つときは、今日を限に氏は絶える

と突放せしが、竹童が先の稲藁の中へ隱るる姿を見るより、

小笹　ええ疎ましいことをしやるの、その性根では成人して、父の苗字を續いだとて、反りて家名の汚れを增さう、もうこれまでぢや、觀念しや。

と鎌を取つて竹童の喉を貫く。折から雷聲と共に大雨。

小笹　おお時ならぬ雷は秩父の山の時候崩し、我子を殺した上からは、弓矢を捨てた誓文崩れ、天下晴ての丸三つ引、この大雨を幸に、あの東興寺へ忍び入り、姫君さまをお救ひ申さう。

（幕）

（二）　東興寺の假籠

田舍寺の本堂。かの姫を押込め明日は出立せんとて、二人宛捕手の者は夜番を爲す。寒さは寒し、眠りたくもあり、焚火の傍を離れて甲は乙を連れて來り、

甲　これ和主、眠うはないか。

乙　されば上の瞼と下の瞼とが、仲ようしたがつて困るのがや。

甲　お頭は寝るからよけれ、散散に疲れた上に、代り合つての不寝の番とは、我等の役も割に合はぬ。何んとであらう我等寝られることを思ひ付いたが、お身同心はせまいか。

乙　なんとお云ひやる、小雨は降るし、寒うはある、如何にも眠りたうはおじやるが、もし寝入つた處を見られたら、隨分身の上だらうぞ。

甲　そこが、楠判官ぢや、これここへ繩を張つて、見よ、御寶前の鈴を外して付けて置く、暗さは暗し闇の夜ぢや、もし曲者が狙ひよつても、要害の繩があるとは悟り得まい。忽ちに足を取られて頭顚倒、鈴がからから、我等が目を濶と開く、なんと好い智恵ではあるまいか。

乙　いかさま上分別、さらば早速に取掛らうぞ。繩は先のを解いて遣はう。

甲　汝の智恵で、先一寝入出來ると云ふものぢや。

乙　なんとよい友達は持ちたうおじやらうな。

甲乙　あははははは。

二人は堂の表の方へ行く。雨は、強く、物皆眠れる眞夜中に、簑笠にて姿を窶せし小笹は忍び來り、本堂目がけて行かんとして張りし繩に躓けば、鈴は、聒聒と鳴る。

甲　やや、鈴が鳴つたぞ。

と捕手の者が騒ぐ聲に、小笹は身を潜めたり。甲乙の捕手は焚差の火を持ちて來り、四邊を見廻し、

乙　はて誰れも居らぬぞ。

甲　風であらう。

乙　風にしては、音が大きかつた樣であつたが、

甲　それにしても何も見えぬではないか。

乙　かやう致さう。一と廻り堂の周圍を見舞うて寢よう。

甲　我等は御免蒙る、お身一人でお廻りやれ。

乙　さまで骨を惜しまれな。

甲　いやいや堂の樞は外から差してあるばかり、若し曲者に開けられては一大事ぢや。

乙　道理かな道理かな、さらば拙者一人で廻つて見よう。

甲　それはお身のよしなにおしやれ。

乙　心得た。

甲　寒いわ寒いわ、焚火の側を離れては、片時も居られぬ。

と甲は元へ歸る。乙は行きかけると、後から小笹は物をも云はず、その捕手の横腹を突き通して一思ひに害し終る。死骸倒れて繩に當りて、鈴また晒晒。

甲　なんぢや、また鳴るのか、待て待て。

と燃差を持ち來り、

乙　はて面妖な、誰れも居らぬ、ははあ二郎吾が惡さをしをるな。

と消えかかる火を吹きて、寺の廊を廻りて歸らんとする後より、小笹走り寄つて甲を捕へ、胸の邊を突き貫す。鐘聲聞こゆ、小笹は本堂へ入る。捕手の丙丁は出て來り、

丙　鐘が鳴つたか、ああ、ああ、鐘が鳴つたら迷惑ながら、不寢番をせずはなるまい。

丁　それもこれも一夜限り、あの囚人を引渡せば、御褒美があるとの事ぢや。

丙　しかしな、それもお頭の猫實さまが一人して、旨い事をするのであろ。

丁　なんになつても下役は損なものぢや。

と語らひつゝ來り、次郎吾の死骸を見て驚き走り去る。雨止む。本堂前の燃さしの焚火盛んに燃え上る。小笹は姫の手を引き、

小笹　さあ落ちたまへ、姫君さま、さ、早う、早う。

梅世　落ちよとは理りながら、そもそも御身は何者ぢや。

小笹　何かの事は落付いたる上にて詳しく申上げませう。私こそ小笹と申して、元はお家に仕へしもの、一方ならず御館さまの、お慈しみを蒙りて、手足利延せし御恩も忘れ、足利方のさる武士と、はかなくも契を込め、共に武道を打捨てまして、この山奥へ籠りましたが、却つて忠の道に應ひ、はからずも姫君さまへ、久方でのおん目通、いろいろのお物語は後のこと、この洞合を三里ばかり入りますれば、山又山の峰續き、敵も味方も白雲の、心置きのない里があり、先づそこまでは急がせたまへ。

梅世　志は有難けれど、道の邊に隱し置きし、亡き父君のおん筐、奪ひ取られし腰のものを、取返さずに參るときは、末代までの弓矢の恥。

小笹　そのお腰のものとは、もしや。

とかの守り刀を出だす。

梅世　こりや先程童へ與へし刀、それが如何してそもじの手に。

小笹　はい、あの子供こそ亡き夫の、忘れ形身のその獨子、それを殺してお味方になりました。

梅世　なに、いとしの子供を殺してとや。

といふ處へ、猫實八郎は捕手を連れて出て來り。

八郎　やあ大切の囚人、逃ようとは奇怪なり、この猫實が目に掛つては、溝の鼠も同じこと、さあ尋常に腕を廻せ。

梅世　無禮なり八郎とやら、かの御太刀を我儕に渡し、とうとう此場を立去れい。

八郎　いや、こやつが、先きの樣にも懲りもせず、廣言を吐き居るわい。その御太刀こそここにあり、その孱弱い細首を、己れの太刀にて切つておまさう。それ、

と八郎は姫に切掛ける。

小笹　やあ姫君へ緩怠至極。

と八郎を相手に切り結ぶ。捕手二人は姫へ掛る。段段とあしらひて姫は表の方へと切合ひて入る。あとに八郎と小笹とは激しく戰ひ。小笹は遂に組敷かれ、八郎は小笹を刺さんとす。焚火の光暗し。小笹は下より八郎を防ぐうち、姫來り、

梅世　小笹。

笹　はあ。

姫　何れを何れと分ぬうち、また火光強くなり、遂に八郎を切り、小笹と手を交はす。

小笹　姫君樣。

梅世　小笹とやら。

小笹　御太刀はお手に入りましたか。

姫　は太刀を探り拾ふ。この間に小笹は松炬に火を點け持ち來る。姫太刀を押戴く。

小笹　いざ姫君樣、忍ぶものには夜こそ好けれ。

梅世　深山の奥に時を待ち、御父君の吊ひ軍。

小笹　丸三つ引の御旗を、尾上の空に吹き靡かし。

梅世　再び世に出で家の名を。

小笹　天が下に知らさせたまへ。

梅世　危をき、處を逃れ得たるも。

梅世姫は小笹の手を取り戴かうとするを、小笹ふり拂ひ、

小笹　あれ勿體なうござりまする。

と平伏する。

（幕）

艤

（この脚本は、ことさらに舊式の趣き多し。）

（場）

第一場　太宰少貳の館

第二場　袖が濱の海岸

（人）

太宰後室綱手刀自

同　息女浮木姫

竹崎五郎季長（綱手の弟）

三井三郎資長（季長の妻の兄）

河野四郎通有

河野伯耆守通時（通有の叔父）

大矢十郎種保（太宰の老臣）

藤源太助光（太宰の家の子）
乳人眞菰
船番匠頭駝太夫
海人海松布
外侍女、家臣、船番匠、見物大勢。

第一場　太宰少貳の舘

筑前國太宰少貳の館にては、過ぎつる歳夫少貳入道元寇の軍に討死せしより、後室綱手の刀自には、またもや異國より攻寄せなむときの用意に、船ども剩多造らむとすれど、財力に限りあるをもて、商人船を思付き、常は貿易に從事させ、事あるときは、軍船になすべし、然れば多くの財寶を費さずして、その目的を達し得べしと、賢くも思ひ立ち、新艘數多を造りしが、いまだ新艘を船卸せむとて、陰陽師に吉日を占はせて、定め置きたる當日なれど、命名者たる息女浮木姫の病氣により、止むなく後日に延はせし事とて、館のうちの侍女共まで、何となく沈みて見えたり館には侍女六人寄り集まりて互ひに今日の本意なさを語らふ。

侍女もじずり　皆さま、何とやら手中の、珠を落とした心地がして、物が手に付きませぬわ。

同ふびれ　待ちに待つた船卸が、急にお延びとなりましたので、張詰めた力も抜けました。

同のげし　これと申すも姫上の、御病氣が癒らぬから、ほんにあの醫者坊め、毎

日毎日御煎藥を差上げても、少しも驗の見えぬわのう。

同はなだで　なんの、なんの、姫上の御病氣は、醫者や藥では癒らぬわいな。

同のうろし　ほんに花蓼御の云はれる通り、姫上樣の御病氣には、伊豫の殿御が一ち妙藥、あれを煎じて差上げたら、ついちよこちよこと御本復をさせられうわいのう。

同にがな　どんな殿御か知らねども、姫上樣が命にかけて、戀渡るとは果報な殿、私も顏を見たいわのう。

同もじずり　昔男か源氏の君か、世に美くしい方であろぞいの。

と噂の中、乳人眞菰は立出てて、

まこも　これはしたり、また上の噂、自づとお耳に入りまするとよくない事になりませうぞ。

もじずり　これは、これは、恐れ入りました。

ふびれ　この後急度謹しみまする。

一同まこもに詫び居る所へ、太宰家の老臣、大矢十郎種保は入來り。

十郎　まこも殿、後室樣には何れにお渡りなされまする、拙者出仕の由、お取次下されい。

まこも　畏りました。

まこもは襖を開ける二や、いなや、十郎に向ひ。

まこも　恰度お越しにござりまする。

さらばと各は席を改めたる所へ、後室綱手の刀自は、靜靜と入り來り、

つなで　十郎殿、よう出仕せられたの。

十郎　はあ。

つなで　是れまで度度の船卸に、一度も恙とて無かりしに、名付を爲すべき浮木の病氣、未だに本復致さぬは、この新艘の海の幸も、薄からうと案じられ、心がかりになつたわいの。

十　耶　仰せは尤もに存ぜらるれど、人間の病氣は有うちのこと、かほどの小事に御心を惱ませらるるは、常の御氣丈にも似合はせられぬ、御平癒を遊ばすまで、名前を預り置くばかり、御配慮は御無用と存じます

る

つなで　さればいのう、過ぎつる歳蒙古の大軍、多多羅の濱へ押寄せて、不意の合戰に味方の人數、打死なせし其の中に、故少貳殿も加はりたまふ、潮逆卷く大風に、敵の船を碎かれて、異國の勢は引汐の、浪に搖られて後を見せしが、またも押寄せ來るは必定、さあるときには夫の敵、別しては御國の仇、思ふさまの軍して、味方勝利と願ふても、とかくは船に事を缺く。

十　耶　さるによりてこのほどより、しつらいたる商人船、いつもは高砂(臺灣)琉球國、種が小島の邊までも、渡海を致させ寶を易へ、また二つには異國の聞書き、蒙古國の有樣を聞けば聞くほど望ましきは、船寶と存じ寄り、諸大名を語らひても、容易に得心せぬ疎ましさ。

つなで　中中に人を賴むは苛立つもと、目も遙遙の大海とて、一葉の船は差して行く、たとへ嫋い女の身とて、思ひ籠めたる一心は、

十　耶　海に浮かんで數艘の、親船となり東行西行、心の儘に漕ぎ廻る、

まこも　潮に乘れる船足の、果は蒙古の磯續き、

つなで　この濱邊より關守の、

十　耶　迫き留む關も無き海路。

折から取次の侍、

取次の侍　申上ます、高砂へ渡海したる藤源太、罷り歸りましてござりまする。

十　郎　なに藤源太が歸りしか、これへと申せ。

取次の侍　はつ。

と急ぎ去る。

十　郎　姫上の御病氣も、元はと申せば御氣欝ゆゑ、罷り歸りし藤源太は、心利きたる男なれば、御慰みに異國の話を、物語らせては如何でござりませう。

つなて　好い處へ氣が付かれましたこりやまこも、

まこも　はあ、

つなて　氣分が能くば、異國の話を、聞きやれぬかと申しやいのう。

まこも　はあ。

と立つて侍女を顧みると、侍女どもその後に尾して入り、座の用意を爲す、やがて息女浮木姫はまこもに手を引かれて來り、母に會釋して坐す。

つなて　風に吹かれて大事ないかや。

うきぎ　いつ癒らうとも覺えぬ病氣船卸の事を缺いて、母上樣に濟みませぬ。

十　郎　姫君病は氣からと申す俚諺、なるべく浮浮と、御心を持たせられませ。

つなて　今がた戻りし藤源太に、知らぬ異國の風俗を、物語らせて聞かうとて其文字をこれへと申したのぢや。

うきぎ　母樣の御心遣ひ、お嬉しう存じまする。

折から藤源太助光は、從者に高砂島の産物などを持たせて入來り、後室を見て跪き、

藤源太　後室様、まつた御病氣と伺ひし姫上様、御前に罷出で祝着申上げまする。

つなて　おう藤源太、今度の渡海大儀であつたぞ。

十郎　して商の様子は何とぢや。

藤源太　何にせい、算勘に疎い我等のことあまり儲けもおざるまいが、さりとて後へ年は取りませぬ。

十郎　またしても輕口、詳しき事は後にて聞かむ、姫上の御氣晴しに、廻り廻りし島島の風俗などを語られい。

つなて　藤源太、面白う話して聞かせよ。

藤源太　はあ畏まつて候、この松原を後にして、南さして漕ぎ出だせし、道道の話なんぞは、こりや誰れも知り居ること、七星を仰ぐことも、度重なりて高砂へ、着けば變はりし四方の景色、椰子の並木に芭蕉の林、何れを見ても青青と、四季を分たぬ夏の國、嘘ぢやござりませぬ、竹の柱に木葉の屋根、これ御覽なされい、溫氣に形は失ひましたが、是れが芭蕉の實にござりまする、またこれなるは椰子の實にて、二つに割いて中の核を食べまする、まだそれよりは姫上様へ、心利きたる藤源太の、よい御土産がござりまする。

つなて　なに姫へ土産とは、

まこも　藤源太殿のお土産では、また謔けたものであろぞいな。

藤源太　いいや大眞實、誓文、姫上様の御意に入るものでござりまする。

つなて　廣言は後にして、早う參らせてたもれ。

藤源太　はあ。

と臺の上より草履を出して、段の上に置く。

まこも　こりや藤源太殿、汚穢るしい。

藤源太　はて、和主なんぞは上面のみお見やるから、御不審のさせられる、これこの御草履は忝けなくも、女護島の形見の土産。

唄　さてかの島の濱邊には、並んだ、並んだ、秋の夜の、お星様より數多い、鼻緒揃へた草履を穿けば、主ぢや、夫ぢや、我夫ぢや、足曳く手曳く地を引く、綠の髪や花の眉。

藤源太　事體我等は色黑の、

唄　むつけい男に候へど、いで此島にあるときは、星の眼に睨まれて、丹花の口に恨まる、既に時去り時移り、曉の風すは追手、遣らじと縋るを振切つて、力なくなく漕ぎ出せば、名殘を惜む島人は、沖の太夫の景色なり。

まこも　さてはお身様の思ひ者のお草履な。

藤源太　耻かしながら、拙者が一夜妻。

まこも　まあ、御前にてあられも無い、さりとは鈍な御方ぢや、おほほほほ。

と一同笑ふ。

藤源太　いやいやこの草履を所持するときは、思ふ殿御に早く逢はれると申すことにござりまする。

つなて　さりとては面白き、南の國の物語、磯邊に揃へて男を待ち、草履に緣を結ぶとは、危い媒人もあつたものぢや。

十郎　姫上様、世には斯様の例もあるに、ちと御心を浮浮と持たせませ。

うきぎ　親と親との許嫁指折り算へて待つ年月、

つなて　日まで定めし嫁入を暫く待てと云越したる、伊豫の殿御の心中は、どういふ事であろぞいの。

十郎　異國退治の望みのためと、仰せ越はありたれど、詳しき仔細をきかぬ中は、何とも申上げ兼まする。

まこも　ほんに胴欲な憎てらしい、
　　と云ひかけ、姫の方を見て、
まこも　御免下さりませ。
　　と云ふ。ここへ竹崎五郎季長、同く妻の兄三井三郎資長出で
　　來る。
つなで　これはこれは五郎殿、
うきぎ　叔父様、
季長　姉上、お變りもなくて愛でたい、また浮木御寮には、此頃中より病と
　　聞いたが、假居のさまにて先づは安堵ぢや。
つなで　二人揃ふて御出とは、使の者と行違ひになられましたの。
季長　いや、姫の病氣の爲、延引とは承はつたが、途中まで乘り出したるか
　　らはと存じ、三郎殿と諸共に、駒に一泡吹かせて參つた。

三郎　季長のお云やる通り、押掛客に罷越した、海珍らしい我等なれば、松
　　原續き濱の浪、面白う見物しましたぢや。
侍　　取次の侍出で、
　　申上ます。
十郎　何事ぢや。
侍　　伊豫の國より、河野四郎通有殿御面會仕りたき由にて、唯今お越に
　　ござりまする。
つなで　なに、四國の河野殿とや。
季長　姫との婚儀を延ばせしと承はつたが、何故あつて當府へは、
三郎　もしまた思案の變り來て、早速輿入とでも申さるるか。
まこも　さうなる時には、姫上様のお喜び、
十郎　いやいや吉事なれば使者の筈。

季　長　いかさまのう。

つなて　何はあれ、此處へ、

十　郎　粗忽なきやう、御案内を申せ。

侍　はあ。

と入る。

季　長　こりやかう致しては如何でござらう、拙者一人にて對談申そ、何故とお云やれ、親と親との許嫁、嫁入る年に相成つて、延ばせなどとは奇怪千萬異國退治の爲なりと、口賢くは申すとも、事によつたら增す花の、

うきぎ　え

季　長　いやさ、いかなる所存の有りとも知れず、見知りし事あるこの季長、確りと實否を質さう。

つなて　五郎殿のお志は嬉しいが、三十路を越してもその荒けなさ反つて事を壞しては。

三　郎　其儀は御心配御無用、五郎が短氣にはこの三郎が大適藥、拙者が介添を致し申さう。

つなて　三郎殿がお附添を下さらば、一つの安堵、なう五郎殿、必ず麁忽の振舞なきやう、

うきぎ　叔父上さま。

と乞ふ所ありげに季長を見る、季長呑込んだる樣にて、

季　長　うむ。

つなて　然らば皆は下りや、姫もかう來や。

と二人を殘して一同座を退く、河野四郎通有は叔父の伯耆守通時に尾して來る。二人共に烏帽子を戴かず。

季長　珍らしや通有殿、まつた叔父御にも能うこそ入らせられた。

通時　こは思ひ寄らずして逢ひ申した。

通有　お別れ申してよりは早數年、御健勝にて祝着致す。

三郎　こりや季長、そこにて何の挨拶さ、先づお席にお着き下されい。

通時　然らば。

と各座につき、

通時　さて季長殿遙遙の波濤を凌ぎ、四國の空より罷越せしは。とくと御内談致したいため、後室には何れに渡らせらるるな。

季長　いや其儀なればこの季長に仰聞けられ下されたい。

通時　なに、そこ許に、

季長　いかにも拙者、御用の向を伺ひ申さう。

通時　さあらば申入れうが、仔細と申すは、外にもあらず御當家の姫君と甥の殿との縁組は、一先今日限の事と致したく、此儀御相談のため、罷り越してござりまする。

季長　うむ、縁組を破却せうと仰有るか、そりや面白い、人の結んだ縁談なれば、人の毀すも尤も、したが、四國に名ある河野殿、その破談の理由を伺ひ申さう、得心さへ參つたら、決して否とは申すまい。

三郎　こりや滅多な事を申すなよ。

季長　はて能うござる、さあ事の次第を伺ひ申さう。

通時　その仔細と申すは、

と云ひかけると、

通有　叔父上、とてもの事に某より申さう、なう季長殿、この頭にて御承知あれ。

季長　おう、最前より伺はうと存じ居つた、御身ならず通時殿まで、烏帽子

通　参らぬは如何なる譯か、不審には存じ居つたが、

有仔細はお聞きに入れう、そも文永十一年、蒙古の軍勢、この筑前へ押寄せ、散散に狼藉す、伊勢八幡の神力にて、敵一端は退きたれども、またもや結構ありと聞く、さるによりて某は、氏の神三島權現に誓を立て、もし十年のうちに寄せ來らずは、異國へ渡りて合戰すべしと起請文に認め、神火に燒いて灰と爲し、腹中に藏め置く、されば通有の頭に、戴くべきは兜なり、悠長なる烏帽子なんどを、いかで被りてあるべきや、斯く心を定め申すからは、妻帶なんぞも無益しく、討死なして若後家を、殘さむも哀なりと、思ひを込めて候へば、何卒此儀御聞濟の程、平にお願ひ申します。

季　長一應は尤も、御勇氣のほど感服致すが、少しく御料簡がお若く存ずる。

通時　宗家と申合はせしこと、甥の殿は弱輩ながら、某などは貴殿より、烏居數は勝れしもの、若いと仰せられまするは、何處が若うおざりまするな。

季　長されば、異國退治と申さるるからは、隣國の堺爭ひとは事更り、蒙古の勢に當るには、日本國中一つになり、心を合せて然るべきに、味方同士の緣を嫌ひ、不和を招かうなんどとは、心得違ひであるまいか。

通時　むははは、口は達者に廻せらるるが、他處は知らず豫州にては、門違ひの道理は徹らぬ。

季　長　門違ひとは何の事、過言にも程があるぞ。

通時　御承知なくば云ふておまさう、日本國が一つになると、お云やるからは仇敵とて、共に蒙古に弓曳くぢやまで、許嫁の破約なんどが、國中不和の基とならうか、それとも九州の習にては、日本國の危難の際も、

不和なる人とは何處までも、同じ方へは防矢射ぬか。

季長　いや申されたり伯耆殿、さあるときは婚禮こそ、大事の前の小事なり、異賊退治とは別事ざうぞ、日本破滅と相成らば、誰れとても捨つべき命三島權現への祈誓とて、よもや人倫を破却して、妻娶らぬとまではあるまじ。

通　時さあそれは。

通　有　叔父上、包むも詮なし、眞のことを打明けう。

通　時　されば よの。

と考へる。

三郎　四郎殿、思召すことの候はば、腹藏なくお聞かせ下され。

李長　云ふべき事は申されい、腹に包むは御身の毒ぢや。

三郎　他聞を憚かる事とあらば、なう季長。

季長　おう金打なりと仕らう。

通　有　いや、申すからには通有は、正直の奥を開かう、誠は姫に愛想が盡きた。

季長三郎二人　何とおいやる。

通　有　されば今日の船卸を、延引するとは何事ぞ、聞けば今歳の船の名は、姫の名を其儘に、浮木と名くと承はる、常の時には交易の、商人船と申しながら、事ある時は軍船名付親たる姫なれば、よしや病氣は重くとも、なにとて役は勤められぬ、かかる性無き姫御寮は、河野の家には禁物さむらふ、季長殿、資長殿、見限つたるは某のよも誤には候ふまじ。

資長と季長とは顏を見合せて、暫く無言の所へ綱手は立出て、

つなで　その辯疏は妾が仕らう。

通　時　まことに後室殿。

季　長　姉上。

通　有　なに、後室殿とか。

と各座を改める。

つなて　季長殿、ここにお居やるが四郎殿か。

季　長　左樣におりやる。

つなて　始めてお目に掛りまする、故少貳入道の妻、今は浮木の母の刀自、お見知り置かれ下さりませ。

通　有　某こそは伊豫國の住人、河野四郎通有。

通　時　分家ながら叔父に當る、同苗伯耆守通時。

通　有　向後お見知り下されい。

つなて　無禮ながらお話を、漏れ伺へば胸潰ぶるる、娘の緣の破れ咄、いかなる譯かと案じましたに、今の仰を承はり、安堵致してござりまする。

季　長　こは何事を宣まうぞ、もしこの緣の紐切れては、

三　郎　姫の嘆きは如何ばかり、

季　長　容易の事を仰有れまい、對談の邪魔になりまする。

つなて　妾とて一人の娘行、末惡う思ひませうぞ、まうし四郎殿、御口裏のやうでは娘さへ御氣に召したら、また緣邊は結ばれうか。

通　有　さあ、それとて一も十日の菊、今申すとも返らぬこと。

通　時　唯今になり左樣の事を、何とてお問ひなさるるぞ。

つなて　いやいや物には順もあり、其邊より伺ひませぬと、足らはぬ女の智慧にては、御意の程が呑込めませぬ。

通　有　申すも無益しい事ながら、さある時には某に、不承知なるべき謂れがござらぬ。

つなて　確と左樣でおりやるかの。

通　有　おんでも無いこと。

つなて　こりや十郎、これへお出やれ。

十　郎　はあ。謠　奥の方にて、千顆萬顆の玉衣の、浦は津守の宮柱。

十郎謠を唄ひながら、捧げ持ちたる島臺を、通有の前に置きて一禮し、

十　郎　祝着申上奉る。

通　有　こは何事にて在すぞや。

つなて　何事とは聟殿、今こそ親子の盃せう、ほほ、お驚きは尤も、氣のみ忙しい女の計ひ、その譯お話し申上げむ、抑も今日の船卸を、延ばせし元はこの綱手、いかにとお云やれあの浮木は、嫁入させねど伊豫に殿あり、通有といふ主ある身體、濱邊に出だし病を募らせ、萬一の事があつた時は、入道殿への申譯が、立たぬと知つて日を延ばさせ、それが反つて聟殿の、不興と爲つてはこの綱手が、身の立瀨が無いわいなう。

通　有　いいや親子の恩愛もて、お執成を致されても、更らに合點が參り申さぬ。

つなて　然りとは情を知らぬ殿、お身の仰せを洩れ聞くより、可哀や娘は床を放れ、あれそれへ出で御覽なされい、船卸に飾り立てる、玉の小櫛や帶掛絹、綠の髮京紅を、腰元共に運ばせて、蹌跟として庭先から、あの濱邊には行きやつたわいの。

季　長　なに、病を推して參つたとか。

三　郎　なせにお止めなされぬぞ。

つなて　殿御に嫌はれたる上は、生きて詮なき命なれと、思ひ定めて參りま

した。

通　時　思ふに增したる健氣の姫御前、これにては、なう通有。

通　有　おう今こそは四郎が女房、過ちなきやう御介抱を、

季　長　詰まらぬ義理立する男ぢや、早う濱邊に後を追はうぞ。

三　郎　無禮な事を申されな。

十　郎　いや、かくなる上は一家一門。

つなで　然らば親子の盃を。

と盃を取る、十郎立つて酌をなす。綱手は飲んで四郎へ差す、

通有受けて飲んだる所へ、船番匠頭人、舵太夫驅け來り、

舵太夫　十郎樣、十郎樣。

十　郎　そちや船番匠の舵太夫、遽しい、何事なるぞ。

舵太夫　さればでござる、一端延引と伺ひましたが、お姫樣がござらしつて、

何でも卸せとだだを仰有られまするが、如何致して宜かんべいか、伺ひまするでござりまする。

十　郎　直ちに仕度が出來やうかの。

舵太夫　出來る段ぢやござりませぬ、番屋に大勢居りますからに、直ぐにも事は運びまする。

つなで　さあらば早速に用意しや。

舵太夫　嬉しや嬉しや、氣の拔けた職人衆が、定めて喜ぶことであろ、さあらば急いで參りまする、追付後から御座りませ。

と舵太夫は勇んで去る。

季　長　さらば姉上、伊豫の客人。

通　有　五郎殿。

通　時　いざ御案內を、

季長、資長は通有、通時と共に立出づる。

つなでのう季長。

季長振り返る。

つなて　妾も後より、

季　長　む、お早うお出なりませい。

（幕）

第二場　袖が濱の海岸

海岸には嚴めしく幕引廻し、新艘の安宅船、女の化粧道具、色絹などに飾られて艫の方のみ高く見ゆれど、半ば以下は、名付の式を行ふべき急拵への屋臺に遮ぎられたり。十程の屋臺は幕打渡したれば、海の景色は半ばを見得るのみ。屋臺の上には、神酒五穀などを捧げ、準備全く成りたることとて、行交ふ人の影もなく、微妙の音は龍神の玉の宮居を洩出づる、管絃の樂にやあらむ。竹崎五郎季長、三井三郎資長は河野四郎通有、同伯耆守通時を誘ひ、從者許多を引連れて來りつ。

季　長　御覽なれ通有殿、あの屋臺こそ今日の性根、新艘の名付親は、あれへ登つて魂を、船に與へる處でおじやる。

通　有　俄のお整粧にも似合はず、殊の外なお手廻し、太宰の家の手捌、感じ入て候ふなり。

通　時　道は氣丈の後室殿、まつた切者の十郎殿の手配、中中味を遣り居る事ぢや。

季長　さ、あれなる席に、御休息下されい。

通有　いや先づ御身より、

季長　客人の貴殿より、

三郎　無益しい空遠慮、さあらば同時に掛けられい、ははははは。

季長　いかさまのう。

一同　ははははは。

と席に腰を掛ける。向ふより太宰後室綱手の刀自は、老臣大矢十郎種保、郎黨藤源太助光、其他家臣を引連れて來る。

季長　姉上には、大層早うおじやつた事の。

つなて　娘の身が、心掛りぢやほどに、急いで參りました、して浮木は何處にぞ。

季長　假屋に居るとは聞きたるが、未だ對面は得致さぬ。

つなて　すりや四郎殿にも逢ひませぬか。

通有　竹崎殿に案内せられ、袖が濱の磯景色を、見物致いて居りましたれば。

通時　いまだ御面會は仕らぬ。

つなて　十郎。

十郎　はあ。

つなて　早う用意をさしやいのう。

十郎　いかさま、御病中の姫上、松の間を吹く磯風に、吹き弄られてはお身の毒、取急いで船卸を終らせう。いざ、あれへ御座りませい。

と後室を導き、十郎は會釋して船の後方へ去る。

船番匠舵太夫は、似合しからぬ華美なる直垂を着て幣束を持つて立出づ。この時分より見物の老若男女佇むもの多し。

舵太夫　皆皆樣へ申上奉る、愈よ新艘卸しを、これから始め奉るでおざりまする。さあさあ呪文を讀みまするぞ。

と幣を振り立て、

舵太夫　安爾曼爾、摩禰、摩摩禰、旨隷、遮梨、弟賜、咩賜、履、多瑋、羶帝、目帝、目多履、娑履、阿瑋、娑履、桑履。

と唱へ終る。靜かなる樂の音に連れて、浮木姫は眞菰の肩に凭りて、力無氣に歩み來しが、四郎を見るより眞菰を突き放し、蹣跚つつ屋臺の後へ歩み行く、眞菰後より隨ふ。續きて綱手は侍女を從へて出で、一同に會釋し、また屋臺に上る。眞菰、侍女は屋臺の下に座し終ると、大矢十郎種保は文挾に告文を挾さみたるを持ちて來り、これも屋臺に上る。暫くありて浮木姫は立上り、幣を振つて天地を拜し、神酒を

また天地に濺ぐ。綱手は五穀を四方に蒔き散らす。此間に番匠達は、斧を持ちて來り、舳の方より、次第に小綱を切り放し、屋臺の上なる十郎が文挾のまま、告文を浮木姫に捧ぐる時には、太き力綱ただ一條を殘すのみ。浮木は告文を開き、

うきぎ　「高間の原に神つまります、皇睦神ろぎ神ろみの命もて、魂和神をたたへまつる、種種の色物を、山の如く積み足らはして、神祓に祓ひたまへば、雨風の禍なく、荒大海を靜め守り、神安らけく、平らけく、汝浮木と名づけまつる、この船の末よかれと、みほぎ申すことの由を、神だち諸共に、聞こし召せと申す。」

讀み終るを待兼ねたる舵太夫は、

舵太夫　えい。

と綱を切る。舟はすらすらと沖の方へ走り行く、鳩二羽艫の

中より舞ひ立つ。（船屋臺に隱れる）浮木は疲れし樣にて倒れかかるを、綱手抱き留めて、十郎に目合せす、十郎は眞菰を呼びて姫を下さうとする頃、船は海上遙かに浮かみ出でたり。

見物一同　やんや、やんや。

季　長　いかにも見事ぢや。

通　有　鮮やかな物でおりやつた。

舵太夫　鼻が高うおりやりまするわ。

ここへ下部は輿を舁きて來り、屋臺の後へ入る。綱手は引違へて立出づ。

通　時　度度の事とは申せ、御手配漫ろ感服致してござる。

通　有　かの大船のすーるりすーるりと浪を切つて浮み行きしは、勇魚の進むに異ならず。

三　郎　番匠共も手柄でおざる。

つなて　いや四郎殿、その手柄を褒めるよりは、あの娘を褒めてたもれ、告文を讀むと其儘、未だに正體ないわいの。

季　長　病の床を腹這ひ出で、今日の役をば勤め終せた、流石は姉上の子ほどあるわ。

通　有　今こそ眞に四郎が妻病募らせては恨なり、早早館へお歸し下されい。

十郎、眞菰前後に附添ひ、浮木輿に乘りて出づ。

つなて　姫、今のをお聞きやつたか。

うきぎ　あい。

つなて　四郎殿。

と呼ぶと四郎立ちて來る。

つなて　通有殿ぞ。

浮木顏を隱す。

通　有　風を厭ひて、お歸りあれ。

輿には眞菰侍女等附添ひて歸り行く。あとに番匠共騷がしく、「やれ何者ぞ」「胡亂者め」など口口に罵る。蜑海松布、見物の人を突退けて走せ來るを、番匠共押止める、藤源太立出で、

藤源太　狼藉者め。

みるめ　はあ。

藤源太　何者なれば騷がしう、警固の者を愕かすぞ。

みるめ　大事が出來ました、御註進に參りました。

耶　なに大事とや、何は然れ見物どもを、

藤源太　はあ。

見物の者、番匠など、追遣らる。綱手は席を進め、

つなて　して、註進とは、

みるめ　されば御座りまする、私は浦の鰒取り、沖の荒磯に舟をかけ、

唄　鹽を吹くやら浴びるやら、浮きつ沈みつ稼いで居ると、宗像の海に山ができた。

山ぢやおざらぬ見馴れぬ船が百艘あるやら千艘やら、一團に密集つて、海か陸地か仰山な、

みるめ　何ぢや知らぬが暗雲に、空閨あげて、どつと囃して居りますれば、早速ながらお館さまへ、お知らせを致します。

つなて　おう領主を忘れぬ忠義もの、後日の沙汰を待つて居や。

みるめ　有難う存じまする。

季　長　いま此蜑の知らせに依れば、正しく蒙古の軍勢ならめ。

通　有　面白し、面白し、今こそ通有が、烏帽子を掛ける時到れり。

通　時　さても御身の武運の強さよ、はからず參りし旅路にて、思ひも寄らぬ異國勢。

通　有　年來の敵に逢はんこと、弓箭の勇、なう、叔父御。

つなで　珍らしき働きなし、名を末代に輝かされよ、吾儕の名に負ふつなで丸も、今よりしては軍よそひ、

季　長　我が名に因む竹の丸、

十　郎　種保が手船は大矢丸、

三　郎　我が持船の三井丸、

通　有　旅を掛けたる我黨なれば、おう、新艘の浮木丸を、

通　時　艤して勳功はじめ、

藤源太　我等も御主の船に乘り、

つなで　今宵直ちに夜討を掛けて、

季　長　敵兵どもを惱さんも、

通　有　皆母刀自が兼日の、

三　郎　深き思のいまここに、

通　時　眞實となつて顯はれしは、

藤源太　我等の身までも喜ばしや、

十　郎　この上は出陣の御用意、然るべう存ずる。

つなで　さらは方方。

と綱手立上る。

（幕）

明智光秀

（場）

朝の幕　龜山城内の庭
晝の幕　城中龍の間
夜の幕　京都桂川の畔

（時）

天正十年六月二日

（人）

惟任日向守光秀
明智左馬助光春
溝尾庄兵衛茂朝
進士作之丞

藤田藤三
茶道
士卒
光秀息女玉井
侍女久代

朝の幕　丹波國龜山城内の庭

庭中の離れ座敷に、腰を掛け柱に凭り、文を廣げて顔に當て、朝まだき、乾かぬ葉末の露とともに、悲嘆の涙に暮れたるは、當城の主、惟任日向守光秀が息女玉井なり、いま十七歳の

娘盛りを、愁ひに暮らすも、單へに戀の故なりと、樣子知つたる侍女久代は、姫の跡を尋ね來りしが、

久代　おう姫上さま、ここにおざられましたか、やや、また泣かしやつてぢやな。

玉井　久代、妾はな、考へれば考へるほど、世の中が疎ましうなつた。

久代　なに、世の中が疎ましい、姫上さまの年延から、そのやうなことを仰有つたら、この世は出家ばかりになるであろ、おほほほ。なあ姫上、その仰せにも裏があろ、應はぬ戀が應ふたら、お庭には望みの色の花も咲かう、何を見ても樂しう御覽ぜられうに、

玉井　見やいの、其方を頼うで蘭丸樣に、差上げた玉章の、御返事は無うて、袖書のやうに、「一日を千世と思ひかへして」と認めさせたまふたは、どう考へてもこの戀は、應はぬものであらうぞいなあ。

久代　いやいや、そりや姫上の考へ過ごし、殿様さへ御承知なさりや、屹度成就いたしまする。

玉井　そりや何故に、

久代　彼方さまが姫上を嫌はせられぬ證は、何よりもこの文ぢや。

玉井　嫌はせられりやこそ、この文も戻つたは。

久代　さ、それが唯でも戻らうことか、封じ目解いて御覽ぜられたが、何よりの御心中ぢや、まだその上に、「一日を千世と思ひかへす」と遊ばされたは、愈よ姫上を、憎うは覺さぬ彼方様の、お志ぢやと思はれまする。

玉井　情ないは父上様、何が意趣やら知らねども、蘭丸さまの名前を聞いたばかりでも、心地悪いとの仰せ、あ、所詮この戀は……

久代　さりとてはお心弱い、なんの、一心は岩をも透しますげな、したが姫上、御當家さまと森家とは、隱れもない仲惡、それも御承知で、何として彼方を思はれましたのぢや。

玉井　そりや、あの夫婦の闘が當つたからぢや。

久代　闘と云ふのは時の塲合、もしその闘が外の御人に當つても、同じやうに姫上には、其方を思はれまするか。

玉井　ええ何云やる、引當てたあとが美しかつたら、それで事は濟んだのぢや、安土のお城でお庭の遊び、あるほどの娘達、花の本に居並うて、手に手に深紅の紐を持ち、引き當てさせた侍衆にその日の中は妻と喚ばせうとて御戯れ、御諚が下ると一番に、來かかつたのは蘭丸さまぢや。

久代　それで闘が當らせられましたのか。

玉井　おう、かねて不快の森家の殿、常から好うは思はぬ人が、その日に限つて懐かしく、引かぬうちから彼人に、引かるるやうに思はれてぢや。

久代　あの森の殿は、御奏者番を勤められ、五萬石の城の主、ほんに名に負ふ蘭の花の、香んばしい前髪立、姫上とは似合しい、一對の夫婦雛花を咲かせて天地を、美しく色取する、春の神さまが、お助けなされたのであろ。

玉井　ええ神さまごと云ふてくりやるな、利生を授けてたもるのが、神さまの慈みなら、頑なな父上の、意地悪いお心も、少しは溶ろかして下されうに。

久代　南無八幡！　左様づれのこと、怪我にもおしやられますな。

玉井　とても果さぬ戀する身には、何の佛罰、何の神罰。

久代　あれ勿體なや。

と、久代天を拜む。玉井は文を持つて立上り。

玉井　蘭丸さま……

と、あらぬ方を見遣る。久代あなたを見て、

久代　あれ、殿樣が、こちへお越ぢや。

玉井　なに父上が、はて御出陣の御支度もなさらいて、

久代　幸ひお供も無い漫ろ歩き、なあ姫上さま、中國へ御出陣遊ばしては、何時を果とも分らぬ長軍、四邊に人なき能き仕合せ、いま一度殿さまにお縋りなされませ。

玉井　……一層……云ふて見やうか。

久代　御寵愛の貴方さま、再再お頼みなされたら、御聞入にならうも知れませぬ。

玉井　父上か可いと云はしやれても、もし蘭丸さまが。

久代　姫上、先の先は後のこと、まづ第一には殿樣から。

久代は彼方へと去る。惟任日向守光秀は、思案あり氣に、寛歩

しつつ來る。玉井見るより。

玉井　あ、父上。

と歩み寄る。光秀は思案の底を破られ、

光秀　玉井。

玉井　あい。

光秀　これへ庄兵衛は參らぬか。

玉井　いいえ。

光秀　もはや參りさうなものぢやが。

玉井　父上、あの今日御出陣なされますのぢやな。

光秀　おう留守には左馬助を殘し置く。

玉井　その出陣の前方に、なあ父上、お願がござりまする。

光秀　ほう、何の願？

玉井　あの森の殿と……なう父上、緣組まして……

光秀　蘭丸と夫婦にせいとか、そりや成らぬこと、何日ぞやもあれほど汝に申したではないか。

玉井　とは云へ、蘭丸さまと妾とは、右府樣の御前にて、天下晴れてなつた夫婦でござります。

光秀　云はば小兒の戯れごと、闘などを、何とてさは。

玉井　闘にせい、戯れにせい、女の持つは一人の夫ぢや。

光秀　闘とても！　小手先の巧の好きな右府公ぢや。

玉井　巧であろと、當つた上は、やはり夫ぢや。

光秀　またしても夫呼ばはり、なう、親の許さぬ密かごとを、若いものはせぬことぢや。

玉井　密かごとか！　右府さまの御前で出來た緣ぢやに。

光秀　御前！　御前がなんぢや、縁とは天の定めぢや、人間の右府公がなに係はらう。

玉井　父上、定めぢや、おう然うであらうとも、父上、闘が當つたのぢやもの。

光秀　闘か、また戯れごとの闘か。

玉井　でも、父上、父上の仰有る、定めに應ふた闘に當つたのぢや。

光秀　ふう。

玉井　さあ父上、どうぞ妾を、なう、蘭丸さまと夫婦にしてたもいなう。

光秀　ならぬ。

玉井　なぜに。

光秀　三十四萬石の惟任家、五萬石の森づれとは、釣合はぬ縁ぢや。

玉井　釣合はぬ、ああ、器量勝れた蘭丸さまと、不束なこの玉井とは釣合はぬ。

光秀　玉井、父の額を打割つた、あの蘭丸が戀しいか。

玉井　それは右府様の仰せぢやもの、彼方の咎ではおりないのぢや。

光秀　右府の仰せ、げに、右府の仰せぢやなう。小姓上りの若者に額を割らせし右府公の仰せか、まだ手に入らぬ敵の領地を割當てて、多年の辛苦に取つたる知行を、横取りせうずる右府公の仰せか。

玉井　右府さまのお恨を、蘭丸さまに着せさせますのか。

光秀　彼れとても水波の隔て、鷹匠よりも鷹を厭ふは、空飛ふ鳥の習ひぢやぞ。

茶道　茶道來りて、主君の前に跪き。

茶道　はつ、先手は既に出陣の用意調ひ、殿のお廻りを待ち居りまするやう申しまする。

光秀　よい、直ぐと參るぞ。

茶道はつ。

茶道は急ぎ去る。光秀は獨りごとのやうに、

光秀　庄兵衛は何としたか。

玉井に向ひ、

光秀　なう玉井、庄兵衛が參つたら、ここへ待たせて置け、ゆめ、直に座敷へは通すまいぞ。

玉井　あい。

光秀去る。玉井思ひに沈む。以前の久代は伺ひ出て、氣遣はしさうの面色にて、

久代　姫上、姫上、お願はなにとでござりました。

玉井　ならぬといなう。

久代　でも情强の殿樣！　したが姫上樣、殿樣には、別けてこの頃は御氣分

晴れず、夜も落落と御寢はならず、物調める折なども、深い戀でもするやうに、思案に窶れて見えさせたまふは、大方今度の軍は、よほど手重い合戰であろ、そこへ勝手らしい姫上のお願、それで御機嫌に外れたのでおざりませう。

玉井　でも汝云へいと勸めやつて。

久代　御出陣の幸先には、大方のお願なら、屹度應ふがいつもの習、それでお勸め申しましたが。

玉井　應はぬとても一人の心、御承知が無くは……

久代　殿樣の御聞入がないときは。

玉井　何時までも孤獨で居て、日毎日毎にお願を續けうまでぢや

久代　さ、それも然うではおぢやりまするが。

あなたにて、鬨の聲、遠く聞こえる。

久代　さあ姫上さま、午時過ぎには、殿様も御出馬なり、早うあなたへ行かしやりませ。

玉井　なあ久代、父上の仰せには、追付庄兵衛がここへ來るほどに、待たせて置けとあつたがの、此程より御前の首尾、物案じの御氣色と云ひ、深い仔細のありさうな！　なにとであろ、其方、ここへ忍ふて、父上と庄兵衛とが、話の樣子を聞いてはたもるまいか。

久代　あの立聞を。

玉井　おう、なう。

久代　宜しうござりまする。

玉井　あなたを見て、

玉井　あれ、あの躑躅の間の人影は、どうやら庄兵衛さうな、早う隱れてや、さ、早う、早う。

と慌てて久代を次の室中へ忍ばしむ。此方よりは、溝尾庄兵衛茂朝、旅裝のまま、この所にて主君に對面せんと來りけるに、光秀ならぬ玉井を見て不審し、

庄兵　姫上にておはすよの！　はて、殿には。

玉井　おう父上には、庄兵衛が來やつたら、この所に待たせいとて、今方あちへ行かれてぢや。

庄兵　さては殿には、御座敷と見えまするな。

玉井　いまここへ參らるるわ。

庄兵　はあ。なう、姫上、折あらば申上うと存じ居つたが、姫上にはよしなき男を戀はるるとか、深き意趣ある森の殿を、なんぼう慕はせらるるとて、とても添はれぬ仲合なれば、思ひ切つて下されい、御緣ありて女房どもが、御乳を上げたれば、お主よりも愛しい姫上、惡しうは存じ申さ

ぬで。

玉井　ええ其方までが、父上と同じやうに、人の氣を知らぬにも程がある……

庄兵　その思ひ込ませられては後へは引かぬが、親殿讓りの御氣質、ようい血汐に、得て身體を縛られまするが、なに三年五年の月日を過ごせば、往事は渺茫として夢の如し、舊いことは幻と散りまするわ。

玉井　散る！　散るといな！　この思ひが……

庄兵　散る段か、姫上、鬮引いた頃、空を飾つた櫻の花は何處に匂ふ！　捨てさせられい、捨てさせられい實を結ばぬは仇花ぢやに。

玉井　仇であらうと、一日で散らうと、花は咲いた時が命ぢや。

玉井は躑躅の植込に身を凭せて、失望の空に望の雲を見遣る、庄兵衛は持てあましたる氣色なり。折から以前の茶道來り、

茶道　溝尾さま、これに在せられましたか、殿樣仰せられまする、急いで龍の間へ、お越しあれとのこと。

庄兵　ふう、して、殿御一人か。

茶道　追付け左馬助さま、御出仕とのこと、その外は御人拂にござりまする。

庄兵　さらば參らう。

茶道　お早うござりませ。

茶道、玉井に會釋して下場。後に庄兵衛、

庄兵　なう姫上、よく御思案あらせられい、仇花ぢやに、なう姫上。

玉井は聽かぬ風、庄兵衛嗟嘆しつつ去る。玉井以前の文を出

して顔に當てて愁に沈む。久代は力拔けのしたる面色して奥より出づ。玉井見て、

玉井　久代、御談合の席が變はつてぢや、龍の間へいて聞いてたも。

久代　滅相な、お表へは妾づれには……

玉井　さうであつた。

久代　な、姫上なりや、何處へ渡らせられうとまま、こりや一層御自身でなされませ。

玉井　久代、そなたどう思やる、妾にはあの庄兵衛が來たことがどうやら彼人のお身の上に掛合のあるやうに思はれてならぬがなう。

久代　それはあまり彼方を、思はせらるるからであろ。

玉井　なりや、心を鬼にして、忍び聞きをしませうぞ。

と立上る。

（幕）

畫の幕　龜山城中龍の間

城中なる龍の間の襖は、狩野何某が筆を揮ひし墨繪の龍、天を翔けりて雲を起す、角の柱に、朱き紐に金鈴を懸けたるは、密議の折などに、表より人の來るを知らせの物好なり。こなたの柱に身を寄せしは、城主光秀、庄兵衛茂朝は膝を進め、

庄兵　殿、思ひ立ちませ、殿。

光秀　……

庄兵　何故にお返事はおざりませぬ、殿、なじよに。

光秀　主を討つは逆罪ぢやよ。

庄兵　はて何の主！

光秀　主は主ぢやに。

庄兵　情あれば主とも頼め、三十四萬石の大名を、狗兒づれに額を割られ生恥をかかせられた、右府公が主か。

光秀　そりや、かねての御短氣ゆゑぢや。

庄兵　御短氣ぢやとか、ふう、德川三河守殿安土入の折節、心を盡して調じさせた饗應の支度のとりどり、莫大の入目を役にも立たせず捨てさせられたも、お恨には覺されぬか。

光秀　怒りに任せて安土の橋より、投込みし調度の品品、水にいざよふ朱泥金泥、美しうあつたな。

庄兵　武士の面を踏み躙られしを、御無念とも思はれぬでな。

光秀　……

光秀の返辭なきに庄兵衛はやや苛立ち、

庄兵　なう殿、その上今度の仰せたりや、ありや何ぢや、切取もせぬ雲州石州、それを引當に、これまでの御所領をお取上げぢやと……

光秀　言葉を次がんとするとき、金鈴鳴る。

庄兵　左馬が參つたと見える、これへ呼べ。

庄兵　はつ。

庄兵衛立つて襖を開きて入る。時計鳴る。光秀顎にて軍勢の數を算へ已んで、また指を折りて里程を量る。襖を開きて庄兵衛は左馬助光春を伴ひ來る、二人は光秀の前に平伏す。

光秀　光春、早速の出仕大儀ぢや、近う寄られい。

傍らの手箱の中より、地圖を取出して押開き、

光秀　さて、今日の出陣ぢやが、今夜は何れへ先手を進めうな。
と左馬助の氣色を伺ふ。光春もやや暫くは光秀の面を打守りてありしが、

左馬　殿、思ひ立たれまいたな。

庄兵　左馬どの、まだ、その分別が得付かしやれぬでな。

左馬　庄兵衛、御邊は知つつらうが、右府公は今夜いつもの寺に泊らせらるるか。

庄兵　されば、五十に足らぬ小人數にて、本能寺の客殿に、昨日から宿取つてぢや。

光秀　道は何處を推して行かう。

左馬　はて、三草を越えては追分道、播磨路は一筋但しは……京へか。

庄兵　殿、その京へが我等の望ぢや、なう殿今方も逐一と申し上げた通り、事體今度の御諚からしてが、無情いお仕向ぢや、まだ取れもせぬ雲州石州を知行せいなんどと、それも御加增ともあればのこと、丹州江州は、今年の物成までも取上うとの仰せ、まだしも妻子眷屬まで、差出せいて無さが不思議、右府公が近頃のお計ひたら、殿の自滅を待たせらるる分のこと、近くは荒木、佐久間か能い手本ぢや、覺し召し立ちませいでは、な！

左馬　殿、庄兵衛の申條に御同心あらせらるるか。……謀叛は光春も同心、しかし、まだ時が致らぬ氣に存じまする。

光秀　時？　時は究竟だと思はるるがの。

左馬　いや、北國の柴田、關東の瀧川、まだ恐ろしいは中國に居る羽柴が勢せめて殿の身代五十萬石に上るか、またはあの筑前が、今一倍深入して居つたならと、下墨は付けましたが。

光秀　當の敵は織田殿一人僅かの人數にて、要害なき寺にあるは、討てい
とある天の敎ぢや。

左馬　なりや、愈よ御謀叛か。

光秀　げに下剋上の姿なれば逆心とも……謀叛とも。

左馬　はつ、かかる大事を御口外ありし上は、申せばとて後へ引かるる殿
にもあらず、この陣推をそのまゝに、暮るるまでは何處までも中國行
き、三草を越えて老の阪より都を差して一文字、直急ぎに急がせなば、
遲うて亥の刻には、かの所へ達しませう。

光秀　庄兵衛、本能寺には壕があつたな。

庄兵　寺の四方は壕におざります。

光秀　深うあつたかの。

庄兵　敵の逃げられませいほど。

光秀　うむ。

光秀は會心の笑を浮めたり。折から茶道入り來りて茶を捧
ぐ。光秀愕然として、

光秀　己れ、誰が許してこれへ參つた。

茶道　お許しはありませぬが。

光秀　入るならば、なぜにあの綱を引かぬ。

茶道　今がた姫上樣が、お座敷よりお出られまいたで、御評定は濟みまし
たかと心得まして。

庄兵　なに、姫上が。

光秀　玉井が次間に居たと……
光春と茂朝とは、上下の襖の外を見る。

光秀　ひとりか。

茶道　はい。

光秀　一人だの。

茶道　はい。

光秀　よいわ、用事は濟んだ。庄兵衛用意せい。

庄兵　はつ。

左馬　殿、我等は。

光秀　大事の留守ぢや。

左馬　評定が長はつても、やはり留守でおりやるのか。

（幕）

夜の幕　京都桂川の畔

柳老ひたる桂河の磧草生ひたる小丘の下には、水色の旗一と流れ、枯梗つきたる幕を張りて、暮れの風に、煙一筋には立ちやらぬ篝火がはりの焚火ちよろちよろと燃ゆ。甲冑着たる日向守は小丘の上に立ち、彼方を見遣りつつ。

光秀　何んぢや逆心！　逆心とは何主を討つのは御身の家風ぢや、それを我等に責めるのか、おう、人は云へ、何でうとも、斯でうとも、己がじいに罵れ、それをなに胸に病まう、云ふものには云はせて置け、罵るものには罵らせい、谷袋に追詰められては、猪も牙を鳴らすものぢや、引返して獵人に齒向ふより他に手立がおざるか、我等を責めるよりは、然ぢや、天命を咀ふが當ぢや、御身が命を亡ぼすも、宿業の定めといふもの。運命といふ駿馬の轡を取つたらば、やはか放さう、右府を害し奉れば、

花洛は我が息の下、天下の政事は惟任が判ぢやぞい。平氏の末葉織田の天下は、糾へる縄のごとく、土岐源氏の正統たる、明智に代はるが天の歩みぢや、さ、覺さぬが、殿、ははは。

幕の中より、土卒と共に入り來れる藤田藤三、

藤三　殿は何れに在す。

と云ひつつ、靜かに丘を下り來れる光秀を見て、

藤三　殿、一の注進に參りまいた。

光秀　いつまでも物靜かぢやが、まだ掛らぬか、

藤三　これまでは聞こえませぬか、味方は四方を取圍んで、鬨の聲をどつと揚げると、足許から山雞が飛び立つたほどの驚き方、防ぎ矢が五筋六筋、的も無い空を走つて、僅かの同勢が血眼になつて、合戰最中にござりまする。

光秀　さては攻め入つたな。

藤三　はあ、大門を抉じ放して、大潮のやうに亂れ入り、散散に切り立てたるに、寢亂れ姿の敵の人數、こを先途と防ぎまするが、追付け右府公の御首も、たまはるべう存じまする。

光秀　本懷はいま……心地よいわ。

光秀の命を受けたる士卒、入り來りて、藤三を見て遠慮の躰、光秀はそれと見て、

光秀　龜山の方からは、續いて誰れも參らぬか。

士卒の一　はい、まだ誰れも見えませぬ。

光秀　上の渡しに參つたものも、まだ戻つては來ぬか。

士卒の一　はい、まだ戻りませぬ。

このとき、幕を揭げて、外の士卒入り來りて會釋し、

士卒の二　殿さま、上の渡しで問ひましたが、姫君らしい人は、掛つてはおじやりませぬげな。

光　秀　若い女は見受けぬとか。

士卒の二　はい、手の者の外は、男女ともなく、一人も通らぬげに申しまする。

光　秀　ふう、脱け出しつるは出城の後、急けばとて女の道、踏馴れぬ老の阪道、この川を越さう筈はあるまじいが。

士卒の二　外のお方と事かはり、姫上さまがお通りやれば、見違へやう筈はおざりませぬ。

士卒の一　極まつて、この川を渡らせられぬに限りまする。

士卒の三と四とは、幕の外を見、

士卒の三　姫君ぢやろ。

士卒の四　早う行け。

二人は驅け出だして、玉井を捕え來る。玉井は父の姿を見て、

玉　井　や、父上。

光　秀　逃げんとするを、光秀捕へ。

光　秀　何處へ行く。

玉　井　ちと、ものの所へ。

光　秀　ものとは何、待て、待て、留守居の左馬より火急の注進、わが出陣を待つて脱け出て、何處へは彷徨ひ歩くぞ。

玉　井　父上こそ、何處へ參らせたまふのぢや。

光　秀　舌長し、女、我が行く先は、

玉　井　知らいでか、夜討掛けの御塲所は、

光　秀　やれ、待て、玉井、など其方の口を待たう、云ふたびに咀ふ心地よ。今夜の敵は右大臣平信長公、先手は既に本能寺へ、直直と寄せたれば、追付

け吉左右の注進もあらんずらむ、父が武運を開くべき、一大事の幸先に肆まに城を脱け出で、無益に物な思はせそ。

玉井　さほど大事の働きに、など父上にはここに居たまふ、など御旗本へ切込まぬのぢや。

光秀　えい、差出たことを申すには及ばぬ、掛らうとて、掛るまいとて女の知つたことか。

玉井　いや、いや、大それたことを爲さるので、空恐ろしうてならぬのであろ。

光秀　……

玉井　さ、さうであろ。な、父上、さうであろ、恐ろしいも無理か、お主と頼うだ上様を討つのぢやもの、刀も鈍り、心も竦むが理の當然ぢや、なあ父上、恐ろしいと思ふたら、この謀叛止めて下され、なう父上さま、どうぞ思ひ止まつて下され。

光秀　今となつて何を云ふ、歸れ、さ、龜山へ歸れ。

玉井　なんぢや、龜山へ歸れ、あの牢のやうな城へか、漸うに出た妾を、またあのうちへ入れうとか、厭ぢや、厭ぢや、なう父上、その沙汰措いて下され、措かう序にこの謀叛止めて下され、なう父上、どうぞ思ひ止まつて下さりませ

光秀　今となつて……ははは、止められうことか、さ、歸れ、城へ歸れ。

玉井　厭ぢや、空を戀ふ鳥が、どうして籠へ歸らうぞ、いや歸りませう、父上、さあ、歸りませう、

光秀　おお、歸るか。

玉井　さあ歸りませう、さあ供揃へしや、父上歸りませう。

と、光秀の手を取る、光秀無言にて靜かに拂ふ、玉井は地上に

坐して、

玉井　あ、厭ぢや、一つ紐に繋がつて、父上と歸るのは厭ぢや、妾は蘭丸さまのお傍へ行く、天も落ちよ、地も覆へれ、河の水は逆さに流れよ。お主は殺せ、親は、咀へ、戀しい人とは永却までも離れぬぞえ。

光秀　埒も無いことを申すな。

玉井は立ち上りて、

玉井　云ふ！　云ふ！　右府樣。上樣。光秀が謀叛するげに、お心を付けさしやりませ、謀叛人ぢや、謀叛人ぢや、大逆罪を目論んでぢやぞ。

と士卒を推し分けて行かんとす。ここへ來れるは溝尾庄兵衛なり、姫を捕へ、

庄兵　姫上、何處へわせられまするな。

玉井　誰れぢや、退け、退きやらぬと、それ電光が落ちて、お身の身軀を燒き盡くすぞよ。

庄兵　何を仰有るのぢや。

光秀　やあ、庄兵衛、注進聞かう。

庄兵　はて、赤棟蛇が蛙を見込んだよりも容易い軍ぢや。二時や三時には、加勢の來べき便りもなし、鬼神と呼ばれし右府公も、御最期は瞬く間。

光秀　合戰は最中な！

庄兵　あれ、殿、心を靜めて聞かさせませ、矢叫びの音が、それ、風に紛れて致しまするわ。

玉井　蘭丸さま、蘭さま。

と、庄兵衛に縋り着く。

庄兵　こは何となさせまする。

玉井　父が謀叛しまするぞ、さあ逃げた、逃げさせませ。

庄兵。姫上、拙者は庄兵衛でござりまするぞ。

玉井　あつ、庄兵衛、お、お、庄兵衛か、逢ひたうおざつた、さあ庄兵衛、父上が謀叛する、留めてたも、さあ留めてたも、いやいや、留めて居たでは埒が明かぬ、さあ右府様の宿へ行て、蘭丸さまを連れて來う。

庄兵　姫上、姫上。

と留める。光秀はその間に小丘の上へ登る下にては、

玉井　さあ行こ、さあ庄兵衛、早う、早う。

庄兵　はて、何處へござらせらるる。

玉井　其方の行く所ぢや。

庄兵　某の參りまするは……姫上、それ、怖い……鬼……常から厭はせらるる、阿呆羅刹の居る處何しに姫上を伴なはれ申さうぞ。

玉井　阿呆羅刹の居る處ああ、そこが望みぢや、連れてたも、蘭さまと面白う、さう、さう、闘事して遊ばうもの。

庄兵　ええ姫、此方はiまだあの蘭めを思ふて居させられるのか、親殿さまの額を破り、諸人の前にて耻辱を與えし、あの蘭丸めを最かせられるとは、あまりと云へば心無し、姫上、庄兵衛が女房は貴方の乳人、上げた乳の恩いために、お心が狂ふたなぞと、沙汰せられては面目が潰れ申す、お心確かに持たせられませ。

玉井　持て！　持てとは何を、おう打物、それ、夜討ぢや、蘭さま逃げう、さ、早う、さ。

と、庄兵衛の手を引く光秀丘を下りつつ、

光秀　庄兵衛、まだ火は見えぬの。

庄兵　はつ、取込め奉りし上は、火を掛けうとの御旨、大將軍を預り申せし内藏介よつく承知間も無う火手が揚がることと存じ居ります。

また幕を掲げて慌だしく注進の武士進士作之亟、直垂の袖を拗りたるへ、蘭丸の首級を包みたるを擁へて來りたり。

作之　殿、御注進にござりまする。

光秀　おう。

作之　内藏介申上げます、軍央ばでおざりまするが、あまりの喜ばしさに、お使を出しまする、この首級は四方田但馬手柄におざりまする、

光秀　誰れ人の……庄兵衛見い。

庄兵　はつ。

庄兵衛は包を開き見て。

庄兵　や、こりや蘭……

玉井　蘭さまが何してぢや。

庄兵　ど、どうも致し申さぬ、な、それ、殿、かかる忌はしき首級なんどは、御披見に入れぬともぢや。

作之　ああ、いや御一人に次ぎては、深き遺恨のある首級、内藏介申しまするは、追つての實檢は後刻のこと、一刻も早う御内覽をとのこと。

庄兵　よいわ、扣えられい。

玉井　庄兵衛、その包うだもの、妾に見せや……

庄兵　いやいや、かかる筋なきものは、上蘭の見るべきものには……

玉井　ええ見しや。

光秀は庄兵衛に、

光秀　見せい、心もうはの空を翔けり、氣も轉倒の姫、それも然うあらう、我れさへ遁が憚りて、夜討の場には得參られず、河邊に彷徨ひ勝利の火を、今か今かと待ち居るさま、さぞ人目には詮なからず心狂氣にあらぬ言を、口の端に上す亂れ心地、よも分別は得付くまい。

庄兵　はつ、さらば姫上、とくと御覽あれ。
と、玉井に首級を示す。

玉井　こりや何んぢや。

作之　それぞ蘭丸が首。

庄兵　しつ。

玉井　なに、蘭さまの首ぢや、何處に、何處に首がおりやるわいの、

作之　はて、お前にあるのが、これでおぢやりまするに。

庄兵　これ、何も申すな。

光秀　して、但馬が討つ取つたか。

作之　されば、味方は廣庭に討つて入り、中にも四方田但馬守、第一番に緣に上がり候ふ所へ、奥の方より白小袖着たる若者、何者ざうと罵り申すを、四方田鑓を付け、終に手柄を致したるげに承りまいた。

玉井　なんぢや、蘭さまを仕留めた、そりや誰れが。

作之　四方田但馬が手柄を致しまいた。

玉井　ええ、蘭さまが死にやつた、お死にやつたのか、さ、誰れが殺いた、誰れが敵ぢや、おお、おのれが敵か。
玉井は作之亟を確と執ふ。

作之　姫君、何となされまする。

玉井　夫の敵ぢや。
懷劍もて作之亟を刺す。蘭丸の首を包み居たる庄兵衛、それと見て玉井を捕へしが、及ばず、作之亟は急所の痛手にて倒れ死す。

玉井　謀叛人！　謀叛ぢや！　主殺し！　見い、天罰の當るは目前ぢや。
と叫ぶ。幕の内に居並びたるものどもは、瞠目するのみなり。

光秀は刀を拔いて、玉井を斬る、姫悲鳴して斃れ死す。

庄兵　あ、何咎もない姫上を。

光秀　咎あればこそ。
　左手にて作之亟の死骸を差して、

光秀　笑止のことであつた。その死骸取片付けさせい。
　また拔きたる刀身にて、姫を差し、

光秀　咎なきものへ、辛う當りし報は覿面。
　悵然たる折しもあれ、本能寺の方に當りて火光立昇る。

庄兵　殿、火が。

光秀　なに、火。
　顧る。火光やや強し

光秀　火だ！　八幡！
　と刀を額に中て、踊躍して丘上に奔騰す。庄兵衛は士卒に命じて、二人の死骸を幕中に運ばせて、ともに去る、丘下一人の影なし。幕の外にて、

兵士　火だ。

兵士　燃ゑるわ。

兵士　追追と強うなるわ。
　など云ふ聲の騷がしく聞こえたり。光秀は火を見遣り、

光秀　燃えい、燃えい、種種の恨、無道、不仁、我慢、暴虐、無念、恥辱、憤怒、ありとあらゆる惡の薪に、天上界まで炎は達せう、この世からなる淨土の結構、寂光の城をそがままの、本能寺の甍の間よりも、地獄の業火は燃立つぞや、一心の爲す處、一念の赴く處、皆悉く御身の造りし我慢の固魂、それが斯くは燃ゆるぢやまで見よ、執心の脩羅が哮びは、三途と紛ふこ

の桂川の邊までも聞こゆるわい、堤に並うだ柳影は、冥路に導く牛頭馬頭よ、寺を燒いた酬ひぢや、この世から地獄へ陷ちさせらるるのぢや、心地よいわ、殿、かくてもまだ某が額を割らせたまふか、かやうにならせたまふても、まだ某が懸命の領地を召上うとせらるるか、惟任が天下となつては、御亡體を安んずべき、奥城の土までも、廣めうと狹めうと、ただ光秀が（胸を叩き）ここ一つぞ、ははははは。

光秀　と刀身を見て、殿、この血の痕が何と見えさせらるる、姫を殺したも元は皆、君の爲めに起つたのぢや物知らぬものを唆かして、役にも立たぬ戀といふ仇浪を、小さい胸に騷がせたのもお身さまぢや、狂氣しても、亂氣しても、罪ないものを殺せし科は、報ひを見せねば天道は闇、娘を斬つた親の心は、無道の君には得分かるまい、ははは。

寂し氣に笑ふ、風に翻へる水色桔梗の旗、あなたにては火手益す強し。

光秀　燃ゆるわ、あれ一としきり火の花の、虚空に散らばるは、さしもの棟木も落ちたさうな、生きながらの冥土の業火で、無道に固めた御身の骨が、汚ならしう灰色に、しやれて此世に殘るけな。燃えい、燃えい、光秀が胸の火は、越の國の燃る土、燃る水ともならうずに。

遠に見えたる火炎は漸くその勢を失ふ。折から士卒の姿に俏したる左馬助光春、丘下に立ちて、

左馬　殿。

光秀　誰れぢや。

左馬　左馬助でおざる。

光秀　如何して參つた。

左馬　殿が天下を取る小口、右府公自身に掛けさせられたは、行先を照らす松明ぢや、その火影を見物せうと、姿を俏して參りまいた。

光秀　して龜山の城は、

左馬　はて、城を預かる光春は、丹波國に留守の役、罷り出でたるは、誰れその組の粮米運びぢや。

光秀　うむ、さうあらうな。

左馬　殿、まだしても申すやうぢやが、なにとてこの光春に、留守居を仰せ付けさせられた、柴田、前田、瀧川の一類たりや、下墨にも知れてあるが、人の引いた圈の外へ、しやりしやり出たがるが羽柴の采、津田殿たりや、丙藏介たりや、打物取つては強うおざれど、なう、殿。

光秀　粮米運びの小者、口出は奇怪ぞ。

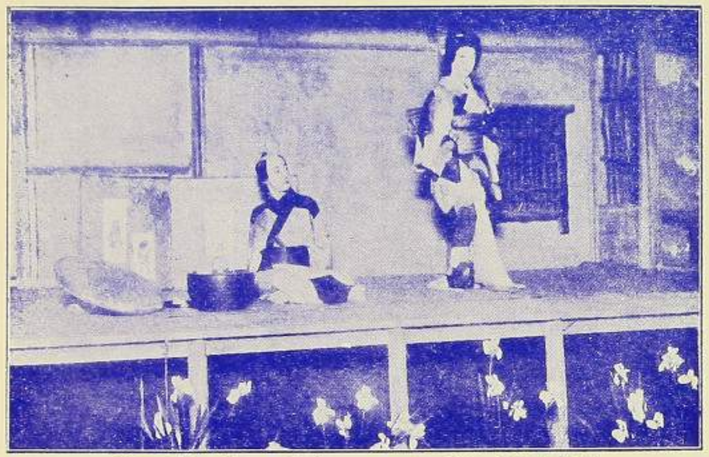
左馬　いかさまなう、殿が日頃の律義立て、味方を殖やさう大事の時節に、姫上を殺すほどの無得人、天下を取るには似合はしい器量ぢやよ、

光秀　ただ智惠のみでは天下は取れぬ、運ぢや、定めには背かれぬ、額に汗して待つだけぢや。なに、世の中は、大海の起伏す浪と同じこと、悲みの後には大いなる喜悅も參らうぞ。

左馬　喜びの男浪が推寄せたら、悲みの女浪も續いて來ようず、糠悅びにならねばよいが。

光秀　その浪の背の大きさが、人間業には計られぬでな。

（幕）



（調　秀）「えわぢんな」　　井　仲）「夫太うな」

田村　調秀　　島福　井伊　　井藤　村多喜

座　郷　本……月五年一十四治明

松一木

（場）

一、並木

二、茅屋

三、並木

（時）

享保の頃、時候は五月のはじめ。

（人）

昔の大盡　岸

山吹大盡

若衆方出來島平八

道外方市の屋三五七
末　社　鈍　六
昔の太夫住の江
外仕出しの往來の男女大勢

淺草並木。松の木越に隅田川の流れ見えたり。大道に莚を敷きて、松の鉢木を載せ、紙子着たる男、古き編笠深く着たるが、その傍らに坐したるは、いかさまこの鉢木賣物と覺えたり。誰そ買手もやと思へど、江戸の五月、往き來るさの中に價を問ふ人もなし。

岸　いかさまなう、我れ世にありし古へは、往來の人を誰れも彼れも有徳さうに見て居つたが、まだに此の松一木の買人が無いは、思ふたよりは、金詰りさうな、世界で分散するものは、我等のやうに太夫に打込み、身代投出すものばかりと推したは、南無三、白癩誤りな！　ぢやが、あの釣鐘さへ、一日には一つ宛賣れる江戸のこと、かういふ中にも買はれたら、もうそちには逢はれぬのぢや。

松を見て、

なう太夫。

舞臺忽ちに變じて、岸大盡が茅屋となる。以前の松の鉢より住の江太夫あらはれ、三枚折の屏風に向ひ、

住江　なんぢやえ。

屏風を引退くれば、編笠なしの岸大盡鉢に向つて坐しつつあり。

岸　なう太夫、賣らうと思うて持出したなれど、まだに價を付けたものもないわ、こりや太夫、そなたの魂の引越し先が惡るかつたぞ、その美くしい身體の方なら、十兩や百兩の端た金が何とあろ、思へばおりや

悲しいわ。

住江　わしの魂を賣つてなりと、わしの身體の外聞を、立てさせうとの御心底、いとしうて嬉しいぞや。

岸　なんぢや嬉しい、ああさうか、義理に預けた魂が、この荒屋を出立するので、それが其方嬉しいのか。

住江　別れたうは無いけれど、もとが松に打ち込うだ魂なれば、鉢と一緒に持て行かれまする。

岸　ふん、道理かな、さりとて今の身代、仕舞うた所が一貫にも足らず、やはりこの松を賣るより分別がない。

住江　置きなさんせ、どうで蛻の私の身體、義理が立たうと立つまいと、云はば木乃伊のやうなものぢやえ。

岸　その木乃伊ゆゑ、なほさら岸が一分立たぬ、其方に打込うで、遣ふほどにけるほどに、この紙子にもなつたのぢや、太夫と私との中といつば、（謠のやうに）世に隱れなきことどもなり、は、は、は、なう太夫、岸が馴染んだ住の江といふ女は、義理も知らぬと事觸れられては、これ其方よりは、このおれの面はどうして立つ、存外目先の利かぬ男と、世の取沙汰が口惜いわ。

住江　あの西國へ受出されて行くときに、形見に殘したこの松が賣れたら最期、もうこれから、お傍には居られぬがなう。

岸　魂を放しては價値のない松、いかさまこれを賣つたら、もう逢へぬかも知れぬ。

住江　逢はれまいなう。

岸　賣れたらそれ切り逢はれまい、身受の時には身體に分れ、今度は魂にも分かれるのだ、いや面白いわ。

住江　そりや、なんで。

岸　はて、紙子大盡の分際で、裸千両の松の太夫を、今まで引付けて置いたのは、思へば榮耀の沙汰であつた、は、は、は。

住江　それが此方さんは面白いとか、笑ふも道理、長い浮世に短かい二人、さ、もつと寄らんせ。

と住の江、岸の手を取るを振り拂ひ、

岸　ええ、禿のするやうな、初心な仕掛措いてくりや。

住江　でも直に分れとなるではないか、今度こそ實の別れぢや、なあ岸さま。

と取縋る、岸大盡も手を取交はし、

岸　別れのときだけ實を見せるか。

住江　ええ、その口が憎らしい。

住の江抓める。

岸　あいた、あいた。

住江　あやまつたか。

岸　あい、あい。

住江　憎てらしい、別れといふに笑ひなさんす。

岸　泣いた所で何とならう、女郎は川の水、年が年中流れるものたさ。

住江　川の水は流れても、落ちたら海に止まるにねえ。

岸　その海の水も、差すときあり、干くときあり。

住江　口合なら、男前なら、何處に一つ落ちのない方なれど、

岸　身貧が一つの疵でごんすか。

住江　またしても。

と打たんとする手を、岸大盡掴んで引き寄せ、

岸　いや美くしい手でえすの。

住江　知らぬわいの。

と突退ける、岸大盡屏風の中に倒れる。

舞臺一變して、また元の並木となる、岸大盡もとの編笠、手を延ばして何物かを捕らへようとする、ふと氣が付いて、幻覺より醒めたるさま、輕く欠伸する。折から觀音參りの婆、耳に珠數を掛けたるが、女童を連れて出で來り、

婆　やれ、お京よ、疲勞れたかな。

童　いえ、疲勞れは致しませぬ。

婆　達者なことぢや、戻りには金龍山の米饅頭買うておましよ。

童　あい。

と行く。向ふより熊野比丘尼、地獄の繪卷を持ちて來る。

童　婆さま、あれが見たい。

婆　うとましい、ありや地獄の畫ぢやがの。

比丘尼は頼むことかと思ひしを、止めにせられて、

比丘尼　阿鼻叫喚の苦しみも目の前に見る如くなり。

と、和讃めきし唄を謠ひつつ去る。婆行かんとす、向ふより禪門娘を連れて來る。

婆　やれ淨德さま、お戻りでござるかなう。

禪門　これは、これは、いま御參詣かな。

婆　けふは、いつよりも早いお出ましぢやの。

禪門　娘に迫が、まれて、つい早う出て參りました。

折から唐人風の耳の垢取長官、

長官　耳の垢取らう、耳の垢取らう。

禪門　はれ、よい次手ぢや、もし〳〵もし耳の垢取つて貰ひましよ。

長官　畏まつた。

婆　されば、お暇申しましよ。

長官　早うお出でなされ。

婆　さ、去なう。

と童を連れて行き去る。耳の垢取長官は禪門の耳を掃除する。あなたより紅繪賣出で來り、娘と顏を見合せて、

娘　おう、房太どのか。

紅繪賣　お蝶さまか。

禪門　禪門は耳を塞がれて聞えず、正面を見うるのみなれば、

禪門　誰れぢや。

娘　いえ、誰れも參りませぬ。

と手眞似にて長官に耳の穴を塞ぐやう頼む、長官首を振る、娘金包を長官の袂に入れる。長官點頭す。娘は紅繪賣に耳語す。紅繪賣暫くにして顧み顧み去る。耳の垢取長官業を終る。

禪門　何程でおざるの。

長官　はい、片耳が五文づつ。

禪門　それ十文。

と錢を手の片へ、一枚づつ落として與ふ。

長官　有難うおざる。

長官「耳の垢取らう」と呼ばはりつつ去る。奴、煙管を擔いで來り、禪門を見て、

奴　ねい、ちくとばかり物を問ひますべい、うらが主人だが、眼のぱつと

開いて、鼻骨のかつぴしやげたが通らなかつたかの。

禪門　はい、左樣のお侍さまは見受けませなんだ。

奴　はての、もう來べい筈だが、では、もう一と走り迎ひに參らう。

奴去る。娘は紅繪賣の方を見送つたるままなり。

禪門　こりやお蝶よ、さ、參りませう、これ何をして居る、さ、早う歸らう。

娘　爺さま、も一度觀音さまへ參りませう。

禪門　なんぢや、また行く。

娘　お願ひ申したいことがある。

禪門　願ひ殘し！　やれ、それは大變ぢや、總じて神佛へ祈誓をかけて、願ひ殘しがあつては、何の益にも立たぬ、ぢやによつて、今度觀音さまへお參りを致したら……

と云ひ掛けるうちに、娘は既に行き去る、禪門それとも知らず、

禪門　よう拜んで……

と云ひ娘のあらぬを見て、

あれ、もう行き居る。

と追驅けて行く。あなたより馬士小唄をそそりながら、侍を乘せて來る。

馬士（唄）あとさアきは覺えなんだが中のところは忘れた。さアこそあるべけれと書いて貰ふたが、それさへ出口へ置いて來た。

あとより、以前の奴。

奴　やんれ、やんれ。

と囃して出る。

侍　あいた、あいた。

馬士　どうぞ、なされましたかの。

侍　おのれ、どうも、こうもあらうか、これ見い、さまに見せやう大事の脛つ節を、馬の蚤めにせられて、赤うなつたわ。

奴　いかにも身共主人が、お脛のあたりが、牡丹のやうに赤う腫れあがつたわ。

このとき「猫の蚤取らう」と呼ばはりつつ、風呂敷を肩にかけたる、猫の蚤取り男出づ。

蚤取　猫の蚤取らう

侍　幸ひぢや、これ奴、この馬の蚤を彼奴に取らさう。

奴　いかさま、御分別、さうしますべい。

と奴は蚤取に、

こりや、蚤取どの、この馬のを取つて貰ふべい。

蚤取　馬のは取りませぬ。

奴　なんで取らぬ。

蚤取　一番に湯がござりませぬ、獣物の蚤を取りまするには第一に湯をかけ、蚤どもが頭に這上るのを、この風呂敷に引包んで取りまするが、この馬には掛ける風呂敷からがござりませぬ。

奴　いかにもさうぢや。

侍　取れぬとあらば詮がない、あいたいやまた食ひ居つた。

馬士　はれ、お馬に乘つたら我慢しめさろ。

侍　いかにも蚤の詮議は後、早うかのさまに面を見せう、急げ、急げ。

馬士　はい、はい。

侍の一行去る。蚤取もまた「猫の蚤取らう」と呼ばはりつつ去る。この中に、山吹大盡先へ、俳優若衆方出來島平八を連れ、あ

とより取卷の道外方市の屋三五七、末社の鈍六來かかりて、松の鉢木の前を過ぎ、立留まりて容子を見て、そのままに立去らんとす。

岸　世界には本大盡も無いと見え、この松を根曳にせうといふ人もない、隅田川には水が澤山なれど、江戸には粋が無いさうな。

これを聞きて出來島平八立止まり、山吹大盡に會釋して、かの紙子の傍へ來り、

平八　まうし其處なお方、この松は私が申請けたうござりまする。

岸　隨分と高直でえすぞ。

平八　何ほどなりとも是非に申受けませう。

岸　心地のよいことを仰有る、今朝から參り下向も多くあれど、誰れ氣をつけて、この鉢木を所望しかける人もないに、お心を留められたは、こなた一人、この堺町の芝居にては、ついに見ぬ太夫殿ぢやが、あつばれ末は一枚看板にもならう人ぢや。

平八　そして何程でござりまする。

三五七　平八さま、滅多なことを仰有られると、それ足許を付け込まれまするぞ

岸　ははは、さうね、だれ、こみは致すまい、松を身請とあるからは、まづ千兩とも申さうなれど、望み人が美しいお若衆さま、我等も古へ世にありしときは、衆道柄も握つたものの果てでえす、はて十兩にして進ぜう。

三五七　そりやこそ吹いたぞ。

鐘六　いやあ、もしお大盡さま、あの松を十兩だと申しまする。

山吹　何んぢや、あの松が十兩ぢや、は、は、は、年の市へ行きやれ、こんな小

松は一文に二本づつ賣つたもの、むははは。これ平八何にせう洒落ぞ、ひらさら無用にしやれさ。

三五七　いかさまこんな松は、何處の塵塚を探したとて、三本や五本は突込んでありさうな、さあ參らうではござりませぬか。

と勸むれど耳にも入れず、平八は山吹大盡に、

平八　まうし大盡さま、私が思ひ入れあれば、あの松の植木買うて下さりませ。

山吹　何んぢや、眞實買はうと云ふのか。

平八　はい、當分代物をおひかへなされて下さりませ。

三五七　やあ。

山吹　やめにしやれ。

平八　では、あの金子をお扣へは下さりませぬか。

山吹　いや、金を取換へるを迷惑さに云ふては無い、世間にも稀なといふ草木ならば、なるほど十兩が二十兩でも、取替へて求めさせうが、柴の中にも束ねてありさうなあの松に、十兩とは滅法界、さりとは止めにしめさるがよい。

平八　私はあの松に縛られたやうな心地がして、何うやら足が進みませぬ。

山吹　はて詰らぬことを、希代のものに魅られたものだ。

と云ふを聞きたる岸大盡、立上りて編笠のまゝにて、山吹大盡の顏を眺め、

岸　形は衣裳にて、大盡らしく化かして居るが、お心の中は氣の毒な、猪牙船を漕ぐ男よりもあさましい、近頃至らぬ御心底、はゝ、は。

三五七　いや、こな奴が、何處の蓮つ葉かは知らねども、大盡さまに無禮なこ

とを拔かしをる、抑もその松がどうして、其樣に高直なのぢや。

岸　知るまいよ、おう、その眼では得分るまい。

編笠を脫ぎて、

抑もこの松は、仲之町に隱れもない、住の江と申す太夫、金が敵の世の中とて、飽かぬ我等に引別れ、請出されて西國へ行かるる時になれ、我れと思うて見てくれよと、形見に殘し置いたるこの木、假初ながら、千兩といふ價打のある太夫が、魂を籠めたる松、仔細あつて十兩ばかり、金子の入ることが出來たによつて、命にもかへぬほどに思ふのぢやが、賣つて遣るわ、近頃での安いものと、殘り多く思ふのに、柴の中にもこんな松があるとは、勿體ない雜言。

鈍　六　これは驚き山の、柿の木、椎の木。十兩の松の木。

三五七　いや顏に似合はぬ荒事の白だ。

岸　その荒事呼ばはり止めてくれ、我等强いものなれば、聞いて居ぬ所なれど昔から喧嘩がましい事が嫌ひゆゑ堪忍する、金銀澤山に遣うて遊ばるるであらうが、茶屋も太鼓も根つから悅ばぬやうな遣ひやうであらう、近頃笑止ぢや。なうお若衆、折角のお望み、價なしにも進ぜたけれど、いまも云ふ通りの譯ゆゑ、殘念ながら無代は進ぜぬ。これ大盡、これまでに何ほど蒔かれたかは知らぬが、まだ未熟だぞ、まあ二三千兩蒔棄てて、本粹にならせられい、はは、はは。

山吹　おのれが、

と詰寄るに、三五七、鈍六、まあまあと止める。

山吹　はて、よいわ。

と岸に向ひ、

風の神見るやうな、素紙子のざまをして、いま廓中にて山吹と囃され

る男に、緩怠なる過言、忝けなくも、汝が口に掛けた住の江太夫はな、西國者が請けたと廓にて沙汰させ、有樣はこの鼻が摑んで下屋敷へ抱へ置いた、しやら臭い、己れの如き、紙子風情が、住の江に馴染んでなどと、片腹痛い穿鑿、大かたな潛上ぬかせ。

岸　はて紙子紙子と賤しめそ。その住の江の松に掛つて破れた紙子、おろして云ふが憎さに、昔の名を顯はして聞かそ。仲之町に名を殘した、岸といふ大盡の果、金銀はいつも有るもののやうに思うて、不斷に遣ひ捨て、今のこの身になつた、若いものの異見の種に、身が今の姿を見せて置きたい。

山吹　なに、聞き及うだ岸といふ大盡はそなたか。

岸　耻かしながら、その岸でゑすわ。

山吹　思ひも寄らぬ御對面ぢや。これ鈍六。

鈍六　はあ、お前に。

山吹大盡、鈍六の耳許へ口差よせて呼く。

鈍六　畏まつて候。

山吹　隨分急げ。

鈍六　はあ。

と鈍六は走り去る。

山吹　いやなう岸どの、その住の江を引拔いて、五體は我物にしたなれど、なるほど魂は他所へ通ふやら、請出したその日から、氣拔けになつて埒が明かぬ、廓で名うての發明は微塵も失せてしまうたのは、ほう、その松に魂を寄せた所が實正な。

三五七　こりやほんに歌舞伎ものぢや、なう平八さま。

平八　どうやら氣味の惡いやうな。

岸　さては西國者が受けたといふは嘘にて、實はそちが手に入つたか、いかにも氣拔にならう筈ぢや、魂松に止どまつたれば、轉寢の枕元に現はれて、毎日毎夜の私語、面白い時、悲しいとき、それはそれは、言葉にも盡されぬ仕合。

山　吹　果報者め、身に鼻を明かさせて、咎めてのない魂との語合、こりやいかにも新手ぢや、したが揚代の算用無しに、太夫を呼ばれる德用の松、なんでそれを拂ひものにはせらるるのぢや。

岸　されば、身には何より大事の松、我等この儘にて相果てたら、情ある人の計ひにて、その亡骸は山谷堤の土中に埋め、印にはこの松を立てて貰ひたいと、一筆の書置を、首に振けて居た程なれど、以前住の江が使うた禿、この五月の節句には、祝儀の初會、默つて居ては姉女郎の身の面目、小袖代の十兩も遣りたいと、つひ一昨日の夜のこと、しみじみと云ふたをな、よしよし氣遣するな、どうなりと、もしようと、夢心に受合ふたによつて、その金の工面に、折角の形見を賣る氣にもなつたのぢや。

山　吹　したり、大盡、よい氣性な。これ平八、さあ十兩の金はずむぞ、取替へずと花にくりよ、その松を申受けや。

平　八　と紙入より金を出して平八に與ふ。

平　八　忝けなう存じまする、さあ岸さまとやら、その松こちへ下さいませ。

と立寄るを、山吹大盡は止どめ、

山　吹　待ちやれ、その松の由來、よもや知りをるまいに、どうしてさまでに思ひ入れたぞ、執心のほどが聞きたいな。

平　八　はい、御存知の通り、まだ御馴染のうすい御當地のこと、どうがなして出世を致したいと、清水とは同一體觀音さまへ日參の夜のつかれ、

私の髪の髷めに、小松が生ひ出たと、歴歴と昨夜の夢、けふもお頼みに、
参つた下向道に、見當りました木振枝振、それて所望を致しました。
三五七　やんら目出た、松は元より太夫の名、こりや京下りの平八様、愈よ太
夫になるべき吉瑞、おめでたい。
折から以前の鈍六、垂を下したる駕籠を舁かせて來る。大盡
見るより、

山吹　鈍六、的は、

鈍六　はい、お連れ申しました。

山吹　なう岸どの、いかに好いた女ぢやとて、無理に添うてからが面白か
らぬこと、とかくは足袋穿いて、足の裏の痒いところを掻くやうに、思
ふ處へ屆かぬものは、は、は、身に取つて要らぬ鉢木あり、土の合ふた此
方へ進ぜう。

自ら駕籠の垂を掲ぐ、中より轉がるやうに住の江驅け出で
て、

住江　や、岸さまか。

岸　と取縋る。
太夫か、久しう逢はなんだ。

住江　あれ、年中わしは逢うて居るに。

岸　逢うたと云へば、逢うたやうな氣もするが、ありや夢の中であろ。

住江　夢ぢやとて、現ぢやとて、互の心と心とは、不斷に逢うて居たがなあ。

山吹　置きや、おきや、さあさあ痴話は後でのこと、島臺はこの鉢木、謡、相生
の松、風、颯、颯の聲ぞ樂しき、天晴れ似合の仲人振りぢやろ、は、は、は。皆も
一つ締めてくれい。
大盡先へ立つて、

山　吹　よい、よい、よいや、めでたい。

（幕）

戀の洞

（場）

上　城内の庭

下　山中の洞

（時）

室町時代末の初めつかた

（人）

三田太郎綱彦（二俣尾城主）

奥方七代

老女岩田

侍女澤井

家臣淀瀬源五

阿閣利景雲（澤井の叔父）
山伏四人
下男平六

上　城内の庭

老いたる柳の下なる庭中の亭、このごろの旱天續きに、覓の樋涸れたり、蟬の聲池には蓮の花輪小さく葉も半は萎れたり。亭中には卓上一柱の香を焚く。相對せる男女男は當城の主三田太郎綱彥、女は城中一の美人、侍女の澤井、殿の手を握れるは、鐺もて指に立ちたる刺を拔かんとするなり。

澤井　殿様、さうお動かしなされましては、鐺の歯が食べませぬ。

太郎　不器用なことの。

澤井　いえ、さうお動き遊ばされては誰れにも拔けう道理がござりませぬ。

太郎　拔けぬかの、いや、有様は拔きたう無いのぢや。

澤井　あの刺を！

太郎　おう、拔けねばこそ、天下晴れていつまでも、おことに指を弄らせて置かるるのぢや。

澤井　おほほほ、なう聞かしやりませ、あの……後と云ふものは、奥様のお顔が、何とやら恐ろしうて、御用が濟むと匆匆に、なるべくは御前を、遠退いておりまする。

太郎　いや、それは宜しからじ、ただ何處までも以前のやうに、身を振舞は

ぬは露顯のもとぞ。

澤井　さりとは無雜としたことを！　嫁い女が何として、そのやうにして居られませう。

太郎　刺はまだか！

澤井　あれ、ほんに！

太郎（手を引きて）もうよいわ。

澤井　でも、まだ拔けいでぢやに。

太郎　はて大事ない、其方を嚇さうとて、身に通つた刺、思へばそちの心地がするに。

澤井　はれ戯謔！　拔かねば後で痛みまする、さあお手をお出しなされませ。

と太郎の手を取る、燃ゆるがごとき互の目は輝き合ひぬ。このとき老女岩田は、奥の方より來りしが、亭のさまを伺ひ見て、忍び足して去る。それと知らぬ男女は、

太郎　拔きやんな、そちのやうな辱嫋い刺ぢや、身に秘めて大事にせう。

澤井　さ、も、そのやうな事ばかり、確りとなされませ。

澤井堅く太郎の手を握んで、漸く刺を拔き取る、二人はまた相見て嫣然。

太郎　おうおう、何時ぞや其方に遣つた香箱な、ありや大切に秘め置けよ。

澤井　大切な段か、朝夕身體を放しませぬ。

と香箱を出して示す。

太郎　ふう。

とまた面を見合して笑む。澤井は耻づかし氣に、

澤井　あの……この事をな、叔父者まで密と申しては、惡うおざりませう

か。

太郎　なに、そちの叔父へ、あの驗者の阿闍利へか。

澤井　はい。

太郎　とはまた何故の理由あつて？

澤井　御奉公にあがる折、叔父者の申しまするには、必ず必ず大事に勉めい、若い者の身を誤るは、兎角に……戀の……道、もし身に換へてもと、思ふ人があつたならば、誰れよりも一に我等に云へ、好からう人なら我等も共に、口添しても肝入ろと、くれぐれとの物語り。

太郎　それで、打明けうと申すかの。

澤井　なんの、耻かしい……

太郎　さらば何故に、そのやうづれの事を……

澤井　さあ、その時叔父者に連れられて、あの乳の洞の暗がりにて、恐ろしい誓文立てを、今も思へば身毛も彌堅つ、それからしては目の前に、洞のさまが閃ついて、胸の騷ぎが止みませねば……

太郎　心弱いことを申すな、輙うは他人に、語られぬ密かごと、一人に漏らせば二人の譬何處までも包むが好いぞ。

澤井　あい。

このとき、以前の岩田を先に、奥方七代の前、早足にて來りしが、岩田の亭を指ざすに、頷いたる奥方は、物をも云はず亭中へつと入る、澤井は慌てて殿の傍を離れて蹲る。

七代　澤井。

澤井　はあ。

七代　何故に、殿のお傍に居やらぬのぢや。

澤井　はい。

七代　妾が來たとて、なぜうにさうは遠退くのぢや、お傍に居やらぬか、え、なぜに遠慮をなさるのぢや。

七代は澤井の肩を握んで引寄せんとなす。

澤井　お許されて……

七代　許されて？　許されてとは何！　おうそうか、妾の殿を寢取りやつたな。

澤井を突き倒す。

澤井　あれ。

思ひ寄らぬ此場のさまに當惑の眉を顰めたる太郎綱彦は、七代の腕を捕らへ、

太郎　端たない、何をするぞ。

押分ける。七代氣色ばみて、なほも澤井に立ちかかるを、後より抱き留む。

七代　口惜しい、侍女づれに見換えられ……

太郎　見換えられ……とは……何事。

七代　何處までも知らいでとか、淺猿しや御心人もあらうに手許に使ふ、侍女づれと語らせらるとは……

太郎　おう、さては澤井との間を疑ふのか。

七代　疑ふ段か、人目の遠い亭の中、ここには何をしておざつた。

太郎　あの、澤井はな。

七代　おう、澤井は、

澤井　お手の刺を、

と鏑を袂より出して示す。

太郎　さうぢや、身の手に刺さつた刺を、抜かせて居つたのぢや。

七代　刺ぢや、ああ刺であろ、あらでもの仇情の、その刺であらうなう。

太郎　なに、

七代　その刺が殿様、お身の胸に深う食ひ入つてぢや。

と殿に縋り付きて泣く、綱彦は振り拂ひ、

太郎　端たなし、奥。まさなきことに腹を惡くし、我れに耻辱を與へやうとか。

柳の蔭に潜み居たる岩田は立出て、

岩田　申し殿様、澤井をこれへお召なのは、ただ刺だけの御用でおざりましたか。

太郎　差出た奴、控えて居れ。

岩田　否否、其塲のさまを奥様へ、お知らせ申したのはこの岩田、何程刺さつた刺かは知らね、餘りな隙取りやう。

太郎　云ふな岩田、乙女の操は、汚れぬ英房、好うで惡名を立つる奇怪、隙取つたとて何の不思議、重ねて云はば容赦せぬぞ。

奥方は殿を押止め、

七代　侍たせませ、殿。（岩田に向ひ）なう岩田、これほど迄に宣せらるる上は、よも然ることは無いであろ。

岩田　奥さま、そのお心好しが過ごさせらるるで、大事の殿を取られまするわ。

太郎　またしても雑言。

と立ちかかるを、

七代　岩田が無禮も、みな妾を思ふからのこと、何とぞお許し下さりませ。

太郎　以後を謹しめ。

岩田　はあ。

岩田は平伏す。殿は澤井に向ひ、

太郎　あちへ行け。

澤井　はい。

と會釋して去る後影を、嫉しと奥方は見送りぬ。

太郎　これへ掛けい。

と一同坐す。折からまたも蟬の聲騒がしし。かかる中に、遠く：近く：騒騒しき鐘鼓の響人のどよみ、一同は何やらむと訝るところへ、家臣淀瀬源五馳せ來りて、

源五　殿様、景雲阿闍利の伺候致されまいた。

太郎　なに、景雲阿闍利？　左様か、さるにても、表の方の騒がしいは何事ぢや。

源五　はつ、はやお耳に入りまいたか、あれこそ百姓どもが、雨を求むる鬨の聲。

太郎　此程よりの早り續き、我れ人ともに一雨の欲ししと天に祈れども、その驗とてあらざる天變大聲あげての雨乞が、八大龍王感應あるとか。

源五　させる道理は存じませぬが、御所をさして入り來る阿闍利の影を見るより口口に、降らせい、降らせい、祈つてたもれと、袖を控え、法衣に纏はり、大地に平伏し頭を摩りつけて、祈誓をかけて居りまする。

太郎　さらば此方へ案内申せ。

源五　あの、お庭へ、

太郎　おう、家の内は熱うて爲らぬほどに。

源五　はつ。

源五は出で行く。どよめく聲なほも聞こゆ。太郎は立つて香

を焚く

七代　また、聲が致しまする。

太郎　げに、さも、さよの、不斷の水に苦蒸したる、筧の樋の色さへも、赤みを帶びて露欲し氣なり、さぞ、田の色も變つたらうな。

七代　水の切れたるお庭の池に、いつもの蓮は咲いても、それはただ時節の分疏、思ひむすぼる花の色の、寂しうは見えまする。

岩田　水が無くては……なう奥樣、いとしと思ふお胸の水が涸れまするとな、いかな花も萎れまするげな。

あなたより淀瀬源五は、景雲阿闍利を伴ひて入り來る。

太郎　おう、阿闍利には、よくこそ在せられた。

景雲　御城主には御機嫌よう、大慶に存じまする。

太郎　どうあらう、雨は降るまいかの。

景雲　その事に付き、面伏ながら、參上致しておざりまするぢや。

太郎　阿闍利には兼日より、請雨の法を修せらるると承り及うだが。

景雲　丹誠をさをさ惰りなけれど、いまだ驗のなき不覺さ、珠數を引切り。壇を崩し、この後祈誓を致すまじと、思ひ立ちぬる修法の亂れ、雨を望まば里の子が、無心の語を聞くべしと、まどろむ間の夢の占方。

太郎　そはまた如何なる占が出てたぞ。

景雲　僞らず！　飾らず！　己れと流れ出づる童謠こそ無心の語か、聞けば「それ、人の世に咲く花たてつれ、しとと濡れうよ、涙の露に」と、唄ひまするわ。

太郎　してその判はな？

景雲　人の世とは人間、人間の花とは是れ美女、あれ御覽ぜ泥中より、蓮は赤白の花の匂一點の汚れに染まず、されば佛菩薩の寶座とも申すな

れ濁に染まぬ美女を伴とし、祈らば「しとと露に濕れう」――雨が降らうと解しまいた。

太郎　行德いみじき御身が解説、疑ふところも無き上に、さまでは難うあらぬこと、さほどのことにて雨が降らば、こりや早速に修法してたもれ。

景雲　畏りまいた。してその女は、

太郎　さあ誰れよからう、それともに阿闍利には、心あたりが在すかの。

景雲　經卷佛像の詮議なら知らず、世を捨てものの我等に、妍き女人の沙汰は……な。

太郎　いかさま、お知りやらぬが尤も。

太郎思案す。傍より、

岩田　なう、阿闍利さま、城中一の美人とあつては、まづ奥方でおはさるるがの。

景雲　いかで祈りの場へ奥方を……祈りの本尊は孔雀明王、灼然なる善神なり、主ある御身の、いかで壇上へ……、勿體なや、冥罰の程が恐ろしい。

岩田　それでは男を知つた女が、素知らぬさまにてその壇上へ、

景雲　登らば後世は焦熱地獄、なほ現當の御罰には、即時に命を失はむ。

岩田　あの、即時に命を……こりや、ま、大事の祈りぢやなあ。

太郎　疎かならぬ祈りの場、もしその雨の降ることが、一刻遲くば一刻だけ、農人共の難儀を増すのぢや。

七代　仰せの通り片時も早う、祈りの者とやらを擇み出さねばなりますまいなう。

岩田　申し奥様、その祈りの女には、澤井が宜しうござりませう。

七代　なに、澤井を？

岩田　澤井に限りまする、誰れが見ても美しいあの澤井、なう源五どの、女が女を見るとは違ひ、男の目からあの澤井は、どうやうに見えまするな。

源五　されば、御領分の中にも、二人とない器量と見受けまする。

岩田　おう、おう、誰が見る目も同じこと、それに澤井と阿闍利樣とは、肉親の叔父御姪御、修法の式も餘の者より、呑込がよささうな。

源五　いかにも阿闍利の坊の姪御でおざつたな。

岩田　どれ私が呼うで參りませう。

七代　こりや待ちや岩田、外ならぬ大事の祈り、もしや澤井の身上に、どう支へがあらうも知れぬ、よう得心をさせてのことに。

岩田　はて、不義は法度の御城の中、なあ奥樣、不義は嚴しいお城の中、なんの支へがありませう。

源五　御領内の民百性が、難義を反へす大事の役目、我等でよくば差出てもの勉めたうおざりまする。

景雲　ほう、さては澤井が、それほどまでに美くしうおざりまするか、ははは、あらくれたる山伏共の、中に幽けく生ひたる小草、物心つくそれよりは、御城内への奉公、殿樣：奥樣のお慈みにて、人並には育ちまいたわ。

太郎　なう阿闍利、祈りと申すは、心にかかる、諸の念を捨てて、丹誠を籠むるが、定、肉親の因ある、澤井と相の修法にては、な！

景雲　いやいや、一心籠めてかかるからは、親子兄弟たりとも、何の障碍のありうべき。

太郎　さあれど、何やら懸念の祈り。

七代　殿、澤井を遣らしやりませ、眉目の好いのは誰れも知る、祈禱のこと

は、阿闍利が承知、さうぢや、澤井を遣らしやりませ。

太郎　はて控えい。

七代　いや殿、あの澤井を、遣らしやりませぬか。

岩田　申し殿様、あの男を知らぬ潔白な、澤井に似合ふた役、あの者をお遣はしなされませ。

太郎　おう、もしも澤井を遣はして、降らぬときには何とやらむ、彼れが身上を、疑ふやうになるが不便ぢや。

景雲　いや、有樣は某も、澤井と一緒に祈りたい、この功名は姪めにさせたうおざりまする。

太郎　雨の祈りが、何とて女の手柄あらう、もし降らぬときには、反りて後日の障りとならうに。

景雲　なに降らぬとき！　はて、それが何の疑ひ、景雲が一期の祈禱、龍神の懷中よりなりと、必ず雨を奪つて見せうず。

太郎　澤井と祈つて悔ひたまふな。

景雲　はは、我が法力の盡きたら知らず、誠を天地の神明佛陀に、捧げまうせし阿闍利景雲、降らねば驗者の珠數を切らう。

太郎　さまでに……宣ふか。

七代　殿、かくまで阿闍利が仰せあつても、まだ澤井をば遣はされませぬか。

太郎　むむ。

岩田　なんの、御不承知がおざられませう、おう、おう、乙女の操は、汚れぬ花房、その美くしい清い花を、雨の祈りに遣らしやりまするわ。

太郎　默れ！

七代　御承知なきは、何とやら、さては殿、あの澤井の身體には、祈りの出來

ぬ譯がおぢやるな！

太郎　や。

七代　お遣はしのない時は、胸に小霧が沸き立ちかへろ。

太郎　澤井遣らう。

岩田　あのお遣はしなされまするか。

景雲　姪に仰せ付け下されまするか。

太郎　おう。

日足傾きて、蟬の聲激しく聞こゆ。

景雲　はや夕陽の影長し、暮れぬうち、お暇申しまする。

太郎　暫く待たせられい、かの澤井にも祈りの事ども、申し聞かして得心せさせう

景雲　いや、それは憚りあり、主命と申し、または御領地の人人のため、その

御配慮は要らぬことぢや。

太郎　類なき祈り、ただの奉公とは違ふこと、推付にもなるまい。

景雲　さらば某が申聞けませう。

太郎　よきやうに頼みまうす。

景雲　さらば。

と立上る。

太郎　源五。

源五　はつ。

太郎　阿闍利に御案内を。

源五　畏りまいた。

源五は景雲に向ひ、

源五　さあ、こうおざりませ。

景雲　はあ。

太郎　身も共に參らうぞ。

殿は先へ、法師は中に、源五は供して、あなたへと去る。あとに岩田は奥方に向ひ、

岩田　あれ、澤井の事と云へばあの通りぢや、しかし奥樣面白うなりまいたなあ。

七代　面白うはない大事の祈りぢや、領分の百性どもが、難義を救ふ澤井が大役妾も蔭にて祈つておまさう。

岩田　やれ、貴女は、まだ其樣づれのことを仰有るか、奥樣、あの澤井の祈りが、利かうずものと思し召すか。

七代　一心籠めての阿闍利が修法、大底な雨なら降るであろ。

岩田　おほほほほ、降る段か、降らぬ段か、なう奥樣、あの澤井めは、確かに殿樣のお手が付いてておぢやりまするわ。

七代　またしてもその樣なこと、先にもあれほど、事譯を仰有つたてはおりないか。

岩田　その辯疏を、なさればなさるほど、怪しいとはおぼさぬか、なう奥樣、三日と限つた雨の祈り、祈り手の澤井の身體に、男の汚れのある證據、屹度雨は降らぬがな。

七代　疎ましいこと云やる、降つてくれねば我人の難義となる甘露の雨、無理しても降らせたいわなう。

岩田　おほほ、まだ其樣な！　降らぬが定の雨祈り、さうぢや滿願の三日目には、あの乳の洞へ參詣して、御罰に顔へる澤井の顔を、穴の明くほど見詰めておまそ。

七代　なに云やる、ああ、ああ、雨の降れよかし、どうやら殘る疑ひの、黑雲は

雨と變はれ、涼しい心地の滿ち渡らうに。
空は次第に晦くなり行く。

岩田　おう、大層暮れて參りました、いざお居間へ參られませ、私は澤井の部屋へ參り、明日のことを苦に病んで、人の許さぬ戀する面の刻まれて行く晦い影を、面白う詠めましよ。

七代　云ひ付くるは然ることながら、其方も共に雨の降るやう、心に掛けて祈るがよいぞや。

七代は岩田を連れて館のうちへ入る。空全く暮れて、細き月赤赤と照る。奥の方より、源五に導かれたる景雲出づ、あとより澤井追ひ絶りて、

澤井　叔父御さま。

景雲　何ぢやの。

澤井源五に向ひ、

澤井　まうし源五さま、少しのうち、此處をお外しなされて下さりませ。

源五　心得た、さらば程へてお迎ひに參らう。

景雲　いやいや、案内知つたるお庭のうち、その御斟酌には及び申さぬ。

源五　左樣でおざるか、さらば一足先きへ參りまするぞ。

源五去る。

景雲　姪の御よ、何ぞ用かの。

澤井　叔父御さま、あの雨の祈りの役は、お許しなされて下さりませ。

景雲　何んぢや、今の先きに承引した大事の役、時も立たぬうちに辭退せうとは何ういふものぢや。

澤井　でも恐ろしうもざります。

景雲　ははは、心に疚ましきことなければ、荒人神の御前たりとも、恐ろし

いことはないわ。

澤井　なう、叔父御さま、どうぞ御免のあるやうに……

景雲　叔父の心が分らぬか、願ふても無い大事の役目、進んで勤めやうともせで……これ好う聞けいよ、そも此度の祈りの相手、清淨なる女人に物忌させ、信心籠めて事を爲せば、三日のうちには容易う降る雨。その相手欲しいとて、三田殿まで申出たのも、なう、其方に手柄をさせたいばかりぢや、また、な、器量といひ心立てといひ、欲目もあらうが、なう、並に勝れた其方の役ぢやに。

澤井　だが私は、そのやうに美しうあらぬがの。

景雲　いや、たとへ器量は二の町でも、その戀知らぬ清淨なのが何よりぢや、世を捨てた叔父ながら、咲く花はやはり美くしう咲かせたい、懷かしう思ふ人でも出來たなら、戀せぬうちに打明けいと、なう、洞の神へ誓はせたがなう

澤井　その誓事を忘れませぬに……

景雲　忘れはすまい、はは、それ故其方に限ると云ふのぢや。さあ明日は早いぞ、休め、休め、我等も早う歸るであろ。

景雲立上がる、澤井のいまだ座を起たざるに、

景雲　どうしたものぢや、さまでに祈りが恐ろしいか、叔父の力では降らぬと思ふてかの、ははは、そちも叔父の行力を疑ふのか。

澤井　いえ、いえ、なんの。

景雲　さなくばなぜに快う、參らうとは申さぬのぢや。

澤井　あいでも氣にかかる……

景雲　何の氣にかかる事があろ何事も叔父を力にせい。さらば明日は山寺で、祈りの相手に見參申さう。

景雲去る、澤井は暫く思案に暮れしが、やがて力無く歸らんとす、少し前より、池の汀に忍び居たる太郎綱彥、扇子をはたはたと鳴らす。

太郎　澤井

澤井　(駈けよりて)殿さま。

と縋る。

太郎　明日の祈りが恐ろしいか。

澤井は太郎の手を、わが胸のあたりに推當てて、

澤井　ええ、この動悸が聞こえませぬか、降らねば叔父の名の崩れ、またそれよりは恐ろしい、殿樣との仲もな。

太郎　はて、二人で云はねば世が崩れやうと、誰れにも知れぬ戀の秘めごと。

澤井　いやいや、降らねば屹度名に立つ。

太郎　立たうと儘ぢや。

蟬けたたましく鳴く、二人は思はず放れて、面を見合はせ、

澤井　殿さま。

太郎　澤井。

殿は臂を延ばして、澤井の腕を抑ふ。

(幕)

下　山中の洞

乳の洞の內部、石灰岩は、上より乳狀を爲して下垂し、下は鐘

狀をなしてこれを受けたり、或は離れて犬牙のごとく、或は密着して柱狀を爲す。ここは洞中の最も廣き所ながら、高低參差一樣ならず、岩は巨浪のごとく起伏して、その間に深き穴二つあり。洞口を扉にて塞ぎたれば、中には太陽の光を漏らさず。點滴の音幽かに、冷涼の氣は肌に徹す、横穴めきたる所へ、神を招じて、その傍に、白き長絹を着たる澤井、幣束をもちて坐せしめられ、少しく下りて景雲阿闍利、黑き篠懸、黑き大口、外に青き同じ姿の山伏二人、黄ろきも同じく二人、師の景雲を中に取籠め、靜かに勤行のさま、かかる所へ、一道の强き光と共に、入り來る下男平六、

平六　はい、もう、やんがて己刻になりやする。

景雲（珠數を一と振りふりて）おう平六、表はどんな氣色ぢやの。

平六　はい、今日滿願でおぢやるに依つて、今朝から首の骨を痛くして、空合を眺めて居りまするが、何處の方角も空つ空で、日和雲ひとつござらねえ。

景雲　ふう、滿願の時も近きに、まだ驗が無いさうな。

平六　阿闍利樣のお祈りなら、今まで終ぞ外れた事は無えだにの。

景雲　愈じて我等祈誓を懸け、一度も驗の無きことなし、まいてや孔雀明王の修法をなし、八大龍王諸天善神を驚かし奉るに、など感應のおはさぬにや。

山伏どもを顧み、

何にせい、なほ懸命に祈念を爲さむ（平六に）其方は外へ出い。

平六　はい、雲が出たら申しあげべい。

男は外へ出づ。

景雲　いでや、秘密の祈禱を爲さむ。

景雲は立ちて珠數を揉み、前の壇上に護摩を焚き、やがて一葉の紙を出して火に翳し、

景雲　謹請、謹請、南無や東方西方南方北方、八大龍王恆砂の眷屬、哀愍納受せしめたまへ。

と、彼紙を火中に入れて燃さんとすれど、紙に火感らず、景雲は訝かしきさまにて、なほ火勢を強くして差入れたれども、護摩の煙のみ盛んにして、紙は依然として燃ゑず。景雲苛立ちて猶ほ火に翳す、山伏達は目を張りてこの奇異を見る、澤井は慄然として我身の罪を顧る。この時、外の戸開けて、以前の男、小さき火皿に油を盛りたるものへ、火を點じたるを持ち、紅の衣服を着たる、老女岩田を案内して入り來る、景雲は

屹と見て、少しく氣色を損ず。

平六　はれ、お客人が參られました。

景雲　なに、客人！　いや客人に用は無い、取次はならぬと、堅く申しで置いたでないか。

平六　だが、御領主樣の所から……

景雲　はて誰人の所よりなりとも、大切な修法の最中ぢや。

平六（獨語ちて）だから云はぬことで無い。

岩田　まうし阿闍利さま、妾がわざわざ參つたも、その御大切の御修法についての事ぢや。

景雲　なに、其方の來られたが祈禱の爲めぢやと仰有られるか。

岩田　おう、おう、何ほど阿闍利さまの、灼然の祈りでも、雨の降らぬ譯があるのでの。

景雲　降らぬ譯、感應のない譯と申さるるは、

岩田　祈禱の人に障りがある。

景雲　なに障り？

一同の山伏は互に面を見合せ、さては景雲の顏續いて澤井の方を見遣る。

岩田　阿闍利さま、障りといふのは、あれあの女、奥樣のお目を忍び、大それた殿樣との密かごと、汚れ知らぬも無いものぢや、罪の上にも罪を重ねた祈りの相連れ、これで雨が降つたなら、天道さまが嘘付きぢや。

景雲　なに、澤井が不義したはは、まだ春知らぬ芽生の姪御、雨が降らぬは、祈りの足らぬ爲めであろ。

とまた護摩木を添ふ、火勢弱し。

岩田　何一つ應はぬことなき祈りの名譽、三日の大法、三夜の秘法、それで降らぬは、なう！　さうぢや其方の相祈りの俄同心どの、お身ようもようもその身體で、その灼然な神樣の前に、ぬけぬけと居られるてなあ。

岩田は澤井の方へ詰め寄る、景雲立つて押隔て、

景雲　寄られな岩田御、それその穴は地獄の通ひ路。

岩田　え、（穴を覗き）ま下は暗がり、

景雲　陷ちさせられな、上は梵天、下は奈落、三界まで見通しのこの穴、底の深さは限り知られず。

岩田　果も無いかや。

景雲　何處までも穢れを忌む、洞の神の御前に、かしこしや、近付かせられな。

岩田　その畏い神樣の前には、恐ろしい汚れの人が居るのぢやに。

景雲　又しても汚れ呼はり。澤井、さあ云へ、身に過ちのないことを、黄鳥の

高音を張上げ、答をなしてお歸し申せ。

澤井は差俯向きて答なし。

景雲　さあ、とう云へ、云はずばこの叔父までも、そちの身上を疑ふぞ。

澤井　申しまする。

景雲　おう、早う云はれい。

澤井　澤井には……汚れなんどはありませぬ。

景雲　然うであろ。なう岩田どの、姪御が返答を聞かしやつたかの。

岩田　心の底が口の端にでもあらうことか、さなくば自分の爲した罪、浮浮とは語られぬものでなう。

景雲　目に諸の不淨を見ず、口に諸の不淨を云はず、洞の神の御前にて、など僞りを申されう。

岩田　でも正直な驗者さま、御自分の正直に引較べて、やはり人も正直と思ふてばし居られまするな。

景雲　またしても益なき疑惑、はやう城へお歸りやれ。

岩田　益無いとか、益ないとか、おう、おう益の無いこの證據、なう澤井、これを見や、この香箱が、どうしてそちの手箱の中に藏つてあるのぢや、

澤井　ああ。

岩田　この岩田が見覺えのある殿のお品、まさかにお身が、盜みする人ではなし、下されの主は誰れ。

澤井　さあ。

岩田　云へまいわいの、その主は不義の相手の殿樣ぢや、これでは降らう雨も降るまいでな。

澤井　うむ。

と悶絶して段より落つ。山伏達は立騷ぎて、澤井の方へ立寄

るを景雲は押止め、

景雲　その……香……の箱見せさせられい。

岩田　おう、見せうとも、罪ある澤井の叔父者でも、驗德高い阿闍利さま手渡さうと大事はあるまい、さあ御覽ぜ。

手箱を渡す、景雲は手に取りて、

景雲　殿の……お品か。

岩田　隱れもない、罪の證據ぢや。

景雲　うむ、さては定ぢやの。

岩田　どうやら眞實らしいことでおざりませうがの。

景雲護摩壇より以前の紙を取出して、

景雲　焚上げ奉る紙の燃えぬも理かな、紙はもとより無心の白地、炎の中にて灰と消えぬも、濁りの色に染みたさうな、

無念のさまにて香箱を投げ、以前の紙を丸めて火の傍へ捨て涙を翻して嘆く。山伏達は立ちて珠數を振り、肩のあたりを拂ふ、その音に景雲は面をあげ、

景雲　去ね！去ね！我が行法もこれまで、さ、外へ出い、不淨を厭ひし洞の中は、反りて穢れに充ち渡つた、さ、濁りに染まぬうちに、とう表へ出い、さあ出い、さあ出い。

立上りて山伏達を押遣る、山伏達は汚れを厭ふ心にて、各自己の肩上を拂ひつつ去る。景雲見送りて蹣跚きて倒る。容易ならざる氣色に恐れを懷きたる岩田は、顫へ居る平六を促がして、怖怖と此場を去る。護摩壇の火盛んに燃え上り、以前の紙も煙と散ず。景雲つと起きて、絶入りしさまの澤井を引出して、矢庭に打擲す。

景雲　己れ惡人、ようも、ようも、この叔父が、今まで積みし行法の破壞を來せし破法の女め、戒のうちにもいと重き、虛妄の咎をなど身に受けた、など祈りを障げた、不淨の身をもて、正しいとは、など僞つた、おのれの爲に雨の祈りも無益になつたわ、一刻降らねば一刻だけ、民百姓の難義を彌增す今度の祈りぢや、魔め、破旬め、なにとて斯うは巧んだぞ、さあ云へ、さあ云へ。

澤井　ああ、ああ。

景雲　いへ、さあ天魔め、羅刹女め。

澤井　ああ、私が惡うございます。

景雲　惡い！　惡いとも、そち惡いと知つて、なぜ惡いことをした。

澤井　殿さまのことを、叔父者に打明けぬのは私が惡い、したがな、あれが話されうことかいの。

景雲　むむ、叔父に話さず、ゆめ男をな思ひそと云ふた事か、措け、それはそれ、今が大事の祈禱の壇へ、不淨の身で何故に上つた、洞の神の御寶前を何故に汚した。

澤井　何處までも……殿さまに此身を任せたのは私の不念……

景雲　まだに其樣づれを云ふてか、殿樣と契つたとて、何のそれを惡う思はう、ただおのれの憎いのは、恐れ氣もなく壇上へ坐して居た――その根性が憎いのぢや。

澤井　私が壇に上らぬときは、奧樣のお疑ひが晴れぬゆゑ。

景雲　淺ましい料簡煙が立つのは火があるからぢや、疑はれたら打明けや。

澤井　ありの儘を打明けては、殿樣の御難義ぢや。

景雲　己れで造つた罪のためなら、いかなる難義があらうと儘ぢや、それ

しきに恐れる殿なら、姪の御はおませられぬわ。

澤井　……

景雲　そのやうな男づれへ心中立てて、叔父の行力、いや民百姓が渇水を思はぬとは不埒、叔父のことは措け、そちの心から多くの人人に、難澁を増させることが、悲しいとも恐ろしいとも思はぬか。

澤井　思はぬ、思ひませぬ。

景雲　なに。

澤井　ええ、思はれぬ、叔父様の行力とて、御領分の百姓達の難義とて、殿様のお身に立つた刺ほどにも思はれぬ。

景雲　う、う、戀に心が惑ふたな。

澤井　惑ひませぬ、どんな事でも殿様のお身の上には代へられぬ。

景雲　さほどに思ふ殿の筐を、など城中へは殘し置いたぞ。

澤井　恨めしい仰せ！　肌身放さぬ品ながら、手箱の中へ秘めて來たのは、一人で來たといふ、神さまへの申譯ぢや。

景雲　ええ鈍な奴、神は非禮を受けたもはぬわ、己れのやうな汚れた女が祈ればとて何の感應。

澤井　叔父者、誠で祈りが應ふものなら、叔父者の行力よりは男を思ふ女の誠、戀の力で雨は降らう。

景雲　出るさまの雜言、賤しい邪婬の執着で、祈りが利いては驗者も無益、能う聞け。此里で探したとて、相連にならうずる娘に事は缺かねども、己れに德を授けやうとて、わざと率て來た叔父の心を知らぬかやい、これほど思ふを逆さまに、耻かかせやうとの振舞は何事ぢや。

澤井は聞えぬ氣に、立上りて澗中を歩みつつ、

澤井　雨は降らう、雨は降らう。

景雲は齒を嚙んで憤り、

景雲　な……な……なんの雨……

と珠數を鳴らしつつ云ふ。澤井は落ちたる香箱を拾ひて懷中へ收め、その上より身を抱きしめ、口走るやうに、

澤井　戀の雨……誠の雨……

景雲　まだ……おのれ。

と澤井を珠數にて打つ、澤井逃げながら、まだ口走りて、「戀の雨」「誠の雨」と叫ぶ。亂打……遂に澤井は……萬事休し終る。このとき老女岩田火を持ちて入來る、憮然として立ち居る景雲に向ひ、

岩田　阿闍利さま、先程の香箱をお返し下さりませ。

景雲依然として茫乎。

岩田　もし、阿闍利さま、阿闍利さま。

景雲　おう持主の留守の間に、手箱の中を搔探り、盜み出されたあの香箱を。

岩田　證據の品ぢや、とうお返し下さりませ。

景雲は澤井の死骸を指さし、

景雲　もう返すには及ぶまい。

岩田　あれ。

と愕きて色を變じたる老女は、逃げんとするを、景雲は襟を握んで引戻し、珠數にて打つ。

岩田　なにしやる。

景雲　世は末ぢや、驗者が人を殺すのぢや。

岩田　なに、何咎も無いあの妾を……

景雲　無益しや、好んで殺生戒を破るのぢ、や。
岩田を追ひ廻す、岩田遂に穴の中へ陥る。

景雲　は、は、は。我手を待たず生きながらに、地獄へは在せられたか。
穴の中より紅き火燃出づ。

景雲　は、は、は。地獄の業の火！
澤井の死骸を見て、

景雲　ここにも一人地獄の道連があるわ、去ね、去ね、婆婆の風になほも罪科を引込むな！、誰れの目にもかからぬやうに。
と力なく澤井の死骸を他の穴中へ投入れ畢んぬ。

景雲　は、は、は。暗いことをした罪には、暗い所が應はしいわ。
と、倒るるやうに巖角に身を凭せる、穴の中より青き火燃出づ。

景雲　や、や、青き火！　青きは水の中に燃ゆる火！

景雲　雷か！　神鳴ぢや！　神鳴ぢや。
雷鳴。

景雲　と窟中より驅出ださんとして入口の扉に衝き當りて顚倒す、扉破れて電光さと差入る瀧の如き雨聲聞こゆ。

景雪　雨だ！　あ、雨だ！　雨が降る。姪御を投げた穴の中からは、青い水の火。
姪御が戀の祈りでは、あれ大空に稻妻、神鳴、南無三。
珠數を切り、狂氣の如く馳せ廻りて穴中へ投ず。入口より襲ひ來る大電光は暗き洞窟の中を照らす、沛然たる大雨は泉の如く流れ入る。暫くありて徐徐として幕下る。

（幕）

三七信孝

（場）

序幕　岐阜城天守

二幕目　長良川巴淵

大詰　内海大御堂

（時）

天正十一年四月

（人）

神戸侍從三七信孝

幸田彦右衛門

寺西喜兵衛

堀内次郎右衛門
近臣數名
小性清三郎
岡田長門守（信雄の老臣）
信雄の臣下
老僧
彦右衛門母松枝
彦右衛門妹靜緒
侍女數名

序幕　岐阜城天守

稲葉山に據れる岐阜城の天守、遠山近山を窓外に見る、上手に階子の口ある心、下手にもまたその段の口見えたり、當城の主神戸侍從三七郎信孝の君は、下手なる窓に凭りて安座し、侍女靜緒が、今樣を舞ひつつあるを見る、前に酒盃、左右に侍女、後方には、大刀持の小姓、高山清三郎、少しく離れて、近臣數名、堀内次郎右衛門の老ひたるを筆頭に、川西喜兵衛、山路玄蕃助、太田監物、古市九郎兵衛など、各酒を酌み交はせるさま。

（唄）卯の花の、垣の根に咲け、人目を引かぬほどに、華やかに、忍うて、咲きませ。

舞のなかばに、靜緒の母にして、かつては信孝に乳を上げたる、老女松枝は、慌しく出で來り、

松枝　あれ、厄體も、無や、この體たらく、靜緒、そなたどうしたものぞ、合戰最

中に、舞の沙汰でもあるまいに。

信孝　松枝よ叱るまい、某の差圖ぢやに。

松枝　さうおぢやりませうとも、なう殿、いかに娘が虚氣ぢやとて、羽柴方の大軍を、目前に寄せさせて、舞舞ふほどの、大器量は無からうず。

信孝　また媼が憎底口叩くな。

松枝　憎て口とや、あの眞を語るが憎て口とや、憎うても、可愛うても、云ふほどのことは、申すが忠義、侍女衆は何をうそ、そ、そ、御近習の侍士衆も、暫くここを退いて下され。

静緒　これ母者、いつもの癖とは申しながら、こはまたあまりの仰有りやう……

松枝　生死にかかはる大事の折節ぞ、言葉咎めなどせまいぞや。

信孝　何を慌てて參りしやらむ、（笑ひながら）　おう、皆下れ、媼が我儘を、

存分聞いて見やうずるわ。

これを聞いて、静緒を始め、一同左右に分れて階を下り去る。

松枝　殿、今の爲され方は、ありや何事におざりまする、目先に見ゆる惡運の、黒い雲に遮へられて、お心が晦んでか、捗捗しい、合戰の仕方をも爲されいで、お天守の窓の口、あの寄手の大軍を、御酒宴のお肴とは、あまりに心得過ぎたなされかた。

信孝は傍なる遠目鏡を、窓によせて、遙かに敵軍を詠めながら、

信孝　媼よ、羽柴の軍勢は、やがて呂久川を渡るであらう。

松枝　そこぞ、殿渡られたりや落城は、瞬くうちでござりませう。

信孝　は、は、は、要害嚴しい稲葉山、齋藤龍興が籠つてさへ、容易には落ちぬ

名城、父者が岐阜と名を改めて、なほさら堅固に守り立てたれば、まづ當分は持ち耐へが付かう、は、は、は。

松枝　はれ、笑止！　御思案に餘つて、世を捨てものの笑ひ聲。

信孝　世を捨てもの……　捨てものかは、はは、捨てるものもあれば、拾ふものもあらうでなあ、はは。

松枝　その拾ひ手が、恐ろしう存じられます、故上樣の天下の跡も、次第次第に御威光が、薄らぐやうに覺えまするわ。

信孝　それぢやに依つて筑前めと、弓矢を逆に並べあふのぢや。

松枝　その弓取る大將ともあらう殿が、敵を間近に押寄せさせて知らぬ顏、助勢の當もなく、軍評定もなされぬは、

信孝　よい、よい、媼軍は男子のすることぢや。

松枝　その男子には誰れがしました、武勇も勝れ、智惠も勝つた御公達には、誰が育てあげました。

信孝　えい、また媼の育て自慢、措け、措け。

松枝　いかな武略の達者でも、時の運には背かうやうがおざりませぬ、先達つてから執念くも、お勸め申しあげまする、清洲樣と和平のこと、少しも早う、取結ばせられて……

信孝　ははは、清洲の三助殿と、仲直りせいとか、それも好からう、もとより我れから隔ては付けぬど、彼人自然に遠ざかるのぢや、父君の弔ひ軍も、進んでは得せぬ人、よい談合の相手にならう、は、は、は。

松枝　まだそのやうづれのことを、……妾か申しあげまするは、ただ一端の時の用、尺蠖の跼むのも、延びるが爲めとの譬喩もあり、枉げて清洲樣を、お頼み遊ばされて……

信孝　頼むも……　頼まぬも……　彼人は兄弟、世間に兄と披露される御人

ぢや、兄上が下弟を慈しむは尋常のこと。

松枝　その御兄弟がなにとて諍ひ、お心が直りしからは、とう御和平、さらば娘にも云ひ聞かせて、早う用意を致させませう。

信孝　静緒を清洲へ下すと云ふか。

松枝　はい。

信孝　ならぬ。

松枝　何故になりませぬ。

信孝　なぜに下す？

松枝　清洲様へ参らさせずは、この和睦は調ひませぬ。

信孝　ふう。

松枝　殿にも事はよう御承知、もとあの静緒は幼いうち、彼家の御家頼と、許嫁の仲なりしが、いつの間にやら、清洲様が垣間見られ、お傍に出せいと達ての仰せ、あらうことか添ひもせぬ聟殿より、暇の狀を取つての無理強。

信孝　そのことは、某も聞き及うだ。

松枝　さ、それほどの御執着、内内のお使者も、その御内意を含んでの申し入。

信孝　無禮な奴、領地の望みともあらうことか、女をおこせなんどと……

松枝　高が女の一人や二人、他人にあらぬ兄御前へ、お遣はしなされたとて、弓矢の耻にもなりますまい。

信孝　云ふな媼、某の運を薄いと測定み、襟元について、静緒を三助殿へ渡す心な。

松枝　なに、この松枝が、襟元へ付きまするとや。

信孝　付かいでか、我れも思ひを掛けたる女、いかで清洲へ下さうぞ。

松枝　思ひを掛けたと仰せはあれど、お心に從はぬ、頑なもののあの靜緒、お傍に置くもお目觸り、一層のこと……

信孝　媼清洲へ下るを、靜緒は望むか。

松枝　ええ、淺ましいお言葉かな、まだ娘には事の由をも云ひ聞かせは致しませぬ。

信孝　その承引を致さぬ靜緒が、押付けられたら清洲へ下るか。

松枝　たとへ何と申さうとも、參らさせずばなりますまい、今度のお扱ひの素たりや娘の身の上、お主へ忠義、親へ孝行、いかなる難義も厭ひますまい。

信孝　その忠義呼ばはり措け、さほど某を思ふ汝が、などて今まで……物を思はせ、春花咲かぬ惱みの底に沈める我れを横目には過ごしたぞ。

松枝　さ、それは何處までも、娘の心にあること、御意に背くも是非はない、母の手からも活きたる戀は、胸のうちから奪ひ難し。

信孝　それを清洲へ下す心は、

松枝　はい、この涙にも御覽じあれ、心を退けた娘の身體を、この御城と、商ひごとを致しまする。

信孝　戀は娘の心にありとて、我れに物を思はせながら、清洲へ下すを承引顏は、何處までも侮り過ぎたり名のみの兄の信雄づれに、信孝を見かへるのか。

松枝　殿、難題もよい程に仰有りませ、なに一つ思ふことを、儘にさせぬことは無く、氣隨に育てた愛しい我子に、憂き涙を見せるのも、悉皆は殿の爲め。

信孝　さほどに思ふ信孝に、などて靜緒を許さぬのぢや。

松枝　娘が返答を致さねば……

信孝　三助殿へは送らうとも、この信孝には任かせぬのぢや。

信孝座を立つ。

松枝　夢、さやうな心にては……

信孝　ええ、冷めたい心ぢや。

膝を拍ちて去る。松枝は思案に暮れたる處へ、靜緒の兄、幸田彦右衛門、あなたの段を上り來り、

彦右　母者、これにかして我君は、

松枝　いまがた強いお腹立にて、ここをお立ちなされたが、

彦右　それはまた、如何なる仔細にて、

松枝　清洲樣よりお扱ひの、内内の使者と云ふが、妾の許へお出あり、表向きのことは何とも、靜緒をおこせとの申し越され、

彦右　それを殿へ申上げたでお腹立か。

松枝　常のこととは申しながら、今日はまた一倍增してのお憤怒。

彦右　むははは、こりや尤も、左樣でもおざらうか。

松枝　こりや怪、殿のおむづかり遊ばしたを、その心得顏は何事ぞ。

彦右　いかさま、御不審は尤も、また殿のお憤怒も尤も。かねてより妹に、お心あり顏ながら、外のこととは違ひ、ことには母者、別して愛しうする彼れが身の上氣隨も氣儘も通り越し、隨分兄を捕らへて、談議などもしかねぬ奴、面倒と存じたで、そのままにして過ごしましたが、御短氣の殿のこと、お額の筋も酷しく、動いたでござりませう。

松枝　とは云へ、お爲めを計つての事ぢやがな。

彦右　お爲めと覺し召さるるは御道理、いかさま人目には、味方の旗色惡しいとは御覽ずらむ、母者、容易うは申されぬことながら、四邊に人もないこの天守。

彦右衛門は立つて段の下を伺ひ、さて母に向ひ

彦　右いま二日ほどお待ちあれ、秀吉が首見ぬまでも、まづ自慢ものの金の瓢、例の馬標ぐらゐは、分捕つてお目に掛けまする。

松　枝　それはまた愛でたいこと、そのやうな事があつたら、御武運長久でおはすわなう、ほほほ。

彦　右　武邊に携はらぬ女性の御身、御存知の無いのも一定……

松　枝　彦右衛待ちや、それは誰れに申すのぢや、永の間父上に、連れ添ふた松枝ぢや、いかな最員目にも、見え透くやうな今度の軍、萬に一つも味方に勝目はありませぬ。

彦　右　何處までも、包まうとは存ぜしが、あまりなる御心痛を、そのままに見過ごすもいかが、なう母上、内内調じ合はせたる北國方の軍勢、佐久間殿を先手にて、既に今日あたりは、柳瀬まで押かけたる筈。

松　枝　おう。

彦　右　今日にもあれ筑前方、呂久川を渡るを合圖、味方は一度に切つて出で、前後を挾んで押包めば、智謀に勝れし秀吉なりとて、打取らんことは必定なり、さりながら今日の人心、いかなる素破忍者の輩、城内に潜み居らんも計られず、それまでは祕中の祕計、知つたるものは主君と某、いま母者を合せて三人。

松　枝　おう、おう、さほどの計略あるとは知らず心急くまま無禮を申しあげたるが、ようお堪へ遊ばして、口の端へも出したまはぬ、それでこそこの媼が育てあげた三七樣！

彦　右　なう、この義は決して妹へも、

松　枝　云ふ段か、この善い耳も惡い耳も、聞かせずに濟むであらうず。

彦　右　して、清洲樣の御使者は？

松枝　おう、一禮云ふて歸しましよ。

彦右　さらば、我等も同じく參らう。

と立上り、窓より外を見て、

信孝　空が曇つて參つたな、見られい母者、先手は既に、呂久川の向岸まで寄せまいた。

松枝　（喜んで聲を上げ）寄せた、寄せた、今の先きには、憂しと見えたが、聞けば反つて喜悦の寶の車を見るやうな。

彦右　これ母者、お聲を潜められい。

松枝　げに、さよの。

と二人顔を見合せ、

二人　は、ははは。

二人連れ立ちて、段を下り去る。靜かなる雨到る。ややありて、

靜緒　出て、

靜緒　男心と同じやうな、定めの無い春雨空、降るまいと思ふたに、降り出したら小止みもなう、能う休まずに降ることぢや、埒も無う軍を好く、男とは身勝手ものなあ。その軍ゆゑ城籠り、囚はれ人も同じこと、このお天守の窓口から見やるあたりは寄手の旗波、明日にも打たう攻鼓、風騷がしく聞こえたら、勝つか負くるか定めの付いて、胸にしばうつ、不斷の響は、引換に靜まらう。

と窓より四方を見遣る。信孝來り、

信孝　靜緒。

靜緒　殿樣か。

信孝　何してぢや。

靜緒　（外を指して）折からの雨に、あれ御覽あれ、遠山には雲が掛かり、近山

には霧が立つ、その霧の間からは、躑躅の花の紅色なが、覗覗と見えまする。

信孝　いかさま、美くしいと申せば、美くしいなう。

靜緒　ても、物足らぬ仰有りやう。

信孝　なに、物足らぬ？

靜緒　足りませぬはなう、美くしいと思召したら、ただ美くしいとは仰有らいで！

信孝　はは、はは、むつかしいことを云ふ人ぢや、自體我等には、躑躅の花、それほどに美くしいとは見えぬ、時になれば咲く赤い花、珍らし顏に見るは興醒め、女童と違ふ男子ぢや。

靜緒　仰せとも覺えませぬ、古來よりの名將達は、歌詠まれ、唐詩つくられ、文武二道に達せられたと申しまする。

信孝　名將はさうかも知れぬが、信孝には歌は得讀めぬ。

靜緒　ほほほ、無差とした……、天下に名高き織田の若殿、お前樣が風雅の道に、お嗜みが無いのはなあ！

信孝　何と云はうと、無いは無いのぢや。

靜緒　お氣强のお生れ付きとて、武勇に掛けては引けを取らぬ……

信孝　その一徹の信孝に、靜緒、いつまで其方は物思はする。

靜緒　……。

雨次第に强し、

信孝　兎角に物を包み得ぬ、信孝も戀なればこそ、言葉の端にほのめかすを、あはれとも思はいでか。

靜緒　……

信孝　今日こそは一口に、其方の胸を云ふて聞かせい、なうそちは、この信

孝を、性得嫌ふか？

静　緒　いいえ。

信　孝　外に思ふ男のあつてか？

静　緒　いいえ。

信　孝　さらば何とて某に、その腕をば任かさぬのぢや。

と、手を取るを、静緒は振拂ひ、

静　緒　ても殿様妾は凡べての男が嫌ひぢや。

信　孝　なに。

静　緒　殿様が男でなくば、もそつと仲好う暮らさうと、終日思ひ詫びます

る。

信　孝　なに、男が嫌ひ？

静　緒　男は嘘付きぢや。

信　孝（静緒の云ふを遮りて）信孝は嘘は付かぬぞ。

静　緒　己が勝手を計るものぢや。

信　孝　我等は他人の上を思ふに。

静　緒　男は情の薄いものぢや。

信　孝　信孝の心は深いぞ、いや、他は知らず、御身を思ふ心のほどは巴が淵

の、渦巻く水底よりも深いぞ。

静　緒　その深いのも男の心、水底に女が立つたなら、直に淺瀬が出來るで

あろ。

信　孝　戀の深みは千萬無量、悉くの領地を埋め、數の寶を沈めても、乃至、信

孝が生命なりとも、この深みには丈が立つまい。

静　緒　たとへ何であらうとも男と云ふは頼まれぬ。

信　孝　かほどに云ふても……

靜　緒　あい、一生男は持ちませぬ、鳥の翼を斷つが男、女の自由を縛るが男。

信　孝　その嫌ひといふ男に逢はせう爲めに、そちを清洲へ下さうと、今がたそちの母者が云ふたぞ。

靜　緒　靜緒にも、虫といふものがおざります、生みの親でも傀儡のやうに、思ふままには舞はされますまい。

信　孝　さらば清洲へ下るは否か？

靜　緒　このお城を離れては、何處へ行くのも、好もしう存じませぬ。

信　孝　城を離れるが嫌！　この城に何條の好き處があつてか？

靜　緒　母者が居りまする。

信　孝　おう。

靜　緒　殿樣も居られまする。

信　孝　我等が在るも、好きのうちか？

靜　緒　男でない殿樣が、世に一ち好もしい。

信　孝　男でない我等！　ああ、さりとは頑固な！　あれ見い靜緒、呂久川の彼方まで、雲霞のごとく推し寄せ來りし、羽柴勢を破らんは、いま數日のうちにあれど、そちの胸に築いたる、黑鐵の大城を、陷すべき采配は、信孝には覺束無。

靜　緒　（なかば獨語つやうに）つひの果まで、戀せぬ男は無いものか。

信　孝　（聞き咎めたるやうに）男の戀せぬは、廢れものよ。

靜　緒　それは誰れから習ふてあろ。

信　孝　生まれるときに享けて來たのが、若い血汐と流れ出すのぢや。

靜　緒　思ひ出さでは、濟まぬものか！

信　孝　戀なき男子は、墓所にあるわ。

靜　緒　ああ、戀知らぬ男があつたら、幾生までも賴まうものを、戀する時に

は男の權威も。女の前には藁履同然、ああ！ああ！

と、窓によりて太息つく、信孝これを見て

信孝　情知らぬは女にあらず。

と行き過ぎんとす。靜緒は窓に凭りたるまゝ、信孝を冷然と見て、

靜緒　かくまで男は弱いものか。

信孝　(奮然として)強きが女の誇らうことか。

と去る。

靜緒　旗差物の數の增したは、明日にも河を打ち渡し、この城下に押寄せて、一と合戰のあらうも知れず、二百十日の空模樣、風雨の來るのを待つやうな。

靜緒も下り行かんとす。あなたより、上り來りし、家臣川西喜兵衛は冷笑して伺ひより、

喜兵　靜緒どの、靜緒どの。

靜緒　川西さま、何の御用。

喜兵　何の御用！　はて、用は其方に覺えがある筈。

靜緒　ほゝ、また何時もの話かいの。

喜兵　何時もの話とは曲も無い、川西喜兵衛、御身の爲めに戀を知り初めた、お身さまさへ承引あれば、早速刀自へ申し入れ、改めての婚禮沙汰、男子風は二の町でも、戰場の働きでは、他人にはあまり遲れぬ心得、靜緒御寮の婿金と披露しても、さうさう耻づかしうはあるまいぞ。

靜緒　耻づかしいの似合ふのとは、それは他人の申すこと、我れと我が、睫毛は見えぬものな。

喜兵　見えぬ段か、はゝはゝは、見え透いて困るげな。……さ云ふお身こそ

睫毛が見えぬ、明日にも痛い腹を召されう殿へ、首たけ落ちさせらるは、石佛と賭け事するやうなものぢはは。

静緒　喜兵衛どの、そりや何を云はれまする。

喜兵　怒られな、怒られな、なう、今度の軍、敵は破竹の羽柴筑前、大軍をもて攻め掛られては、とても、とても、殿の采なんどで、防ぎが付かうものでなし、落城は數日のうち、かかる危なき御主へ、戀慕するとは、賢いお身にも似合はぬこと、今の身分こそ低けれ、敵方へ隨身なさば、直ぐにも一國一城の主ともなるべき某ぢや。なう静緒どの、優さしいお返事をめされても、女冥利に盡きますまい。

静緒　なに、筑前方へ付かるるとか。

喜兵　いやさ、何も筑前方へ付くとは申さぬ、付けば然うぢやと申すまでぢや。上樣御盛のころの大名衆も、德川殿を始めとして、大半は筑前味方ぢや、なう、この喜兵衛が云條を立てさせられて、宿の妻とはならせられい。

静緒　妾は人の妻とはならぬ。

喜兵　はて、頑固なことは申さぬもの、な、あたりに人なき天守の高樓、と傍へ寄る、静緒はつと立退き、

静緒　寄らしやりますな。

喜兵　さて、無差としたな……

と、また傍へ寄る。折から家臣、堀内次郎右衛門躍り込むやうに入來り、

次郎　喜兵衛どの、喜兵衛どの。

喜兵　次郎右どの、なんぢや、頼みがひもない……

次郎　階子の口には立つて居たが、あれ御覽なされ、羽柴方は次第に陣を

引きますげな。

喜兵　なに、寄手が陣を引く……、これまで攻込んだ羽柴勢が、

と、窓から遠くの方を望み見て、

喜兵　いかにも。あれ、あれ、總軍後へ引上げて、旗も、差物も、此方へ尻を靡かすわ。

と次郎右衛門と顔を見合せて呆るる、

靜緒　なに、寄手が引く……

と、これも窓より首を延ばして、外を見る。次郎右衛門は喜兵衛の袖を引き、

次郎　なう、喜兵衛どの、羽柴方が引くと云ふのは、

喜兵　上方邊に事が出來たか。

次郎　かうなつては兼ての手筈は、

喜兵　ああ、いや、それ、お城は安體ぢや。

と、靜緒を憚る目交するに、次郎右衛門は合點す。

靜緒　（窓より首を入れ）今日か、明日かと思ふたに、嬉しやまた己がままに、お城の外も歩まれる。

喜兵　（また外を見て）寄手の勢が、引いた切りになつたらば……

と思案する。次郎右衛門は下を見て、

次郎　喜兵衛どの、これが來まするわ。これが、これが。

と、指を出して示す。

喜兵　なに、人が、

次郎　それ、もう、見えてぢや。

喜兵　ても、折角の……

喜兵衛は、靜緒に心を殘して、次郎右衛門に引かれ、あなたの

梯子を下り去る。

静緒　嬉しや、嬉しや、今までは夥しい寄手の人數も、恐ろしいとは思はなんだが、かう引いて見れば、やはり心が落着くもの。

と云ふうち、母の松枝上り來り、

松枝　寄手が引きますとや、やれ静緒よ、ほんに寄手が引きますかや。

静緒　母さま、お喜悦！　あれ、あの通り旗を卷いて去にまする。

松枝　あつ、君の御武運も、今日を限り！

静緒　寄手の引くのが、殿さまお爲めに惡いとか。……

松枝　惡い段か、なう娘、北國の柴田殿と、挾み打の計略も、交喙鳥の嘴となつたぞいの。

静緒　そうとは知らいで、喜びましたに、

松枝　軍の驅引、人馬の巧者、此方の殿とは、段違ひの筑前守、いまこの壺を外しては、もう雙六は此方の負、勝目はとても出まいわいの。

静緒　喜悦と思つたは、

松枝　仇喜悦。

雨は止みたれど、一片の暗雲に掩はれて、二人は愁然たる所へ、騒がしく上り來れる人數、信孝を始めとして、彦右衛門、その他の近臣、信孝は直ちに窓に凭りて、敵勢を見遣り、

信孝　げに引くわ引くわ本陣と覺しきあたりも、色めきて見えたるわ。

彦右　察するところ柴田殿、北國を發足ありしと覺えまする。

信孝　若狭街道を押出せば、はや近江へ打入りつらむ。

彦右　間近く寄せさせて一戰と、軍の口を明けぬゆゑ、引くには敵に利方あり。

信孝　雨の爲めに、河を渡さぬが敵の德、今となつては云ふも無益、とにあ

れ、後を付けて見う、方方出陣の用意、彦右衛は今日の軍大將をせい。

一同　はつ

と、急ぎ下る。

彦右　さらば、某も。

と、立掛けるを、

松枝　待ちやれ、怪、出水で渡れぬ呂久川なれば、後追ふ味方も渡れまじ。

彦右　むむ。

と萎れ入る。ややありて、

彦右　さあれど味方は案内知つたり、淺瀬を擇んで打渡し、せめては敵の肝を挫がむ。

信孝　ただ行け。

彦右　はあ。

と、彦右衛門は急ぎ去る。信孝は後を見送りて、

信孝　空は晴れた！　今となつて、晴れてもの空は晴れた！　出る水も、敵方が渡つてからの出水なら、味方の壺に入らうものを……

松枝　運で負けない敵方なれば、また、不運で勝たぬ味方もあろ。

信孝　天運だ！　我等の軍配が、下手といふ譯ではない。

靜緒　でも、勝たねばなら。

松枝　これ、（と叱す。）

信孝　（苦笑しつつ）叱るな、軍の拙ない三七、世間から見捨てられたわ。

と窓によりて、考ふるとはなしに沈默。……靜緒俄かに、

靜緒　母さま。

松枝　なんぢや。

靜緒　兄者の具足なと、

松枝　おう、名譽の軍大將、手傳ふて具足着せましよ。

靜緒　妾は少し氣分が惡しいで、

松枝　心を付けや。

と、信孝に一禮して去る。信孝また窓外を見る。折から、夕暉燦爛に差入る。

靜緒　殿樣、强い夕日が、差しまする。

信孝　この夕日が、先日來より續いて居たら……

靜緒　空が變はりましたなあ。

信孝　變はつた、惡い空は變はつたが、今となつては詮が無いな。

靜緒　詮があるやら、あらぬやら、妾の空も變はりまいた。

信孝　なに、そちの心が變はつた。

靜緒　雄雄しう、ようも、愚痴を仰有らぬ！　天の時とあきらめて、心の殘らぬ、あの夕日。

信孝　むう、夕照！

靜緒　山の端に入る短かい名殘を、二人して詠めませう。

信孝　天外に頼る所なき、我れはいま柱を得た。

と、二人相擁して面を接す、夕陽斜にこの男女を照らして短き戀を榮に飾る。

（幕）

二幕目　長良川巴淵

名だたる岐阜城の要害のうち巴が淵と聞えしは長良川の

水深く、渦巻くさまをたとへしなり、河に臨みし斷崖に、一木の松の古びたるは蟠れる龍にも似て、首を延ばして河水を呑まんずる氣色あり。時は四月の末方なれば、木木の綠の蔭茂く、晝なほ暗き所とて、星の光りも通はず。幸田彦右衛門、松明を持ちて、母の松枝を伴なひ、崖腹にて、

彦右　母者、これへ休息せられませ。

松枝　お城の中でも話は爲らうに、晝さへ寂しい巴が淵へ、連出いての談合は、

彦右　されば母者、お見遣る通りの城中、一夜一夜に夜逃の人數、その人人の見るあたりにて、母子が額を集めたら、それと思はれんも後目痛く、または殘り少なの城兵に、疑惑の種を蒔く道理と、これまでは招じまいた。

松枝　して、その談合とは何事ぞいの。

彦右　されば、此度の合戰、よしや張良攀噲の加勢ありとて、勝利はとても覺束なし、さしも織田の元老と、我れも許し、人も許せし柴田殿さへ、敵しかねて北國の露と消えては漸くに、殿が振る采に付くは、日本國中、ただこの城の外になし、所詮御運の末ならんが、三十路に間のある御身の上、またいかなる幸運の、廻り合はさぬものにもあらず、何れにしても御命を、繼ぐが目前一の分別、思ひついたる手立のほどを、申しあげうとての仕合せ。

松枝　お云ひやる通り、杖とも、柱とも、頼みに思ふ勝家殿の、北の庄にて腹召されたと、聞いた時の愕き、もうこうなれば、世は筑前の思ふまま、この岐阜のお城の攻手が、あらうことか清洲さま、見す見す兄弟鎬を削り、血で血を洗ふ、淺ましさはなう。

彦　右それを今更悔むことか、繰返したとて益には立たず、とにあれ御主君の御命繋ぎまゐらす手段と云ふは、母者、彼れを清洲殿へ參らさう。

松　枝なに。

彦　右さ、彼方、妹への執心、今に至りて衰へず、妹さへ彼人の、お手廻りに差出いたら、危うき御命を、取留めうは必定。

松　枝さ、それも、然るかは、知らねども。

彦　右はて、御不承知か？

松　枝今になつてはな。

彦　右さらば御命が、縮まらうとも詮ないとてか。

松　枝何しに。

彦　右然あらば妹を、彼人に奉ることを……

松　枝そなたも知つてであろ、靜緒は今は殿の情を……

彦　右さ、それ故にこそなほも申す、妹がさる身となつたる故、繋ぎ得べき御主君の、御生命を縮めては、幸田の家の忠義が立たぬ。

松　枝忠は立たぬとお云遣れど、そなたの言葉に隨ふときは、あれの女の操が立たぬ。

彦　右なんの、高が女の一人や二人、殿と替ごとがなりませうか。

松　枝したが、あの樣に、堅う手を切つた扱ひのこと、今になつて清洲樣の……

彦　右その儀なれば、お氣遣ひは御無用になされませ、寄手一方の大將、岡田長門守どの、とうの先きより、窃かに渡られ居りまするわ。

松　枝なに、長門殿が、

彦　右只今これへお招ぎ申さう。

彦右衛門は、松明を輪のごとく廻轉したる後、松の根元に結・

び付けある綱を引く、引かれて、長門守は、斷崖を攀登し來る。

彦右　お待遠におざつたらう。

長門　いや、さほどにもおざなかつた。

松枝　おう、おう、長門樣か。

長門　御老母、久しう御意得ませぬ、いつも御堅固で……

松枝　御一門の家頼同士なれど、苦苦しい弓矢の沙汰、永らくの間、お目に掛りませぬが、お變りもなう、して、お内方には御息才か。

彦右　母者、互ひに味方の目を盗むこの出會、さる辭儀は措いてなう。

松枝　ほんに！　さぢやなう長門殿、詳しいことは、忰から承はりまいた、御主君のこと、また娘のこと、宜しうお頼み申しまする。

長門　某が頼うだ方と、太刀打合はす信孝公を、庇ひ申すも外ならず、亡き上樣の御血統を、世に絶やさじとの一心、出來るだけは、長門身に引受けて勉め申そ。

松枝　さては一定、御生命は、

長門　申し越した、かの一儀さへ、應ふならば……

松枝　娘のことか？

長門　いかにも。さりながら娘御が、この難儀を承引めされたらうか。

松枝　さ、するも、せぬも、忠義のため、分けてあれが、愛しう思ふ殿の爲め。

彦右　妹は急度差上げう、なう母者。

松枝　おう、たとへ何と否もうとも、急度清洲さまのおん前へ、

長門　差出さるるかなう御母子、長門ほどの武士が、蘆間を分けて舟を操り、淺ましい色欲の、取持を致し申すわ、ははは。

松枝　なう、長門樣、諄うお尋ねを致すやうで、無禮氣にはおざれども、靜緒さへ遣はしたら、清洲樣思召で、急度御生命は繼がしやらうか、

長門　御念の入つた御老母、しかし最愛の御息女を、手放すとあつては、御配慮は尤も、さらば斯樣致さう、某直ちに漕ぎ戻り、いま一應、賴うだ方へ申しあげ、急度承諾の御旨を、明白に承つたらば、合圖に烽火を打ち上げう、な、火を見たらば事は應ふ、筑前前へ、當分は御討死と披露し申せば、急ぎ人目にかからぬやう、御主君を川船にて、野間の內海へ御開かせなさせられい。

彥右　さらば妹も御供させて、一先內海へ送り申さう。

長門　いやいや、御は直ちに本陣へ。おう、初夜の鐘を合圖にて、この岩下へ、迎ひの船を付けさせう。

と立上がる。

彥右　さらば長門どの。

長門　彥右衛どの。

松枝　少しも早う吉左右を、

長門　合圖を忘れたまふなよ。

と、以前の綱に縋りて斷崖を下り去る。二人は立つて見送る。

彥右　母者、妹を連れて來う。

松枝　では、妾が云ひ聞かさうか。

彥右　いやいや、某が迎ひに參らう、しかし、我等が話したのみでは、口の達者な彼れ、母者と二人掛りでなくば、容易う承引かぬであらう。

松枝　他人へ洩れてはならぬこと、この談合は、やはり人目のない此處で……

彥右　むう、暫くお待下され。

云捨てて彥右衛門は急ぎ行く、この時松明既に盡きて四邊暗暗、母は力無氣に岩上に坐して、越し方を默考す。川西喜兵

衛、猿轡食めたる靜緒を、小脇に抱きて忍び來る。後れて、堀内次郎右衛門、

次郎　喜兵衛どの、靜かに歩ましやれい。

喜兵　落人は急ぐものぢや。

次郎　急いだとて今夜の宿は定まつてぢやに。

喜兵　いや、いや、これがただ、降人に參るばかりなら、さまでの心配はいらぬがの、この人を何處へか、忍ばせ置かねばならぬからの。

次郎　いかさま女を連れて、寄手の陣へも參られまい。

喜兵　えいわ、行く所まで遣つて見う。

聞く人ありとも知らで語らふ。聞耳濟ましたる松枝は、つと立ちて二人が行く方を遮る。

喜兵　誰れぢや。

次郎　なにか居るのか。

云ひつつ進み寄り、松枝に近づき、

次郎　や、松枝どのぢや。

この時、猿轡すこし外れて、

靜緒　母様、（と叫ぶ）

松枝　や、何してぢや。

と驅寄る松枝を、次郎右衛門は支へて、

次郎　はて、何處へ行かしやる。

靜緒　母様あ。

松枝　おう。

喜兵　驚かれな、松枝どの、應はぬ戀を應へさすには、これが一の手立だての。

松枝　無禮なことをお云ひやるな、さあ、娘を此方へ返しや。

次郎　はて呑込の惡い、渡すほどなら連れて來ぬわ。

靜緒　助けて——

喜兵　お騷ぎやるな、いくら叫かれても、容易に聞こえる處でなし、その嫌がる聲も、追付け變はるであらうもの。

靜緒　惡人！　助けて——

松枝　さあ、己れ、返さぬか、これ返してたべ。

と近よりて、靜緒を奪はんとす。次郎右衛門これを支へる。その間に娘は、喜兵衛の緩める手中より逃れたれど、縛しめられたる帶のために、身體の自由を缺きて走り得ず。これを捕らへんとする喜兵衛、これを碍げんとする老母、そをまた支ふる次郎右衛門、老若四人の男女は、入れ亂れて爭ふうち、靜緒また喜兵衛の手中に入り、次郎右衛門は、守刀を拔きて、かれる老母を突き倒し、既に去らんとする處へ、かくとも知らぬ彦右衛門は、妹を尋ね厭ぐみて歸り來りぬ。折から漏る淡き月光の下、この場の光景を見て、怒氣冲天。

彦右　おのれ。

と、矢庭に妹を取返す。

松枝　や、怪か。

彦右　母者、何してぢや。

喜衛　邪魔な奴、それ。

と、白刃を閃かして、二人共に切つてかかる、彦右衛門は、母と妹とを、後に圍ひて、

彦右　や、おのれ、狼藉奴。

と切結ぶ、或るは崖上、成るは崖下に、奮闘數合にして、次郎右衛門を斬る、次郎右衛門崖下に落つ。喜兵衛これを見て、氣萎えて逃げんとするを、彦右衛門は、後掛けに切放し、斃るる所を、脚を上げて崖下に蹴込む、水の音。

彦　右　母者、彼奴等は仕留めました。

松　枝　おう、悴、よい所へ戻られたなう。

彦　右　危いことでおざりましたが、靜緒、そちや何うして、喜兵衛奴に捕らはれた。

靜　緒　あい、部屋に居る處を背後から、聲も掛けず羽交締。

彦　右　むむ、さうであつたか、我れも唯今其方の部屋まで、忍うでは參つたが、四邊は取散らしたるまま、是非に及ばず、歸り來ればこの塲の仕義ぢや。

靜　緒　して母者にも、兄者にも、どうして這般寂しい所へ？

彦　右　おう、そちに話す仔細があつて、母者にも待受けられたぢや。

靜　緒　なに、妾に話がある。

彦　右　母と兄とが打寄つて、そちに大事を頼むのぢや。

靜　緒　その頼みと云ふは？

彦　右　必ず聞かうと云ふ誓文が欲しい。

靜　緒　そりや、御無體ぢや。

彦　右　なじよに、

靜　緒　仔細を伺はぬさきにはな。

彦　右　云ふも云はぬもあるものぞ、母と兄とが頼むことぢや。

靜　緒　さりとて事が分らいでは。

彦　右　なんであらうと、聞くと云へ。

静　緒　嫌ぢや。

彦　右　嫌とはなんぢや。

と二人云ひ爭ふ。月の光、次第に弱し。母は傍らより、

松　枝　これ、どうしたものぢや、聞くも聞かいも、打出いてからのこと、彦右衛其方にも似合はしからぬ。

彦　右　母者、我等の申さうことが、一身の利欲ともあらうことか、君忠を重んじて、武士の道を立てうと思ふに、聞いてからとは何事ぢや。

松　枝　其方は事を承知してぢやが、静緒はまだ露ほども、事譯知らず、よう落着いて……、いや、いやその急きやうでは、静緒が會得するやうには、よし、よし、妾が云ふて聞かせませう。

彦　右　よい樣に召されい

松　枝　娘。

静　緒　はい。

松　枝　そちや、殿樣を何と思ふぞ。

静　緒　え。

松　枝　可愛う……思ふてあろ。

静　緒　あい、誰よりも……

松　枝　むう、その誰れよりも、愛しう思ふ殿樣の、命を繋ぐ術があるが、そなた勤める氣は無いか。

静　緒　殿樣のお命！

松　枝　女ながらも承知であろ、敵の目差すは殿一人、束の間に迫まる御首を、そちの才覺一つによつては、取り繋ぐ方がある。

静　緒　私の才覺で……殿の……

松　枝　おう、寄手の殿の陣中へ、命乞ひに其方が行くのぢや。

静　お命乞ひに寄手の陣！　寄手とはあの清洲様の……

松　其方が行きやれば、殿様のお命が助かるのぢや、皆まで云はずと後は分からうなう、娘、お主の爲めぢや、またしては大切に思ふ殿の爲め、さあ、身を捨ててくれ捨ててくれいなう。

静　嫌ぢや、私は否みます。

彦　右なに、嫌ぢや、これ汝は忠義を忘れたか。

静　忠義とへ忠義がどうしました。

彦　右忠……忠を忘れる、おのれ、いかに自儘に育つたとて、その口桁を能う叩いたな。

静　緒　兄者、女には操と云ふがありますぞや、殿様に身を任かしたら、此方の身體で此方のでない男は忠義を盡くしやりませ、女は隨分操を立てう。

静緒立上りて行かんとす、彦右衛門はその袖を捕らへ、

彦　右待て、さては、おのれ、この談合が不承知か。

静　緒　このやうなこと、聞くも嫌ぢや。

彦　右聞くも……

と引据えんとす、

松　枝　ま、待ちや、怜、

と兩人を押分け、

松　枝　これ娘、いつもとは時が違ふぞ、いかに氣隨に育てばとて、あまりなる申し分、今のことも有様は、母が發意。

静　緒　えつ、母者までも、

松　枝　さればなう、この月始めに、羽柴方の寄せたときさへ、そちを清洲へ遣はして、扱ひを頼まうかと、彦右衛にも話したほど、數へては僅かの

日なれど、天下には事が多く、さしもの柴田も腹を切り、味方は朝日の前の霜雪、頼みがひ無い有様に、陣を拔け出るもの多く、廣い城中に僅かの人數、虚實を覺らぬ寄手なれば、けうまでは猶豫した、明日にも打つてかかられたら、一支へもなく落城して、その攻太鼓の鳴るが合圖に、味方は一同果てるであろ。

静　緒　逃がれぬ所と、覺悟は篤うに極めて居まする。

松　枝　その九死の中の一生を、そなた一人で得らるるのぢや。

静　緒　清洲樣へ行けと云ふのが？

松　枝　主とも、夫とも、頼うだ方を助けるのは、ただそなたが胸一つ。

静　緒　外の男に逢ふのは嫌ぢや。

松　枝　操を破れと母の口から、勤めるも異なことながら、大切に思ふ殿樣お爲めぢや。なう、操を立つるも男故ぢやに。

静　緒　否！　否！

松　枝　なんで否？

静　緒　女の操は女で立てる、自分で自分に立てるが操ぢや。

彦右衛門傍より、

彦　右　ええ、づべこべと喧ましい、母者、程になされませい。さあ静緒、君の爲めに敵地へ行くを否むなら、好い分別があるであらう、まさかに殿を見殺しには得致すまい。

静　緒　私も共に死にまする。

彦　右　おのれも死ぬ……、しや面倒、和主などは何うなとせい、生きる殿を殺さうとか、むう、殿の死ぬるを願ふのか、

静　緒　なんの！　なんの！

彦　右　ならば、行け。

静緒　行かぬ、殿と一緒に私も死ぬる。

彦右　あつ、己れは剛かものぢや。
母も彦右衛門も、呆れて語辭なし、かかる折、對岸にて、長門守が合圖の烽火松枝は見るより、

松枝　あれ、烽火が……

彦右　母者、措かれい、たとへ合圖が揚がらうとて、この剛か者が聞かぬとさは……

松枝　あれほど堅く取極めたが……あゝ！どうせうなら。
と彦右衛門と面を見合はせる、静緒不審なる面色にて、

静緒　母様、烽火が合圖とは？

松枝　そなたが敵地へ參るならば、御助命が應ふといふ證。

静緒　すりや、もう、彼方へ妾のことを、

松枝　最前家老の長門殿と、これこの所で談合してぢや。

静緒　ああ！

松枝　これ静緒、道に應はうが、應ふまいが、眞實殿様を思ふたら、その身を捨ててなることを、せぬと云ふは情に缺ける、ここで其方の身を捨てるのが、情の常ぢやと思ふがなあ。

静緒　ああ、これが殿と共なら、冥暗の地獄道とて、厭ひはせぬが。

彦右　妹、な……なにを云ふ、御一緒とは榮曜が過ぎる、殿のお役に立つことなら、末代までも譽れであらうぞ。

静緒　何んぢや、譽れ！ほほ、譽れが欲しうてすることか、私や、……あの……殿の……お爲めに……

松枝　何もかも母に任かしや、なう、娘、さらば其方は承引したか。
静緒無言にて泣伏す。母と彦右衛門とは互に暗涙の落つる

を覺ゆるのみこの時、彦右衛門燃料を集めて火を焚く。

松枝　焚火は嚴しい法度ぢやに。

彦右　かの船の目標に燃しまする。

靜緒　母者。

松枝　なんぢや。

靜緒　私の行く時刻は？

松枝　今直ぐぢや。

靜緒　え、あの今！

松枝　おう、今！

靜緒　その以前：殿樣に逢ふて去なう。

彦右　そりやならぬ。

靜緒　ならぬとあらば、妾は去なぬ。

松枝　はて、一生の別れ、逢ふて行たがよい。

彦右　いや最う時がおりない。

松枝　さらば此處へ、殿を招じたがよからうぞ。

彦右　そはまた餘りに恐れ多い。

松枝　辭儀も時にこそ！　なら彦右衛、そち一走り、殿をお招じ申したがよからう。

彦右　問答は時が移る、何にせい早いが好し、さらば御出坐を願ひ申さう。

と、彦右衛門は驅行かんとするを、

松枝　これ待ちや。

と、呼語くことあり、彦右衛門頷いて去る。

靜緒　なう母者、殿樣これへお出でがあらば……

松枝　亥刻の鐘が鳴るまでは、もはやこの世で逢へぬ殿、思ふままに氣隨

を云や。

静緒は焚火を見て、

静緒　ああ！火は燃えて！焚木少なの、火は燃えて！

松枝　おう、殘るは灰ばかりな！

静緒　母者。

松枝　娘。

静緒　情ないわ。

松枝　情無からう。

静緒　悲しいわ。

松枝　悲しからう。

静緒　涙が出る……

松枝　泣きや、泣きや。

二人相擁して泣く。……松枝は立上り、あなたを見て、

松枝　あの松明は、殿と、彦右衛。……惜んでも短かい時を！

と木蔭に身を隠す。やがて彦右衛門は、松明を燃して先へ立ち、信孝を伴ひ來り、手振にて殿を止め、ひとり静緒の傍らに來り、耳語する處あり、松明にて消えんとする火を搔き起して去る。

信孝　静緒。

静緒　あい。

信孝　聞いたぞ。

静緒　あい。

二人は直ちに相抱擁して、ただ涙に暮れゐたるが、ややあり

信孝　なう某も腑甲斐ないぞ、最愛の女を敵に取られ、露の命を存らふるて、信孝、わ。

静緒　殿の……殿のお傍を離れては……あ、片時も生きるは嫌、殿、何とか術は無いものか、死ねと云ふなら、一層死ならうが。

信孝　死ぬ！　ああ、死ぬもよし……

静緒　殿、死ぬ？　あの……死なしやる。

信孝　さ、死ぬるもよいが、なう、このままに果てるは無念ぢやで……

静緒　無念とへ、なにの無念？

信孝　今更に聞くことか、筑前めに詰められたが無念よ、以前は父が草履をも取つた奴、其奴に追詰められ……

静緒　そ……それが、御無念か。

信孝　う、う。

静緒　え、え。（と泣伏す）

信孝　口惜しいわ。

と、静緒に手を掛くるを、彼れは肩を交はして痛哭す信孝寛めんとして傍へ寄るを、菅なく振拂ひて、なほ悲嘆の涙を絶たす。

信孝　静緒、嘆きは然ることながら、

と言ふを聞くより、静緒は屹として、面を揚げ、

静緒　殿、殿妾が敵の手に渡るのは、無念には覺さぬか、御無念には覺しめさぬか。

信孝　云はずともぢや。

静緒　はあ！　御無念か。

信孝　嬖妾を敵に渡す！　世の人口も如何ならんと……

靜緒　措かしやれませ措かせませ、世の人口……　嬖妾……　たとへ名は何とあらうと、殿、あの天主の高樓にて、何と云はしやれた、息の掛かる領地なりや、金銀財寶なりや、さては殿樣のお命とて、戀の深味は埋め切れぬと、仰有たは嘘よな、あの虚言でおはしたのか、え、殿、應答を聞かして……聞かしてなう。

信孝　我等も嘘は嫌ひぢや。

靜緒　その嫌ひな嘘を、何故に付かしやれた。

信孝　いや虚言は云はぬ。

靜緒　虚言は仰有らぬ、あ、さらば飽きさせられたな、おう飽きさせられたのぢや、妾は捨てられてぢや。

信孝　そちが思ひ切られるなら、この苦しい思ひはせぬ。

靜緒　あの時の一夜さは！

信孝　靜緒、またいつ逢はうも知れぬ、快う……機嫌直して別れをせう。

靜緒　また逢ふとそ！　敵の陣中へ參つたあとで、また御前に出る靜緒ぢやと思ふてか。

鐘聲遠く聞こゆ

信孝　あ、亥刻か。

靜緒　迎ひの來る鐘の音。

信孝　靜緒、賴うだぞ。

靜緒　（冷やかに）賴まれませう。

孝　行つてたまはるか。

靜緒　心の水の減した人へも、女は誠を盡くすものよ！　殿、靜緒はやはり女でおざりまいた。

信孝撫然。あなたよりは母、瓶子と盃とを持ち、こなたよりは彦右衛門、近習山路玄蕃助、太田監物、古市九郎兵衛、小姓の清三郎と共に、驅け來る。彦右衛門は先づ巖頭に登り、對岸を見て後、信孝の前に至り、

彦右　あれ、あの細い燈火は迎の船さ、殿にも、はや御支度あつて、川上なる水門口より落ちさせたまへさ、早う、早う。

松枝　待ちや。

と盃を殿へ進めて、それを娘に與ふ。靜緒涙ながらに飲む。信孝無言にて立ち、近臣を卒て去る。靜緒それを見送りて働哭す。母子もまた暗涙を呑む。彦右衛門やがてまた巖上に登り、曩きに長門守が傳はりて下りし綱を引いて、妹がこれより下り得べきやを掛念す。松枝は娘の背を撫でて、

松枝　靜緒よ、はや舟は來たげな。

靜緒　母者、舟へ乘るのは……止めにせう。

松枝　なに止めにせう、ほほ、戯談云やんな。

靜緒　いや、眞實妾は嫌になつた、

松枝　え、なんと云やる？

靜緒　母者、殿は賴むと云はしやれた、止めいで……止めいで……

松枝　止めいで？　おう、止めぬでの、

靜緒　あまりぢや、情ない、止められぬ……賴むと云はれて……

と秋泣くを、巖上にある彦右衛門聞いて、

彦右　なに、止めさせられぬで嫌になつた、止めさせられぬで……、おう、さては何か、前方より行かうずる料簡も無かつたとえ。

靜緒　何ぢや、行かうずる料簡も無かつたとえ。

彦　右さらばこそ、四の五の云ふて、

静　緒ても殿様の、

彦　右奉公には一命を差出す、命を捨てる心があればの、

静　緒命命と、命がそれほどまでのものか。

彦　右卑怯ものは、何より捨てるが恐ろしいとよ。

静　緒兄者云はれな、なんの命が……母さま参りませう、さあ敵陣へ。（と立上る）、

松　枝おう、行てたもるか。

静　緒去なう。

と歩み出す、この時雲晴れて、月光晝のごとし、

松　枝待ちや。（懐剣を取り出し）これは目前の時の用に、

と静緒に渡す、静緒受けて紐を解き、鍔元を能く改め、思慮するところあり、そのまま帶の間に收む。

彦　右（巖上にて）こりや、とても女には下り得まい。おう

とさきに静緒が縛しめられし帶を取りて、手繰りあげたる綱に結びつけ、巖下に向ひ、

彦　右この松枝より釣下げるほどに、船をもそつと此方へ寄せさしめ。

松　枝その枝より釣下さうとや。

彦　右されば、とても女には、この岩を傳はつては、

松　枝静緒、よう支度しや。

静　緒なんの……支度……

と巖の上部に上り褄の開かぬ爲めに、腰部を搦げなどす。彦右衛門はその間に松に攀上りて綱を掛けたり。松枝は帶にて静緒の胴中を結び、彦右衛門はその端を取りて引き試む。

静緒　さらばぢや。

松枝　よう、心を付けて、

静緒　あい。

彦右　妹、息才て居や。

と綱を引く、静緒は地を離れて、松の許へと釣上げられたり。

彦右　目を眠つてお居やれ、かまへて下を見やるな。

静緒　兄者、命は惜しいものでなあ。

とかの懐剣もて帶を切る、帶一二尺を殘して、主は河へ陷りぬ。

彦右　や。

松枝　あれ。

母は狂氣のごとくになり、岩に上りて河の面を見れども、水泡の行くは跡も無し、彦右衛門綱に絶りて河岸へ下りたり。

舞臺半ば廻轉す。

長良川の流れ、屈曲して鈍角をなす處、巴が淵の斷崖、松にかかれる綱を便りに下り來る幸田彦右衛門、下には信雄の家臣ども、船端に立ち、舳に騷ぎ静緒を捜索す。彦右衛門崖下に下り立ち、

彦右　いかにや？いかにや？

臣　いや探さうにも、この急流にて、手が付けられぬ。

彦右　早まつた女！

臣　かくなる上は是非も無し、我等は漕ぎ返さう。さらば。

彦右　暫くお待ち下されい。

臣　お供申すならば大事ないが、空手で遲うなつたのでは、お叱責も恐ろしい。さらば、さらば。

彦　と舟子共對岸に去る。

右　憎き奴、君のお爲めを思はぬ奴、（上方を仰いで）母者、大事は去に申した、歸らぬことを爲し居つた、む、む、（上方の話を聞きつつ）いかにも君が落ちさせられては……、片時も早く申上げて、御出船をお止め下されい。む、む、早う、早う、いやいや、足許の惡い母者にては、間に合はぬも知れぬ、某も跡追驅けて申上げう。

と、また元の綱にて、斷崖を攀ぢ登る、風ひとわたり、蘆の葉動ぐ。ややありて上流（下手、奥の方は河下）より、棹さしのべて信孝等の乘りたる船流れ來る、人目を避くるために苫を切りたり、信孝はその間より首を出して城の方を見る。月暗し、水上に、靜緒らしき影なき女の姿髣髴として顯る。

信孝　あ、靜緒。

と叫ぶ、その姿は煙のごとく散じぬ、舟は流れに從つて、蘆の間に入り、見えつ、隱れつ、ほど過ぎて岩の表を滑り落ちたる松枝は、聲を限りに、

松枝　船よう、船よう。

と呼ばはれども、ただ河風の騷ぐのみ。

松枝　船よう。……あ、行た、心を盡くして人人を、虎の顎に追ひ落した。ああ、船は行た、娘は死んだ、追付け殿も死なれう。この世の中はただもう闇、南無や彌陀佛、殿も娘も西方の、一つ蓮の夢の上に後生を授けさせたまへ、妾も娘と一つ流れ、この河の水沫と消えう。

と合掌して水に入る。

（幕）

大詰　内海大御堂

客殿とは名のみ、この頃の兵亂續きに、修覆等も行き屆かざれば描ける壁は雨に汚れ、襖は破れて鼠の通路を造りぬ。庭には蔦葛生ひかかり、小やかなる池には、杜若の四つ五つ咲きたるかへりてあはれを添へたり。肅殺たる秋に似たる風、一と過りしたる後、庭の奥より、老ひさらばひたる僧、破れたる衣、杖によりて弱めき來り、緣を杖にて輕く打つ。襖の中より、小姓清三郎は立出で、

清　三　やゝ、いつもの老僧、今日も能く參られた。殿樣は、

清　三　奥におざられまする。

僧　また例の考へごとかな。

清　三　お出でのことを申し上げう。

信　孝（奥にて）いや、それへ參らうぞ。

清三郎襖を開く、信孝は（髪やや亂れて力無氣に）座敷に來り座す。老僧緣に腰を掛け一禮す。

信　孝　籠り居の事なさ、むすぼほる心のなやみに、相手欲しい我等、ようも毎日訪ひくれるな。

僧　業が盡きいて、死に殘つた坊主、村の者も相手にはせぬほどに、御機嫌も伺ひまするわ。

信孝　村の者も相手にせぬ？

僧　されば、この頃の軍續きて、寺に付いた僅かばかりの、年貢の俵は入つて來ず、村の人も顔を見ると、また布施物の催促かと、影を見るより遠退きまするわ。

信孝　村の者も相手をせぬ法師、おう、大概は我等と似た中の！

僧　御領主の殿樣が、相手になされぬ弟御さま。

信孝　かやうの筈とは思はざりしに、ただ此寺へ推籠めて、罪人と等しき扱ひ、寺の外へは歩むを構ひ、近習のものまで遠ざけ居つた。

僧　お痛はしいことぢや、さしもの御大身が、かやうの樣にならせらるるとは、ああ、ああ、南無大師遍照尊、この御寺をそのまま、てもよう似たお方ぢや。

信孝　なに、この寺に似た！　どう寺に似た！

僧　由緒は正しい御寺であれど、今は見る影もな。

信孝　ふう。

清三　もし坊樣、ここはさほどに由緒のある御寺か。

僧　されば、この御寺は、内海の大御堂と申しての、昔、右大將頼朝公の御父、左馬頭義朝公、野間の庄司が手に掛かり、生害めされた舊蹟とて、それ謠の俊寛、あれに出る平の康頼法師が、開基せられた御寺ぢや。

清三　さては此御寺には、義朝公の御墓なとありまするか。

僧　ある段か、寺内には五輪の卒都婆がおざりまするわ。

信孝　なに、ここに義朝の御墓所が……

僧　なかなか。

信孝　あの家來の長田に亡ぼされたる……

僧　いかにも。

信孝　主を殺害せし長田！

僧　はれ、憎い奴でなう。

信孝　來るも來た、その場所へ。

僧　これも欲ゆゑぢやが、詰りはその身の損となりまいたわ。

信孝　長田も損なが、義朝こそ一の損、あ、信孝も身の破滅ぢや。

僧　僧立つて空を仰ぎ、雲に日が遮へられてか、晴晴とはせぬことよ、さらばまた參ります

る。

僧弱ぼひつつ去る。信孝呻吟す。

清三　まうし、お肩なと摩りまぜう。

信孝　なんぢや、肩なと、なと、とは何、

清三　はい、恐れ入りました。

信孝　恐れ入つた、恐れ入つたとは何、揉むなら早う揉まいて。

清三　はい。

と清三郎恐る恐る肩を揉む。折から岡田長門守は、廊下傳ひに入來り、信孝を見て平伏す。

信孝　長門か。

長門　はあ。

信孝　某は恨みに思ふぞ。

長門　はつ。

信孝　この信孝は、其方には何に當るな。

長門　されば頼うだ方の御弟御。

信孝　さては主の片割れか。

長門　いかにも左樣に當らせられます。

信孝　これ（と云ひかけ清三郎を顧みて）清三止めい、（と肩を揉むを止ど）め）某をここへ誘いたは、長門其方であつたな、なう其方ぢや、彦右衛に談合して、某を當國へ下したは、其方の計ひよな。

長門　全く御意に相違はおざりませぬ。

信孝　相違ない！　相違なからう、彦右衛が申したには、我等當國へ參ることは、筑前前こそ當分は包め、その中は客人分の扱ひとは聞いた、これが何の客人應待、二人三人の近習まで遠退け、立つにも坐るにも見張を付け、その上、この狹い寺中の外へは、一足も踏み出させぬ、かくては牢獄と何の差別か。

長門　はあ、仰せは御道理、それには段段との事譯おざる。

信孝　なに事譯がある、ち う聞かう、さ、その仔細を聞かう。

長門　恐れながら、某口にて申上げうよりは、恰好の人こそあれ、

頤にて清三郎を招く。清三郎心得て傍に來る。長門は清三郎に呼く。清三郎頷きて立ち、廊を廻りて去る。

信孝　長門、參るのは何人ぢや。

長門　御存知のものにおざりまする。

信孝　存じて居る……はて、誰れてあろ。

幸田彦右衛門（無刀）出でて廊下に坐して平伏す。信孝はこれを見るより。

信孝　やあ、おのれ不得人。

と罵るを、長門は推止め。

長門　待たせられい。

信孝　待てとは何ぞ。

長門　先づ、彦右衛門申すことを、一應はお聞あれ。

信孝　いいや、面を見るも腹が苛らる、主を賣つゐる彼奴、ああ！　お身とても同心な！　肭甲斐ない我等の面を見て弄らうとか、よい心掛けな、さ、早う去ね、己れの面を見るも奇怪ぞ。

長門　彦右衛、殿は嚴いお憤りぢやが、こりや仔細を知らでおはすからぢや、御機嫌に關はらず、とうお語りやれ。

彦右　仰せにはござれども殿の御意に逆らうては、

長門　よいわ、殿は殿の御料簡、聞かせらるるが嫌とあらば、耳を塞がるるまでのこと、お乳を上げた其方の母者が、失せたことなど聞かせられたら、お悔みの一言位は仰有らうぞ。

信孝　やあ、何と云ふ、松枝が死せた？

彦右　はあ、妹の跡を追ひまして、同じ塲所の巴が淵に、身を投げ空しくなりまいた。

信孝　な……なに、靜緒が水に入つた、如何にして、命を捨てた、何條の故に入水したぞ、なにか、誤まつて陷つたか？

彦右　覺悟して相果てまいた。

信孝　それは何時、

彦右　あの夜のこと、御別れのお杯を、たまはりてより間も無う……

信孝　間も無う……

彦右　時も去らず……

信孝　時も去らず……

彦右　母までも……

信孝　むむ、松枝までも……

彦右　靜緒が果てては御身上、一先止め參らせんと、水門口へ驅付けたれど、はや出船の御跡、如何はせんと引返せし、留守の間に母は入水、頑固

な妹ゆゑに、主君を死地に陷いれたる、その言分に覺悟致したと見えまする。

この話の途中より、先程の僧の業と見えて、看經の鐘の音す。

信孝　松枝の死せしは、さる譯よな、さるにても靜緒が果てしは何故ぞ。

彦右　情なや、殿、お身樣故に妹は、長良川へ飛込みました。

信孝　我れゆゑに、靜緒が果てた？

彦右　殿、靜緒を殺したは殿ぢや。

信孝　なに、我等が靜緒を殺した。

彦右　殿、靜緒めは申しました、君の爲めに身を捨てて、敵地に趣くをお止めもあらせいで……一禮を申された……御心根が恨めしい、行くのが嫌になつたなぞと、呟いて居りましたを、さては命が惜しいかと叱るやうに追立てたれば、河に臨める切岸の、あの大岩の松の下命は惜いものぞとの、ただ一言を此世の名殘……

信孝　飛込うでか。

彦右　迎への船へ釣下さんとて、胴中を結へたる帶を亂に切放し、

信孝　川へ入つたか。

彦右　殿、これがその帶の端でおざりまするわ。

彦右衛門は懷中より帶の端を出し、信孝の前に置き、退かんとするを、信孝引止め、手を取りて、

信孝　これが紀念が！

彦右　屍體を探さうにも憚りある身は儘ならず、その帶の端のみを、此世に居たといふ標に、妹は殘して消え去りまいた。

信孝　帶の端（と取上げながら）これが靜緒とか？　なんの、なんの、靜緒は未だこの世を去らぬ。

彦　右なにと御意なさる。

信孝　乃公は静緒に逢ふた。

彦　右それはまた何處にて、

信孝　巴が淵にてよ。河船で下るときに、水の上を歩むかのやう、巖の上に居たは彼れぢや、静緒は死なぬ、おれは逢ふた。

彦　右巴が淵にて……はて巖の上。

信孝　言葉こそ交へぬが、夜目にも歴歴と姿を見た。

彦　右名高き深み、河中に巖なんどの有るべきやうなし。

信孝　むう。

彦　右ことに夜陰……まざまざと……

信孝　面を見たがの。

長門　彦右衛、こりや世に云ふ亡魂魄霊などの姿では無かつたらうか。

彦　右長門殿のお云ひやる通りか！　あ、亡魂なりと、魄霊なりと、身共は母者に、唯一目逢ひたい。

信孝　ああ、静緒！　静緒！

長門　殿、この内海へおざられての御仕向が違ふたも、な。

信孝　う、う。

彦　右御宥されませ、これと申すも、妹めが、皆我意から起つたこと、御難義をも顧みず、自儘に命を捨てるとは、憎い奴、無念な奴、某も腹掻破いて、身の明しをと存じましたが、かくては御先途を、見届くるものなしと、惜からぬ命存らへ御目通りにも推参致しました。

信孝　最早云ふな、軍神には見放され、浅ましい心の中を、静緒にも見透かされた、何事も我が冷たい心から、熱い思ひも醒したのぢや。

彦　右さては妹の我儘を、お咎めもなく、お叱りもおざりませぬか。

信孝　叱る！　咎む！　さる權勢が、この三七にあると思ふてか。

彦右　情ない、殿、もう云はしやれな、もう仰有れな。

長門　こりや彦右衛、お力を付けうとはせいで、反りて物を思はする、對顏の前の、約諾とは違ふでがな。

彦右　あつ、長門殿責められな、お身某とお代りあつたら、此場の仕儀でも思ひを殺して、笑を面に浮められうか。

長門　いかさま、年配をして、面目もない事を申した。

彦右　これ長門殿、折入つてお身への談合、お聞き下さらぬかの。

長門　何事でおざるの。

彦右　さ、この内海から、殿を落としてたもるまいか。

長門　なに。

彦右　なう、計つた事はまんまと外れ、殿に憂目を見せ參らするも、一分の責はお身にもある、せめては此處をお落し申し、御安泰を計りたい、見ぬ振をして内海から、殿を落して下されい。

長門　落す！　落去を勸めて、其上の分別は？

彦右　折を見て旗上げ、

長門　なに旗上、御分、殿を守立てて、どう働く。

彦右　せめて千餘りの人數さにあれば。

長門　千の人數、ま、その才覺は成るとして、旗上の名分は何と立てる？

彦右　名分とや、はは、長門殿、筑前が相手なりや主と家來ぢや、主として家來を計つに何の名分。

長門　殿と筑前との取合のみなら、主と家來とも云はれうが、その御相手の中には我等主も罷りある、これ御兄弟の爭ひ、その上、筑前お手には、宗家の三法師殿在すからには、順逆の逆の字は、この殿の旗の上に光

らうぞ。

彦右　むむ。

長門　旗上はよしない分別、また何れにもせよ、殿御存命あること、筑前守承はつては、第一に先づ、我等殿が厄難、御身上に及ばうも知れず、ただ何處までも此儘にて、人目を包ませたまうよりは詮ないことでおざりませうず。

信孝　此儘、あ、此儘にあるは死ぬるよりも命がないわ。

長門　(暫くあつて)御意！　申上げう言葉がござりませぬ。

三人は暫時啞然。この前より看經の鐘の音止む。

信孝　長門、予は死なう。

長門　何と仰せられまする。

信孝　天地に見放されたる某生きての詮は何事、今日を限りに、此世を去らう。

長門　こは甚じき御決心。

彦右　(長門守の語を遮るがごとく)長門殿、なにをお勸めやる。

長門　彦右衛お控へあれ、いかに殿、かくてこそ、故上樣の御胤ぢや勇勇しき仰せ、長門身に取りて、大慶に存じ奉る。

彦右　殿殿、先づ、先づお待ちなされませ、この所で失せさせたまふほどならば、岐阜にて、御腹ともあらう道理、なう長門殿、其許も此國へ御動座を同心せられた人なう、何か外に宜き手立など、

長門　あり申さぬで……、我等主の御心變る上からは、この上宜い目の出やう筋はなし……

彦右　これと云ふも妹めが、頑固な似非賢人……

信孝　彦右衛、靜緒を罵じるな女を頼うで、一命を繋がうとした、身の心根

の賤しさは、我れながら淺ましい、云ふな、予は決心した。

彦右はあ。

三人また啞然。暫くして、また看經の鐘聞こゆ。

信孝　幸の法の聲、例の法師が看經よな。

長門　せめて、後生のお沙汰など、某が伴ひ申さう。

信孝　ああ、いや、信孝には後生も無し、要らぬ事ぢや。

長門　さらば、御最期の御支度など。

と、長門守の立去る後を、見送りし彦右衛門は、不覺の涙迫き

あへず。

彦右　殿、お覺悟も然ることながら、今一應の御分別を、

信孝　その思案があればのう、彦右衛、それ共に、其方に、よき考へなど……

彦右　それとて……

信孝　無いか。

彦右　……

信孝　あるまい。

彦右　……

信孝　雨の爲めに軍は仕損じ、一身の爲めのみ計れば、女にさへも見放された信孝、行く處は知らねども、此世に有らう人とも覺えぬ。

長門守、經机の上に櫛を立てたるを持ち來りて、信孝の前に差置き、引下りて坐す。信孝肌を脱ぎ、

信孝　彦右衛、介錯を、

彦右　はつ。

と刀無きに躊躇す。長門この樣を見て、己れの刀を渡す。彦右衛門感慨の念に堪えず、涙に噎ぶ。折から走せ出づる清三郎

は、

清三　と、殿様、お腹を切らしやりまするか。

信孝　清三郎、種種と造作になつたが、予は今日を限りに相果てる。

清三　殿様、あの世におざらしやるなら、清三郎もお供申しましよ。

信孝　いやいや、要ない追腹、無益にせい。

清三　親共は討死致し、誰れ便りも無い私、殿様にお分れしては参りまする家もござりませぬ。

長門　横合から恐れなれど、なう、殿、清三郎は、我等に於て引受け……

清三　嫌ぢや、殿様に腹召させる長門様と、一緒に住むは嫌ぢや。

と云ふうちに肌推寛げて、小刀を腹へ突立てる。

清三　ああ。

長門　や。

彦右　むむ見事。

清三　お先へ参……

彦右　先駆けせい、我等も後より……

と介錯す。

信孝　忠な奴、いで、（と短刀を逆手に持ち）往昔此處は、悪逆人の長田庄司、主の義朝を殺害なせし跡なりとや、それにも劣らぬ羽柴筑前、報ひといふは世に有るものぢや。

長門　殿、輪廻の念は後を引く、ただ尋常の御最後を。

信孝　むむ主を内海の、

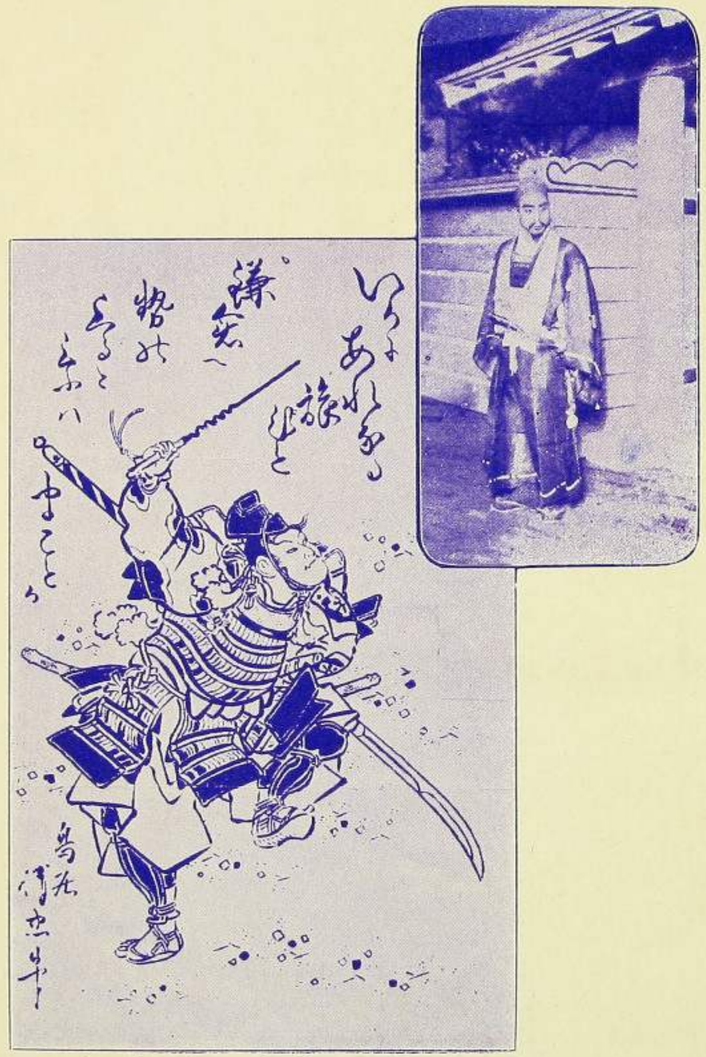
と刀を腹へ突立つ。彦右衛門は、引廻したらば介錯せむと機を待つ。信孝、先きの帯の端に目を遣り、頤にて、それを近づけよと知らする、長門守取つて信孝に渡す。信孝これを受けて、

片手に握み、暫しこれを見詰めしが、俄に長押のかたを見て、

信孝　あ、静緒、静緒、

と茫然自失、彦右衛門、長門守と目交せし、涙を呑んで、刀を振ふ。

（幕）



雄正田村……寺明最……峰蓉井伊……門衛左源

座　郷　本……月一年二十四治明

當流鉢木

（場）

北條殿邸大門内

（時）

正嘉の頃、春。

（人）

最明寺入道時頼
二階堂信濃守
佐野源左衛門常世
佐野源藤太常景
佐野小藤次常家
着到付の侍

問注所の侍
二階堂の雑色
入間川の武士
伊豆の侍
津久井の士
下總の武者
外九州よりの早打、小者、舍人等。

鎌倉小町なる北條殿の邸にては、時ならぬ人馬の騒ぎこそ始まつたれ、ただ見る、大門の中には、臨時に假屋を設け、着到つけの侍机の上に着到帳を廣げて扣えたり。築墻の内側には、梅松などの立木、間を隔てて並び植ゑらる、門に遠き方に

は、常盤木の蔭茂きものあり。着到せる武者三人は、立木の許に並びて憩ふ。佐野源藤太常景は、着到つけの侍の前に立ちて、物語らひつつあるさま。

着到　着到帳を御覽とか。

源藤　心得のため一見致さう。

着到つけの侍、着到帳を源藤太に渡す。源藤太見て、

源藤　なう、上野國よりは、まだ誰れ人も參らぬさうな。

着到　當國、武藏、伊豆の外は、他國の着到とて一人もあらぬわよ。

源藤　他國はとにあれ上野にては、天晴れ一番の着到は、我が忰にてあれかしと、思ひ居るがな。

着到　あ、小藤次殿が上らるるかな。

源藤　別に早打を立てたれば、恐らく國中にては、一の上り人にてあらう

ず。

この時「着到」と叫ぶものあり、着到つけの侍は、「おう」と答へて、源藤太より帳を受けとりて扣えたり、源藤太、來れる武者を差覗きて去る。この處へ、大門を入りて來れるは、下總國眞間郷、繼橋七郎舟有なり、馬を引いて隨ひ來れる舍人と、小者とを顧みて歩みを止どめ、

下總　下總國の御家人、繼橋七郎舟有、總勢三十人、門外に扣えさむらふ。

着到　着到つけの侍は、その由を帳に記し終り、

下總　中門の外に扣えて、御沙汰ども侍たれい。

承はつた。

手にせる鞭を小者に渡し、弓を引換に受けとる、舍人は馬を扣えて待つ。今來し武者は、屯集の武者等の團居に近づきて目禮す、團居せる武者たち、座を改めて、この新らしき友を迎ふ。小者は持ちたる毛皮を布き、主の氣色を伺ひ、舍人等と共に去る。今來し武者は、他の者に倣ひ、弓を築墻の須柱にかけ、毛皮の上に坐す。こなたにては、また「着到」と呼ぶ聲す。着到つけの侍は筆を取り直す。間も無く上野國住人、佐野源左衛門常世、破れたる甲冑、長刀を肩にかけ、馬を自身引きて來る。

着到　御名乘は、

源左　上野國佐野の住人、佐野源左衛門尉常世。

着到　なに、上野の衆か。

源左　いかにも佐野源左衛門。

着到つけの侍は、名を書き終り、

着到　して御人數は、

源左　人數とても候はず、唯一騎。

着到　あれなる築墻の下に扣えて、御沙汰ども待たれい。また舍人小者なんぞは、御門外に休ませられい

源左　あれなる築墻の下に扣えよとか。

馬を引いて行かんとす。

着到　ああ是れ、馬は御門外へ出されたがよい。

源左　唯一騎なれば、引出だすべき小者もなきに、

着到　さてその馬をいかにせらるる、

源左　自ら馬の口を取り、御沙汰の出づるを待ち申さむ。

着到　それはともかくも……はて埒も無い武者かな、

源左衛門は馬の鼻綱を取り、集合せる武者の一團に近づく。

さきの程より、この二人の問答を、悶みあへる彼等は、源左衛門來りても素知らぬさまにて空嘯むく。常世も附穂なく、少し離れたる所に立ち、馬の鼻綱を立木に繫いだり。武者等は常世を意に介せぬさまにて語らふ。

津久井の士　狩を召さるならば、我等が庄へお參りあれ、猪猿は云ふに及ばず、邸の居廻りにて、熊なども捕れ申す、

入間川の武士　我が里なんどは、山深く入らねば、猪猿も見かけぬほどながら、鶴雁鳧などは、秋の頃には田面を埋めて、持て餘すほど居り申す。ちと我等在所へもお越しあられい。

伊豆の侍　狩倉の話なら、先づ措かれませい。なう入間川の市には、よき絹商人も出るであらうな。

入間　近頃にては、鎌倉の町に習ふて、見世棚などもしつらへ、色よき絹どもを、あまた闊ぎまするわ。

下總の武者　入間川の絹市へは、某も忍うで參つたことがあつた。その頃都方の商人とて、能き切れ地を下したるものがあつたが、この鎌倉にも見當らぬほどの物であつたよ。

伊豆　三島の國府にも市が立つが、ここは海道ぢや、都よりの商人船が、沼津の海から荷を揚げて、それはそれは美くしい見世棚を飾り立つる。なう、我等が直垂の地を御覽あれ。

津久　先程より尋ねうかと思ふたほど、さても能い錦ぢや、士もこう飾れば こそ品もあれ、我等ごときに、むくむくしうては、山猿の罷り出たやうな、ははは。

下總　卑下もことによれ、あれ見させませ、なう、御自身で馬の口を取るほどに、儉しうせねばならぬ時代ぢや。

伊豆　和殿は左樣に云はるれど、我等は存じ寄りが違ふ、侍は侍らしう、身の廻りを拵へいでは。

津久　能き衣こそ及ばざれ、鎧、打物には應ふだけの精を盡くす。腹卷のちぎれ絲、縅の破れたは、見苦しうて身に着けぬ。

入間　それに阪東の習、我黨にては殊の外に馬を秘藏する、飼葉には麥を夥かに食ませ置けば、ついくりくりと裂ぜかへるやうになるものは、ははは。

伊豆　駒も岩乘なはよけれ、瘠せたは……あれ、……あのやうに瘠せたはな！

下總　いかにも瘠せた馬、ははは、や……瘠せた馬ぢやわ、ははは。

入間　これ程の御人數ながら、何方の大名なりとて、この所へ馬は繫がれぬ、大將軍ともあらうことか、同じ諸侍の身で、我等最中に馬を引寄せ置くは、近頃無禮な振舞ぢや、いで我等が追落とさう。

入間川の武士立上がる。

下　總　はれ、捨てて置かれい。

入　間　いやいや、侍と馬と同じやうの扱ひは無いことぞ。

と源左衛門の方へと來る。下總の武者も座を放れ、後方に從ふ。伊豆の侍、津久井の士は、座にありて凝視す。

入　間　そこな侍衆、この馬はなぜにそこに扣えらるる。

源　左　郎從とてもあらざれば、馬を引かせるに術なく、さりとて着到に付きたる身、わざと斯く御團居を放れて、御沙汰のあるを待ち申す。

入　間　とにあれ、御門の外へ引出されい。

源　左　最前も申すごとく、門を出づれば着到の表に違ふ、さあれば上を僞ること、此儀は平に御免あれ。

入　間　かほどに云ふても用ひられぬな、よし、さらば目にもの見せう。

と佩刀に手を掛ける。

下　總　ああ暫く。

と推隔つ。伊豆の侍、津久井の士も、立上りて出で來り、

伊　豆　三島の神馬とは事が變はらう、とうこの馬を引出させませ。

津　久　とう追出されい、舍人が無くば、たかがこの馬を放たるるまでよ。

と馬の右手に廻りて、轡を持つて引かんとす。馬躍り上り、思はず尻居に瞠と倒る。

津　久　あいた、あいた。

伊豆の侍、驅けよりて引起し、

伊　豆　如何めされた。

津　久　（足許を見廻し）何かに躓いたさうな。

伊　豆　（これもまた足許を見ながら）砂ばかり！　礫とてもないに。

伊豆の侍は苦り切つて、澁面せる津久井の士を介抱して、元の座に復せしむ。下總の武者も、入間川の武士の鎧の袖を引きて、

下總　御前近いぞ、無用になされい。

入間　御前近うなくば、おどれ目にもの見せうに。

と擬勢しながら、下總の武者に寛められて、これも元の座に復す。かかる折から、源藤太經景は急ぎ來り、着到つけの侍に向ひ、

源藤　なう、もはや御人數を御覽とある、諸國の侍衆も、着到の面に合はせて某が呼ばうに連れ、大場へ御入あれ。

武者等は各各立ちあがりて、御前に出づべき心構へを爲す。

源藤　その帳面をお見せやれ。

と着到帳を取りて押開き、着到つけの侍に、指もて差示しながら、

源藤　これまでは、先の通りな。

着到　それからが新らしい着到ぞ。

源藤　むう、下總國眞間郷、繼橋七郎舟有、主從三十騎。（帳面を一枚剝ぎなに、上野國佐野住人佐野源……

と讀みかけ、驚きながら四邊を見る。此方を注視せる源左衛門と面を見合せて驚く。

着到　おう、最前上野國の武者なりとあつて、唯一騎にて上られた人があつたぞよ。

源藤（獨語のやうに）いまだ我等が小藤次は上らぬさうな。

あなたにて陣鉦の音。

源藤　やゝはや、御合圖ぢや、まだ上野からは上らぬよな。
　　と門の外を見込む。
着到　上野からは、それ今の、その佐野源左衛門が……
源藤　云はれな。
　　と大喝す。着到つけの侍は驚きて源藤太の面を見る。
源藤　その筆を貸させられい。
着到　なに、筆を。
　　と不審ながらも差出すを、源藤太とりて、帳の面を抹消す。
着到　あら無差と……大切の御帳を、
源藤　萬事は某が承はりよ。
　　また陣鉦の音。
源藤　あつ是非も無や。

　　と着到帳を開きて、扣え居る武者等の前に出で、
源藤　いかに各々聞かせられい、近郷より集りの御人數は、唯今の鉦の音にて、はや御前に出でたるならむ。方方もこの帳の面に合はせて、急ぎ大塲にて御披見に入り候へ。先づ一番には津久井三郎どの。
　　津久井の士、一禮してあなたへ去る。
源藤　次ぎは、入間川の住人狹山平五どの。
　　入間川の武士、これも一禮して去る。
源藤　伊豆國三島の里猿投一郎どの。
　　伊豆の侍も一禮して去る。
源藤　下總國眞間郷繼橋七郎どの。
　　下總の武者も同じく去る。源藤太は着到つけの侍の前に帳を置きて去らんとす。源左衛門は立出でて

源左　源藤太どの、など某の名を讀み落とされたぞ。

源藤　ほう、源左衛門か、なにと思ふて鎌倉へは在せられた。

源左　事新らしき問ひごと、諸國の御軍勢が見えさせられぬか、それは措き、着到の御帳より、某の名をば、などに省かれた。

源藤太は帳を突き出し、

源藤　あらぬ名は得讀めぬ

源左　あらぬ名……

と云ひながら、源藤太が開きて示す帳を見て、

源左　や、上野國にては、第一番の着到たる某の名字を黑黑に擦られしは、むむ、さては今の程、筆持つた御邊の所爲な。

源藤　これか、おうこれか、塗つたは身ぢや其方には、叔父にあたる、源藤太が情ぢやわ。

源左　な、なに情とは、

源藤　御沙汰の上にて、佐野庄三十餘郷を、召放された不覺人、御前に出るは恐れ多い、さては着到の名字もかく眞黑黑に塗り消いたよ、あははは。

源左　その庄園を召放たれしも御邊の仕業、長上の義を重んじ問狀の理を明らさまに得書かぬからのこと、さ、それは今云はでものこと、某流浪は致せども、御氣色を損ぜしにも候はず着到に付かうとて苦しきことの有らう筈なし、何卒御前へ御披露下されい。

源藤　披露の役は叔父の某、かはゆい甥の殿の、御不興蒙るを、知つて左樣のことは出來ぬ、はははは。

源左　たとへ御不興を蒙らうとて悔むことなし、さ、御披露を下されませい。

源藤　ならぬよ。

源左　ならぬとあらば頼むまじ、某も中門近くに參らう。

源藤　おう、往かれい、往かれい、凡そ軍中の掟、召なきに參るは謀叛、謀叛人となつて、二つない首を刎られたくば、さあ行け。

源左　むむ。

源藤　行きやらぬか、むはははは、はて、えい姿なう。

と着到つけの侍に、以前の帳を返す。折から「着到」と云ふ聲聞こゆ。源藤太、表の方を見遣り、

源藤　おう來たわ、小藤次が參つたわ。

と喜ぶ。源藤太常景の一子、同苗小藤次常家、白金物打ちたる絲毛の具足、綺羅びやかに粧ひし馬に乘り、舍人に鼻綱を取らせて入り來る。續いて乘替の馬、これも舍人に鼻綱を取らせたるが進み來る。小藤次、父を見てひらりと下り立つ。

源藤　やあ、小藤次、何とて斯くは遲なはりしぞ。

小藤　御教書に先だちての早打、取るものも取敢ず、弱き馬は道にて乘捨て、息もくれず驅付けたれば、天晴れ一番の着到ならんと存ぜしに。

源藤　何はあれ、國國の勢は既に御前に揃ひつらむ、休息の間もあらねば、中門内の大塲へ急がれい。

小藤　さらば父上。

源藤　早う參れ。

小藤　はあ。

小藤次急ぎ去る。

源藤　汝等はその馬を引いて、御門外まで休息せい。この所は馬を繫ぐべき所にはあらぬぞ。

と源左衛門を尻目に掛けて云ふ。舍人等、馬を引いて去る。源藤太は着到つけの侍に、

源藤　上野國にては、第一番の着到、悴の名をお記し下されい。

着到　畏まつた。

と筆を取りて、帳面にあげる折。「早打ざう」「早打ざう」と呼ばはりつつ、青竹を割きたる先へ挾みたる狀を肩にして、

九州よりの早打　早打ざう、早打ざう。

と云ひながら過ぎ行く。源藤太あとを見送り、

源藤　何事の早打ならむ、御前間近にて伺はばや。

と過行かんとす。源左衛門はその袖を控えて、

源左　さては御披露は應ふまじきか。

源藤　あら愚や、まだ其樣づれを、

と袖を拂つて去る。源左衛門茫然として、その行先を見送る。

……熱涙……點……點……源左衛門の馬、靜かに歩み出で、主の肩に頸を摩り付く。源左衛門その鼻面を撫づ。問注所の侍出て

問注所の侍　右平次どの、もはや執筆は止めにせられよと、奉行から仰せが出た。

着到　着到つけを止めいとか。

問注　中中。

着到　さらば着到の座を退かう。

問注　遠侍にて憩はうぞ。

着到　いかにも同心せう。

二人連れ立ちて彼方へ去る。馬その後を追ひて中門の方へ

歩まんとす。源左衛門これを止どむ。馬強いて進まんとして、鼻綱に扣えらる。

源左　そちも大塲へ行きたいか。

と馬を引寄せ、

源左　心は誰れに劣らねども、錆長刀に破れ鎧、身の廻りのさま悪しきに、知らぬ人にまで蔑視まれ、言葉を掛くるものもない、これも貧のなせる業、辛しとて誰れを恨まう、世の中の廣さは、我等に劣る人もある。なう、それ去歳の雪の日よ、飢に疲れし旅僧の、我等が方へ宿らせられ、粟粥を啜られて、それよ、鉢の木を切り火に當てたれば懇ろに一禮云はれたがあつた。あの樣に詫しき法師に較べたらば、馬を持ち、具足を着け、長刀もちたる源左衛門、まだまだ富貴の身にこそあれ。貧を恨むな！　叔父に惡名を立つるが厭さに、好んで爲つたる今の身ぞ、富貴を望まず、權威に阿らざる常世なれば。なう、飼葉も存分には與へぬ其方を、不便ながらも追立つて、まこと一番に馳せ參じたれば、すわ鎌倉との誓は果たした。その上の功名が何あらう、世の人口は心の外な！　戰塲にては、思ふ敵と寄合ひ打合ひ、討死すれば、一定事は濟むまでよ。そちも其折は、郎黨代りに我等と死にね、むははははは。

寂じ氣に笑ふ。二階堂の雜色、四邊を見廻しながら出づ。

二階堂の雜色　はれやれ方圖も無いことを仰せ付けられた、この夥だしい人數の中で、武者一人拾い出すとは。（と源左衛門に目を付け、小膝を打ち）あれぢや。

とその前に至りて會釋す。源左衛門は不番氣にその面を見る。

雜色　なう、御前にてお召ぢや、さあ、御前へ出てられませい。

源左　なに、某を御前へ、それは定めて人違ひ……

雜色　いやいや、名こそ承はらね、御身に相違ないと申すは、拗れたる具足を着、錆びたる長刀を持ち、瘠せたる馬を自身に扣えたる武者、あはははこの御人數の中ぢやが、この仰せには、たと合ふたは御身一人、何の人違へ、さあ、さあ、身共と一緒に、御前へ出られませ。

源左　むう、さては叔父御の惡心未だ止まず、謀叛人と申し掠め、罪科に落とさむ結搆な！　よしよし、それも天の運、いかにも御前へ罷り出でやう。

雜色　さあさあお來やれ。

源左　馬は？

雜色　そのままに置かせませ。

源左　むむ。

と馬に近づき、首を摩りて行かんとす。馬、首を曲げ、頤を源左衛門の肩先に掛けて止どむ。

雜色　さあ急がせられい。

源左　承はつた。

と馬を突放し、雜色の後より、長刀を杖にして彼方へ行く、引違へて着到つけの侍出づ。此方より源藤太出で、源左衛門の後ろ影を見送り、不審氣に、

源藤　なう、今のは二階堂殿の雜色な？

着到　いかにも二階堂殿の雜色

源藤　それが源左衛門を率て行くは？

着到　あの瘠せ武者を連れて行くは？　さてはあの帳を御覽じたか。

源藤　なに書き改めもせぬ着到帳を、

着到　二階堂殿に取られましたわ。

二人顔を見合せて考へる。向ふより小藤次常家弓を引き色を失ふて來る。

源藤　小藤次、如何致した

小藤　父上、これにか、大事になりました。

源藤　なに、大事とは？

小藤　鎌倉には應ふまじとあつて、人數の場から、追出されましたるわ。

源藤　なに、なに、大場から追出されしと、

小藤　はあ。

この時、問注所の侍走り來り、

問注　やあ、源藤太どの此所にか、大事が出來ましたぞ。

源藤　小藤次が追はれしと聞いて、不審の折からぞ。

問注　それが大事の始りにて、あの源左衛門常世へは、佐野庄三十餘郷を返さるるとの御沙汰が出た。

源藤　某が預りの佐野庄を、源左衛門に返さるるとや。

問注　筑紫の兵亂も、事靜まるとの注進にて、諸軍勢にも暇が出た、追付け歸らるるであらう。

着到　さては先程の注進は、左樣の吉事にてあつたるか

藤　各各には吉事なりとて、我等には大の不吉。

と苦り切るを見て、着到つけの侍と、問注所の侍とは、目交せして去る。源藤太は源左衛門の馬に目を着け、

源藤　なう怜、この儘歸るも忌忌し、この馬を追放し、おう、あれ、二階堂を御供にて、此方へ渡らせらるる最明寺殿へ乘掛けさせ、常世めが落度を造らう。

小藤　あまりと申せば口惜しし、時に取つての腹癒。
父子は馬の鼻綱を解き、暴ぶる馬を引いて、木蔭へ身を隠す。
あなたより、最明寺入道時頼は、二階堂信濃守を御供にて、此方へと渡らせらる。以前着到の武者ども從ふ。折から馬躍り出づ。最明寺殿、身を交はせば、馬は並立つ武者の中を、右往左往に狼藉す、長刀持ちたる源左衛門、驅け出でて、片手にて馬の口を取り、手綱を取つて木に繋ぎ、最明寺の前に至り、

源左　こは手綱を何者か引切つて……とにあれ、某が過り、御門内を騒がせし罪、何やうの御咎めなりとて、身に受け候ふべし。

最明寺　これほどに武者が居つて、これしきの暴れ馬を靜め得ぬこそ耻づかしけれ、さまでに事譯云ふな。

源左　はあ、世に有難き御仰せ、恐れながら佐野庄を返したまはりし御厚恩にも、彌増すほどにも思はれまする。

最明寺　さほどまでに喜ばしいとや、我れ諸國を遍歴するとて、一所不住の沙門に俏し、去歳の冬、汝の家に宿りし時、雪の夜の寒さ堪え難かりしを、秘藏せる鉢の木を、焚木がはりに切燻べて、當たらせし志の程、何時の世にかは忘るべき！　おう、その喜びに返報せう。

源左　その御錠こそ、何よりの御返報。

最明寺　いや、いや、かの折の鉢木は、梅、櫻、松。梅の代はりは加賀の梅田、櫻の代には越中の櫻井、松には……おう……佐野には近き松枝の庄。二階堂よ。

二階堂　はつ。

最明寺　やがて狀書け、身が判を据ゑやう。

二階堂　仰せ畏つて候。

最明寺　常世、鎌倉へ上りたらむには、興がる法師と尋ねよ、披露の縁になり申さうと、云ふたを思ひ當つつらうな。……さることを好んでする時頼法師よ！　さるにても其時の詞を違へず、一番に馳せ參じたるこそ神妙なれ。なう常世、兵亂靜まつたりとの俄かの早打は、天下の爲めにも、また汝が爲めにも仕合せよきぞ、見よ書き直す隙もなく、消したる儘の着到帳は、そがままに身が手に入つた、ははははは。

源左　夢にてや候ふらむ、ただ喜びの涙ばかり……

最明寺　煙と消えた梅も櫻も花が咲いたの。

馬、高嘶きす。最明寺殿は頤にて令する所あり。二階堂旨を享けて、

二階堂　やあ、お暇の出てたる國國の諸軍勢、はや立ち候へ。

一　同　はあ。

と立上がる。源左衛門も立上がり馬の鼻綱を解き、木蔭より伺ふ源藤太父子と面を見合せ、聞こえよがしの大聲にて、

源左　なう、今の仰せ聞いたか、これほどの御氣色、さぞ羨む人もやあるらむ。

手綱を取りて一廻り廻つたり。

（幕）

父の聲音もかうかく響 … 箱王丸 …… 市川左團次

明治四十二年一月 …… 明　治　座

破戒曾我

（場）

箱根蘆の湖畔

（時）

建久元年の始

（人）

曾我箱王丸
箱王の兄十郎祐成
大磯の虎御前
鹿野岩名丸
澁谷蔦若丸
鹿野下人勇作

澁谷下人藤次
工藤家人青金源五
箱根の僧杢山
外に參詣の旅人。来迎びの老夫。

箱根蘆の湖のほとり。小さき崖ありて、御手洗の水湧き出でたるところに、神繩を張る。その流れの末の湖水に入るところに、小さき石橋あり。崖の後方は、權現の森に續きて、杉の木蔭暗し。やや下手によりて、水神の祠あり、傍らには高燈籠を立て、少しく後には、二三の長松亭として天に冲す。祠の緣に、箱根の同宿杢山は、工藤の家人青金源五と、物語りつつある。

源五　なう、杢山どの、なにとも合點の行かぬ儀ならずや。

杢山　十郎どのとて、足があれば歩かうず、曾我の宿所を立出でて、箱根路へ掛かられたとて、別に怪しいこともなからう。

源五　和僧は日頃の欲にも似合ぬ結構人ぞ、今日は箱王の得度を受くる日でないか。

杢山　いかにも今宵は、箱王が黑髪を、こぼ、こぼと剃りこぼち、我等ごとき、の、圓い頭臚となさるるのぢや。

源五　それにつき、我等も今日罷り越す、さいつころ殿の祐經、鎌倉殿の御供にて、當權現御社參の折節、はからずも箱王丸を見られた、なかなかの利かぬ面付、殿を畝と思ひ込んだる眼の鋭どさ、油斷ならざる相好なりと、おん心にかかる折から、今夜箱王出家のよし、和僧よりの注進を聞こしめし、一方ならざる御滿足ぢや。

杢山　かねてよりのお頼みなれば、かの箱王の立居振舞、折々の御狀に詳

しくは申しあげたし。しかし、それほどの御配慮とあらば、只今の御威勢にて、なぜ彼等をば誅せられは爲したまはぬ。

源五　それがなる程なら、かかる心遣ひは入り申さぬ、殿の威光が強からうと、御法を缺くことは應はぬ。さるによつて彼兄弟に、少しの落度もあらば幸ひ、それを云ひ立て、重き罪科に行はさしめ、枕を高く休ませ申す。

李　山して、十郎が宿所を出でしを、心掛りと仰せらるるは。

源五　されば、さ、並ならぬ殿を敵と狙ふには、加擔人なくては應はぬ、十郎が力と頼むは箱王丸、今宵出家を遂げたらば、年來の望みも仇、彼れが宿所を出でたも、箱王が出家を妨げる、所存ならんと睨みを付けた。

李　山　左樣の次第かは知らねども、寺にても定まつたる出家の大禮、たとへ兄上の十郎殿がしやしやり出ても、止めることは應ひますまい。

源五　出家になるを邪魔立てなさば、それを便りに罪に落とさう。

李　山　もしまた寺を脱け出でたらば。

源五　兄と違つて、骨太の箱王丸、あれを寺から放れさするは、虎狼を里へ出すよりも恐もの！　その心遣ひとて、今宵一夜は多くの家來と共共に、宿の出口に待ち伏せなし、彼等を切つて終ふまでよ。

源五は彼方を見て、

源五　や、あれへ來るは十郎だ。

李　山　いかさま、十郎どのらしい。

源五　待て、某は面を見知られて居れば、和僧と昵近のさまを見せては、後日のために便りが惡い。

李　山　左樣なれば、御本殿の石階の下より、この森の後方を右へ折れ、本街道へ拔けて出る小道を通られたが、宜しかろ。

源五　さあらば、なほも心を付けられい。

杢山　はて、杢山和尚が受け引いた、さまでの御配慮は御無用になされませ。

源五は杢山と別れて、石橋を渡りて去る。曾我十郎祐成出づ。道すがら物を案ずる體にて、石橋の方へと歩む。杢山後より、

杢山　もし、もし。

と、聲を掛けたれども、十郎には聞こえぬと見えて、そのままに行く。十郎思はず石橋の石に躓き、少しく蹣跚くとき、

杢山　もし。

と云ふ聲、耳に入りたるにぞ、振りかへり、

十郎　何事ざう。

杢山　御身は曾我の十郎殿にて在されう。

十郎　いかにも、某は、十郎なるが、

杢山　時折、箱王どのを尋ねさせらるるを物の間より見受けました、私はこの山の同宿の出家。

十郎　それは日頃弟が、さぞ御造作に預ることであらうず。

杢山　いや左程にはござりませぬ。また今日は箱王どの、御出家の御祝儀、お愛でたう存じまする。

十郎　愛でたきか、愛でたうないかやはり愛でたいのかなう。

杢山　つきましては得度の式に、お立會の御登山か、師匠の別當へこの由を、早速申し通じませう。

十郎　いや暫く某參りしは、その儀にはおりない實は急急箱王に、談合のあつて登山致した。少しく他聞を憚ること、そと此處まで呼び出だしてはたもらぬか。

李山　箱王殿を、これへ請じませいとか、安い御用、暫時これにて、お待受けなされませ。

十郎　早速の承引にて、近頃の御芳志、さらばお願ひ申す。

李山　急いで參りませう。

李山は事の始めよしと、冷笑みして、石橋を渡りて去る。

十郎　頼もし氣なる人ぞ。

あとを見送り、廻り行く日足を見て、

十郎　剃髪の時刻も、はや二た刻。

力無氣に云ひつつ、縁に腰を下す。かかる所へ、大磯の遊君虎御前、急ぎ足にて、石橋を渡りて出で、十郎を見て、

とら　あつ！　殿、これに在したか。

十郎　思ひ寄らぬ虎御前、なにとして此ところへ。

とら　昨日俄かに北條殿の伊豆の御館に招かれての歸るさ、海とはかはるおもしろさに、拾ひ歩りく汀より、はからず見受けた殿の御姿、參つて見れば眞の君戀しきお人を見るときには、女の眼は曇らぬものな。

十郎　ははは、はからぬ處にて、嬉しき人に逢ふたるものかな。さりながら、今は此處にて待つ人あり。おう、今宵は其方の宿を尋ねう。

とら　あら詮もなや、後を慕ひて參りしものを。

十郎　恨みは然ることながら、我等の中の大事の談合。

とら　さては敵の……。

十郎　こは、音高し。

とら　その敵の工藤なりや、今がた家人の青金源五か、それそれ、今あれに居た法師と、ここで久しう話してであつた。

十郎　なに、かの法師と青金と、ここにて語合ひ居つたとか。

とらあい。

十郎はて？

とらまうし殿、ここにて御談合のお相手は、一定弟の箱王さま、人に聞かれてならぬことなら、見られても爲めよくあるまい、こりや一層明日のことに。

十郎はて、いま二た刻と經たぬ間に、弟は法師と姿が變はるわ。

とらさては箱王様には御出家を？

十郎故郷の母の責め手紙に、愈愈今夜が得度の儀式。

とらその愛でたさを、悔やませ顔の御氣色は。

十郎敵打ちの加擔人の、失せるが悲しい。いかにもして彼れに逢ひ、今夜の出家を思ひ止ませ、共に工藤を狙はんと思ひ立ちての登山なるぞ。

とらさあらんには此處にて、御對面はなほのこと敵に用心を增させるばかり、その儀なれば殿に代はり、箱王さまへ妾より詳しうお頼み申しませう。

十郎箱王とても一期の浮沈、まだ見も知らぬ和御料の口より、かかる大事を語られしとて、やはか答へは致すまじ。

とらさいつころの夜話しに、妾のことは箱王さまへも、お物がたりが有つたとやら。

十郎名こそ承はつたれ、逢ふは今が始めなるに。

とら兄上に添へば嫂ぢや、夫に代はるが何の不思議。その燧袋貸させませ、妾が見知つてよりも久しい品、それを證明に弟の殿へ、初見參に入らうぞや。

十郎は、燧袋の紐を解きて虎に渡しつつ、

十郎　さまでに望むを、否まんも如何、某は暫く四邊を逍遙せう。

とら　人屋のほとりには、お見知の長の小者、手輿と共に居りまする。

十郎　大磯の者どもとや。

とら　はい。

十郎　さらば其のあたりに憩ひ、耳よき左右を待たうかや。

十郎足早に湖に沿ふて去る。虎その後を見送る。こなたより、

權現へ參詣の旅人、あなたよりは米俵を負ひたる老人、行違

ひて通過す。やがて以前の僧李山箱王丸を伴なひ、石橋を渡

りて來る。

箱王　兄上は何れにおはす。

李山　あの水神の祠の縁に、待たせられて在さるる。

李山まづ至り、虎を見て不審の體にて、

李山　これ、そこな女性に、物を問ひ申す、この處に二十歳あまりの美い殿

は在さなんだか。

とら　その殿なら、今の先さ、あれ、あなたへ行かしやれた。

李山　はて、怪有な！

とら　その殿の云はるるには。

李山　なんぢや、その殿の申さるるには。

とら　いんまにここへ、お僧と兒と參らるるが、その兒はこれへ殘し、お僧

には、あれ、あなたの森へ來てくれよと言傳てられた。

李山　我等一人て森の中へ、はて、近頃心得ぬ話しなれど、お僧と兒とここ

へ來るとの話しも合ひ方、さあれば箱王どの、御身は暫くこれにて待

受け、我等はひと走り、殿をこれへ招じに參る。

箱王　待つことは、厭はねど、女人とただ二人にては。

李山　はれ、厄體もなや、まだその口上一夜さ早い、今夜を過ぎては女人の手からは、物を貰へぬ不自由さ、受けらるる布施なら今のうちに、概分受けこむが利得ぢや。

と、袖を止どむる箱王の手を、振り拂つて、李山は彼方へと走り行く。

とら　申し箱王さま。

箱王　はて、我名を知つたる御身は、

とら　姉ぢや。

箱王　なに姉！　箱王には二宮の御の外に、姉とてはあらざるに。

とら　御身の兄御前祐成様に添ふからは、等しう姉ではあるまいか。

箱王　さては御身は大磯の、

とら　虎と申す女ぞや。なう箱王さま、かの僧歸らば話しはむつかし、祐成様には、工藤の家人のつき添ひて、潜めきての語合ひに、便り悪ししと見るからに、よろづ妾に含められて、此場を密と立退かされた。

箱王　して、箱王へ談合とは？

とら　今夜の御剃髪を、おぼしめしかへて下さりませ。

箱王　なに、法師になるを止めよとや。今となつて……よしなきお勸め。

とら　さては御父の敵を、打たれぬ心か。

箱王　あら情なや兄御前、物心知れる頃より、父の敵は忘れねど、現に殘れる母上の、毎日毎夜のおん意見、この頃漸く思ひを返し、こよなき智識ともなつて、非業に果てたる父尊靈の、御菩提を吊らふも、孝の道のひとつよと、思ひ定めてさむらふに、また悪心の弓矢の意地を、歸せとはうらめしや、今ははや甲斐なきお仰せぞ。

とら（冷やかに）ざても嚴じき孝道や、御父河津殿もあの世にて、さこそ涙

に噎せばせたまはむ。

箱王（半ば獨語のごとく）讀み覺えたる法華經は、毎日に怠ることなく、父の菩提に參らする。

とら（これも半ば獨語の風にて）敵は時めき世に誇り、子は墨染に姿を變へて佛弄りを見そなはしたら、草葉の蔭にて喜びたまはむ。

箱王（これもその調子にて）一人出家すれば、九族天に生まると云ふ、父母兄弟、乃至、親族一類、成佛するときは、これ孝道の大なるもの。

とら（やや面詰するものごとく）一家一門佛果を得れば、敵の工藤もまた一家、敵の爲めにも出家の功德を、分けらるるとは慈悲過ぎた。

箱王（やや答ふるがごとく）佛になれば敵はなし、平等利益同一體、誰れ人なりと哀愍するが佛の慈悲と承はつた。

とら　さすがは寺にてのお育ち、口賢い虎なれど、あまりの道理に言句も出ぬ。ああ、此方だけは安心もなろ、敵恐さに法師になつたの、世の陰口も、その心では掛けられまい。したが、祐成樣は何とする、あ、一人にては及ばぬ敵、悶え死にならせらるるが身の終り、兄に孝を捨てさせたまふも出家の德！　なう、然にてはおはさずや。

箱王……

とら　お答へのおはさぬは、御思案を換へさせられてか、なう、箱王さま。

箱王……

とら　これほどに申しても！　ああ。

と泣き伏す。箱王傍らより背を撫でんとして飛び退き、思ひ煩ふ。

とら　箱王さま、父の敵は？

箱王　煩惱こそ大敵よ、法師となる身に、さる小敵は目な掛けそ。

とらさらば、かほどに申すをも。

箱王　種種諸惡趣、地獄鬼畜生、生老病死苦、以漸悉令滅……

箱王丸は亂されまじと、小音にて普門品を讀誦するにぞ、虎はやや嬌瞋を發して、かの燧袋を箱王に投げ付け、

箱王どの、その品は覺えがあろ、兄の殿が、證明に渡された燧袋、今はもう無益、兄君の一生を不孝に送らせ、その身は大德にも、大僧正にもならせたまへ。

虎去る。箱王は燧袋を取りあげつつ、

箱王　兄の……一生を……不孝に……送らせ……。

と獨語つ。あなたよりは、伊豆國、鹿野介宗茂の家子勇作、老の身ながら、宗茂の子息岩名丸へ、屆け申すべき、時服などを一荷として肩に負ひ、竹を杖にして來りしが、此處を過ぎらんとして、

勇作　なう兒衆、お仲間に、鹿野の若殿、岩名丸と呼ばはせらるるを、御存知かの。

箱王　おう、岩名どのの宿所は、この坂を上り、二端目の坊へ行てお尋ねあれ。

勇作　それは千萬忝けない、やあ無禮氣ながら御身樣は、河津殿の忘れ形身、箱王丸殿……とやらん……には在さぬか。

箱王　某はいかにも箱王丸。

勇作　この山に在すとは承はつたが、さても能う似參らせた。

箱王　誰れに似參らせた。

勇作　河津の殿にそのままぢや。

箱王　なんと申さるる。

勇作　この爺は伊豆のもの、河津殿の稚いより、大きうなるまでお傍に居た。今は同國の鹿野の家に奉公を致し居れど、今日目のあたり御身を知れば、御父河津殿の、稚な立ちと瓜二つ、昔のことの偲ばれて、思はず涙が翻れまする。

箱王　さほどまでに我が面が、生みの父に似たるとか

勇作　おう、お、その聲音までも！（箱王の顔を見詰めながら）寸分も違ひませぬ。

かかる折、あなたより、兒岩名丸は、同山の兒蔦若丸を伴なひて歸り來る、石橋の方よりは、相州の住人、澁谷馬允重介の下人藤次、これも主の子蔦若丸の許へ、物の具持ち來りての歸り路、空荷を擔ぎて來りぬ。岩名丸は、箱王丸に聲を掛け、

岩名　箱王どの。

箱王　岩名どのか、おう、蔦若どのも一緒ぢやな。

藤次　若君、藤次にござりまする。

蔦若　藤次、よう來たな。

勇作　岩名さま、勇作爺でござりまする。

岩名　爺、今來たかして父上にも、母上にも、お變りはないか。

勇作　はい、お變りはござりませぬ、皆皆樣が御息災にて渡らせられまする。

岩名　それは重畳ぢや。

勇作　御荷物は御座敷にて開きませう、先づ御文を御覽下さりませ。

と勇作は荷の中を探す。こなたにては、

藤次　若君、お物の具に添へて、大殿、大方殿よりのお文は、確と別當の御坊へ預け置きました。

鳶若　左様か、父者からも、母者からも、文が参つたか、して誰れも別狀はおりないか。

藤次　ええ、御一同お揃ひで、しかもまた弟御前さまが殖えさせられた。

鳶若　さらば、返し文を認めうほどに、坊まで戻つてたもれ。

藤次　畏まりました。

勇作　この間に文を取り出して、

勇作　岩名さま、お文は是れでござりまする。

岩名　おう、文か、（と受けとり）其方は鳶若どのの家人と共に、あれへ行て休め、我等も後から直ぐに参らうぞ。

勇作　はい。

藤次　さらば案内を仕らう。

勇作　それは近頃ぢや。

二人連れ立ちて、石橋を渡りて行く。あとに箱王は、二人の兒に向ひ、

箱王　岩名どの、鳶若どの、父君よりも、母君よりも、共に御狀が参られてか。

岩名　箱王どの、お喜び下されませ、近頃無事ぢやによつて、花の頃には打ち揃ふて、登山せらるると申し越された。

箱王　それは近頃祝着に存じ申す。

と文を擴げながら云ふ。

鳶若　箱王どの、某への文はまだ見ませねど、別狀も無いとのこと、それに當年を過ごしては、寺を下がりて弓矢の道に、携はれとの定め、勇ましうはおざれども、御身始め各各に別れまするがお名殘惜しい。

箱王　別れるは辛いものな！

鳶若　生別、死別、別るるは、何より辛う思はれまする。

箱王　某には、父のお文のたまはられぬが何よりも辛うてならぬ。

岩名　あら！　まことに箱王殿の父君は、とくに失せさせたまひしを知りながらの辭儀の無さ、平にお許し下さりませい。

箱王　受けるほどは受くるが專、寺へ上りて四年越、父よりの御文を、せめてただの一通なりと……。

蔦若　箱王殿、申されたとておん文の、來やう筈はなし、それよりは我が部屋へ參られませ、また紙筆など、分けておまさうほどに。

箱王　忝けなし蔦若どの、多かる兒のうちにても、岩名どのと御身とは、分けて睦ましう口も利く、御芳志のほどは忘れまい。

蔦若　今宵もまた師の別當に、歌枕の物語聞かう。

岩名　いやいや、今夜は箱王殿が得度の日なれば、さる暇もおはすまじ。

蔦若　げに今宵にてありしよな、さあらんには事多からむ、箱王どのにも歸らせたまはぬか。

箱王　いざ、某も伴なひ申さう。

二人は先へ、箱王も後より立ち、石橋を渡るころ、向ふにて人の呼ばう聲。

杢山　ほうい、ほうい。

箱王　杢山が、某を呼ばうと見える、各各にはお先きへお出で下されませい。

岩名　さらば後ほど、お目にかからう。

蔦若　さらば。

箱王　また逢ひ申さう。

二人はこの塲を去る。箱王あなたを見遣り

箱王　杢山は谷を下りて來るさうな。

日暮れなんとす。烏雀鳴噪す。箱王丸は、水に映つれる我が影に見入る。鐘一つ鳴る。その音に瞑想を破られて、

箱王　父の面差に違はぬとか。

第二の鐘聲。

箱王　父の聲音も、かう響くか。

第三の鐘聲。

箱王　あら荒涼じきおん相や。

第四の鐘聲。

箱王　いつまでも斯く……あさましう……。

第五の鐘聲。

箱王　うつし世に存らふる敵！

終りの鐘聲。

箱王　父に似たれば父は惡相父の心か、我が姿か、その面を和らげんこと、僧にては思ひもよらじ。

李山　ほういい、ほういい。

と李山叫びながら出で、

李山　はれ、暗いのに、まだ居られたか、して先程の辨財天女は。

箱王　辨財天女とは。

李山　美くしい女性のことよ。

箱王　あの女は宿の方へ參られた。

李山　して十郎殿には。

箱王　御坊が探しに參つたではないか。

李山　探すことは探したれど、見當らぬて……。

箱王　埒もなや。

箱王決意したるさまにて、石橋を渡り去る。あとより杢山は、

杢山　ほうい、ほうい。

と呼ばはりつつ追ふ。日全く暮る。十郎は虎と伴なひつつ湖の方より來る。

十郎　鐘が鳴つては剃髪に間もあるまい。

とら　追付け時刻になりませう。

十郎　髪を落とさぬうち、せめて今一度見參したいぞ。

とら　左樣にござりまする。

寺の方より岩名丸、油差と燈火とを持ちて來り、高燈籠の下に立ち、綱を引いて、燈籠を下す。

とら　お兒さま、その御燈は。

岩名　こりや水神より權現樣への御献燈ぢや。

とらなに、權現樣への御献燈とや。

と、虎は宮居の方を拜す。

十郎　なう兒殿、御朋輩の箱王丸御存知か。

岩名　よう知つておや。

十郎　若き侍が、急急に逢ひたいと、申し次いでは給はらぬか。

岩名　易いことぢや、さらば宿坊へ案内を申さう。

十郎　いや、人目を憚る用事なれば、此處へ呼び出いてたまはりたい。

岩名　箱王どのは今夜の得度！　得參れまいとは思へども、お取次は申して見やう。

十郎　頼み入りまうす。

岩名丸は元の道へと走りかへる。

とらよしなき妾の智慧立てにて、お望みも應はぬ罪、お免し下さりませ。

十郎　それも某を思ひてのこと、なるもならぬも、時の拍子、

とら　妾の口の姦しさに、箱王さまは、さぞお腹立にて入られうな。

十郎　和御前の口一つにて、さまでに憤ることかは。

この時、箱王丸は、小さき刀を帶し、小さき包みを背にして走り出づ。

十郎　や、箱王どの。

箱王　兄上か。

と取縋がる。

十郎　今の兒の言傳聞いてか。

箱王　いや知らぬ。

十郎　して、何處へ。

箱王　兄上のお許に。

十郎　何用に。

箱王　情なや、敵を打たうず爲めに。

十郎　さては和殿も思ひ立つてか。

とら　箱王さま、今ほどは無禮氣なることを。

箱王　いや、それとても、我等が爲めよ。

袂より、以前の燧袋を出だして、虎に渡す。虎無言にて受けとり、嫣然として十郎に帶せしむ。かかる處へ李山走せ來り。

李山　得度を嫌ひて、寺を逃げやうとは憎い奴ぢや、さあ、別當殿の方へ參れ。

と、箱王の襟筋を握んで、引連れ行かんとす。箱王丸その手を取つて投げ付け、小腕を捩じ上げる。

とら　や、あの僧は。

李山　や、この女性は。

十郎　それこそ敵の廻しものぞ。

箱王　おのれ痴者、いでこの湖の底に沈めう。

十郎　ああ、これ、無益の殺生ぞ。

箱王　寺に居らざる兄人に、殺生戒を諭されしよ。

十郎　して和殿は。

箱王　人に面を知られたれば、あれなる森の直中の、木根岩角を踏分け行かむ、また兄上は虎御前と、正しき道を歩ませたまへ、必ず先きへ驅け抜けて、峠の上にて見參なさむ箱根の山は霧深ければ、道不案内の兄上には、片割れ月は役立たず、むむ。

と、片手にて、高燈籠の紐を解きて引き下し、燈籠を外づして、

箱王　これにて道を照らさせたまへ。

と、虎に渡す。十郎見て、

十郎　勿體なのことながら、時の用とて御燈を……。

宮居の方に向ひ、恭しく坐して、腰の扇子を抜きて前に擴げ、禮拜を終り立上がる。此間に、箱王は綱を引き延ばして、李山を縛しめ、

箱王　高きに上がりて我我の落ち行く先きを見屆け、工藤へ逐一注進せよ。

李山　免させられい、免させられい。

と叫ぶ。箱王丸は李山の腰にせる手巾をとりて、それにて猿轡を嚙めて、綱を引き上ぐ、李山は高燈籠の竿頭に浮由す。

箱王　さらば兄上、急がせられい。

十郎　さらば。

とらおさらば。

二人は、元來し道へと去る。箱王は綱の端を竿の根元に、結びつけ終りて、

箱王　ははは、所がら天狗の空を飛ぶとや見む、むははははは。

と、釣るされたる杢山を見て笑ふ。寺の方にて、兒の聲す。

蔦若　箱王どの、箱王どの。

岩名　箱王どの、箱王どの。

箱王回顧して。

箱王　ああ！　師匠の坊には！

と、獨語ちしが、思ひ切つて一散に驅け入る。あとへ二人の兒、並びに、二人の家子、勇作、藤次、松明を手に走せ來る。湖の方よりは、青金源五、これも松明を持ちて來る。杢山の猿轡の手巾外れて地に落つ。源五これを見て怪しむ。上にて、

杢山　免させられい、助けて！

と叫ぶ聲聞こゆ。

蔦若　あれ、高燈籠に。

各各頭をあげて、

勇作　誰れぢや。

源五　何者ぢや。

各各、松明を翳す。

岩名　あれ、あれは杢山ぢや。

藤次　この寺の法師におざるか。

岩名　寺の僧人ぢや。

勇作　何はあれ、下さいでは。

勇作、藤次は、高燈籠のもとに立寄り綱を解きて引き下す。

李山　あいた、あいた。

源五　これ李山、なにとした、

李山　箱王が失せた。

源五　なに失せた、して、どの道を？

李山　あの暴れものが、私を縛つて。

源五　縛つたのは承知した、して何れへ參つたぞ。

李山　この森の中を、眞一文字に。

源五　なに、晝さへ人の通はぬ所を。

李山　天狗のやうに、飛んで行つた。

各各、顔を見合はせて驚く。折しも、雲間を破りて片割れ月あらはる。

（幕）

（終）

史劇十二曲

明治四十二年六月十二日印刷
明治四十二年六月十五日發行

（定價金九拾五錢）

著作權所有

著者　山崎紫紅
發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　振替貯金口座東京二百四十番　博文館

福地櫻痴居士作(脚本)

芳哉義士譽

全一冊洋裝菊判
紙數百五十二頁
正價金三拾錢
郵税金六錢

此脚本は櫻痴居士の新作にして團菊兩優が歌舞伎座に於て演ぜしもの其筋書は赤穗義士復讐事畢りて諸侯四家へ預らる大石内藏之助等十七人は細川邸に在りて慎んで幕府の裁決を待つ幕府にては其處刑に關して議論兩派に別れ遂に切腹に決す此際大石の心事細川侯の義侠又は夫妻親子訣別最後の決心等を脚本として之を五幕に作る櫻痴先生の斯文に堪能なる新に喋々を要せず江湖の諸君乞ふ陸續御購讀あらんことを

福地櫻痴居士著(脚本)

●肥後武士江戸藝者 花盛劇楓葉

全一冊洋裝菊判
紙數百十八頁
正價金貳拾五錢
郵税金四錢

福地櫻痴居士著(脚本)

●山中平九郎

全一冊洋裝菊判
紙數百五十二頁
正價金參拾錢
郵税金六錢

高安月郊君著(脚本)

●江戸城明渡

全一冊洋裝菊判
紙數八十六頁
正價金貳拾參錢
郵税金六錢

發兌元 東京本町 博文館

文學士 小山内薫君著

演劇新潮

全一冊 洋裝四六判裝釘洒落
紙數三百九十頁
正價金五拾五錢
郵税金六錢

新版大好評

俳優は讀め！興行主は讀め！好劇家は讀め！

この書は學問の書に非ず、議論の書に非ず、研究の書に非ず。無臺の組織より俳優の技藝に及び、俳優の技藝より脚本の解剖に及び演劇一切の實際的新思潮を平明なる文章もて叙せる趣味の書なり。

年若き著者が鬱勃たる演劇革新の心願は十數葉の美しき挿畫と共にこの書の紙間に收めらる。

博文館發行

水谷不倒君校訂　博文館編輯局校訂

脚本傑作集

全二冊洋裝中判脊皮上製
紙數一冊千百頁 上卷發賣禁止
正價金六拾錢＝小包拾貳錢

江戸時代諸名家の脚本中最も巧妙にして興味多く古來劇に演じて尤も行はれたるものを蒐む我劇詩の妙を味はんと欲するものは此書を措て他に求むべからず劇を好む人文字を嗜む人共に一書を備へざるべからざる珍書なり

校訂 **併優全集**

全一冊洋裝中判脊皮總クロース美本紙數九百七十六頁
正價金六拾錢＝小包拾貳錢

目次

○爰仙天網島○枝珊瑚京打笄○三日月おせん○聞勇八幡祭○其俤夕暮譚○ぬしや誰問白藤○春の曙○風俗三國志○伊達姿辰巳八景○和歌三神由來○手前味噌○色三味線○流行歌○いろは假名娘席書○向人廓山彦○蝶雙春花壇○傾城が嶽杜若紫再咲○娘客意氣地○尾上松緑○狂言袴○手前味噌

發兌元　東京本町　博文館

幸田露伴先生校訂

和泉大藏
兩派對照

狂言全集

全三冊

和裝中判横綴美本
總紙數約千三百頁
正價一冊金五拾錢
郵税一冊金八錢

上卷目次

○烏帽子折り
○相合袴
○宗論
○あかぐり
○羯鼓炮碌
○こくわい
○内沙法
○福渡
○伊文字
○鈍根草
○長光
○ぶがつちり
○抜殻
○七騎落
○奈須の與市
○釣女
○梯賣
○伯母酒
○富士松
○生捕鈴木
○紺屋編
○二千石
○梯武山伏
○惡坊花子
○連歌毘沙門
○河原新市
○目近大名
○蛭子大黒殿
○酔覆奈
○舟ふな
○茶壺すり
○佛師
○成上物
○素襖落
○鶏立江
○俄道心
○牛馬
○竹子爭
○金岡
○寶笠
○磁石
○居抗藏
○荷文
○猿替勾當
○鰍庖丁
○荒勘聟
○寢聲

中卷目次

○見物左衛門
○相子俵
○飛越新發意
○朝比奈川
○入間こんぶ布施
○蟹山伏
○節分
○狐盗人
○狐塚
○針立雷
○菊花
○六地藏
○箕かつき
○鬼養子
○末廣がり
○ひめ棚
○萩大名
○栗田口
○文山だち
○豆山伏
○胸つき
○文藏法師物狂
○貰聟笠の下
○薩摩守
○文山だち
○不立度句連歌
○鹿狩人大名
○岡太夫
○秀句大名
○櫻静
○雁爭
○路連坊主
○暇袋
○鶯宵薬煉
○つんぼ座頭
○子盗人
○禁野鏡
○士産輪
○三人片
○六人僧
○黒塗女
○どちはくれ

下卷目次

○佐渡狐
○祇園女
○犬山伏
○烏山伏
○水新發意
○汲こ
○布施
○石神
○茶盃拜
○餅酒善
○祐善
○双六僧
○圓しゅうり
○罪人
○合柿
○枕物ぐるい
○施ない
○柴阿彌
○盗人連歌
○水論聟
○松の樹
○馬祭
○比丘尼
○腰ぐもり
○いのり
○老武者
○八尾地藏
○文相撲
○棒しばり
○煎物賣
○横座
○止動方角
○若きあま
○鎧宜山伏
○人馬松ゆづり藁
○米市
○三人百性
○手負山賊
○ふさし十王
○唐人相撲
○鼻取相撲
○鐘の音
○若市
○料理聟
○通圓聟
○塗師平六
○樋のさけ

發兌元　東京　博文館

大和田建樹先生の謠曲通解出てゝより茲に十有五年、四方購讀諸君の增加する事、年一年よりも多きは弊館の榮とする處、更に今般先生に請ひて大訂正を加へ、總說を增し、曲數を增し、註釋を增し、評語を加へ、總假名を附し、其他大に體裁面目を一新して謠曲評釋と名づく、全部を通じて曲名を伊呂波順に並列し、終に語釋の索引を附して讀者諸君に至便ならしむる如きは其最たるものなるべし

大和田建

謠曲

第一輯

○總說○能の起源○流儀の分れ○謠の作者○謠本○內外二百番○明和の改正○謠の文章（上）○謠の文章（下）○裝詞○謠本の符號○題目の異同○岩船○碇潛○一角仙人○稻荷○生田敦盛○池禽○籠太鼓○籠祇王○鉢木○初雪○花軍○花筐○班女○放下僧○白樂天○羽衣○橋辨慶○半蔀○橋供養○芭蕉○鶴龍田

第二輯

○錦戸○錦木○佛原○辨內侍○融○島追○東方朔○東北○東岸居士○藤榮○木賊○朝長知章○巴○輪藏○鵺○大蛇○姨捨○女郎花○小鹽○和田酒盛○往生院○和國○蛙○苅萱○通小町○合浦○葛城○葛城天狗○兼平○鐘引○鐵輪

第三輯

○烏羽○邯鄲○咸陽宮○景清○高野物狂○笠卒都婆○杜若○柏崎○加茂○鴨長明○加茂物狂○春日龍神○弱法師○頼政○夜討曾我○芳野○吉野天人○吉野靜○第六天○大瓶猩々○當麻○大佛供養○泰山府君○大會○谷行○高安小町○高砂○忠度○忠信○龍田○立田物狂○陀羅尼落葉○湛海○田村○檀風

第四輯

丹後物狂○玉井○竹雪○唐船○玉葛○卒都婆小町○道明寺○道成寺○闘田○土庫○土蜘蛛○鶴岡○鵜飼○室君○鼓瀧○六浦○經政○鱗形○寢覺○善知鳥○難波○鵜飼○雷電○歌占○羅生門○空蟬○采女○浦島○野宮○浮船○梅○雲林院○梅枝○鵜羽○井筒○鵜祭○雨月○野守○有近

樹先生編

評釋

全九冊

和裝大判製本優美

一冊紙數二百五十頁

總紙數二千三百頁

定價

一冊金參拾五錢

九冊金貳圓八拾錢

郵稅一冊金六錢

第五輯

○老松○大原御幸○大社○大江山○落葉○翁○隱岐院○黑塚○車僧○皇帝○花月○吳服○鞍馬天狗○熊阪○草薙○九世戸○國栖○養老○揚貴妃○山姥○八島○鞠○松風○松浦鏡○松虫○松尾○松山鏡○松山天狗○滿仲○枕慈童○卷絹○舞車○源太夫○元服曾我

第六輯

○現在七面○源氏供養○絃上○藤○藤戸○二人靜○船橋○船辨慶○富士太鼓○富士山○伏木曾我○伏見○碁○木幡○護法○粉川寺○小鍛冶○小督○小袖曾我○項羽○胡蝶○戀重荷○江島○江口○籠○定家○天王寺物狂○天鼓○調服曾我○淡路○蟻通○安宅○熱海○敦盛

第七輯

○嵐山○鸚鵡小町○藍染川○惡源太○綾鼓○海士○葵上○阿漕○朝顏○蘆刈○飛鳥川○西行○櫻○佐保山○逆鉾○實盛○三笑○草子洗小町○櫻川○佐々木○鷺○切兼曾我○碪○祇王○清經○木曾願書○金札○熊野○夕顏○雪○遊行櫻○弓八幡○和布刈○通盛○三輪○三山

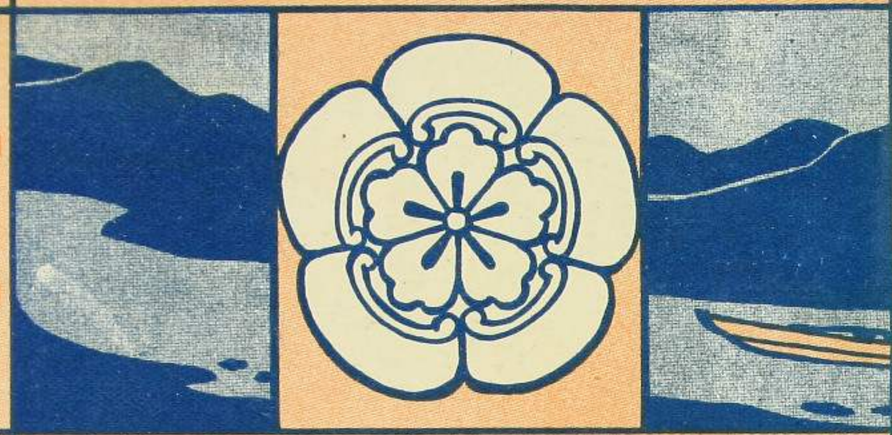
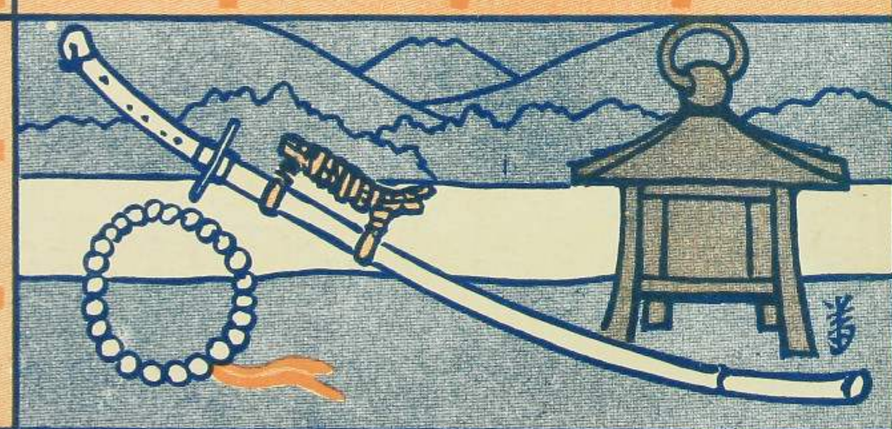
第八輯

○水無月祓○水無瀨○三井寺○身延○御裳濯○代主○七騎落○志賀○鐘馗○自然居士○白髭○舍利○正尊○上宮太子○正儀世守○猩々○石橋○十番切○俊寬○春榮○俊成忠度○侍從重衡○烏帽子折○繪馬○廣基○雲雀山○檜垣○常陸帶○氷室○飛雲○百萬○求塚

第九輯

○紅葉狩○西王母○清閑寺○誓願寺○善界○攝待○殺生石○禪師曾我○千手○昭君○赤壁○關原與市○關寺小町○蟬丸○須磨源氏○住吉詣○隅田川○墨染櫻○索引蘭曲數十篇

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 振替貯金口座東京二百四十番 博文館

博文館　淨瑠璃書類　發行

饗庭篁村君校訂▲近松時代淨瑠璃　全一冊中判上製　紙數千八頁　正價金六拾錢　小包料拾貳錢
博文館編輯局校訂▲近松世話淨瑠璃　全一冊中判上製　紙數千四十四頁　正價金六拾錢　小包料拾貳錢
水谷不倒君校訂▲續近松淨瑠璃集　全一冊中判上製　紙數千九十頁　正價金六拾錢　小包料拾貳錢
仝　君校訂▲近松半二淨瑠璃集　全一冊中判上製　紙數千九十頁　正價金六拾錢　小包料拾貳錢
仝　君校訂▲並木宗輔淨瑠璃集　全一冊中判上製　紙數千四十頁　正價金六拾錢　小包料拾貳錢
仝　君校訂▲紀海音淨瑠璃集　全一冊中判上製　紙數千十頁　正價金六拾錢　小包料拾貳錢
仝　君校訂▲竹田出雲淨瑠璃集　全一冊中判上製　紙數千四十六頁　正價金六拾錢　小包料拾貳錢
仝　君校訂▲文耕堂淨瑠璃集　全一冊中判上製　紙數千十頁　正價金六拾錢　小包料拾貳錢
仝　君校訂▲江戸作者淨瑠璃集　全一冊中判上製　紙數千六十頁　正價金六拾錢　小包料拾貳錢
博文館編輯局校訂▲淨瑠璃名作集　全一冊中判上製　紙數千頁　正價金六拾錢　小包料拾貳錢